

太宰府市の文化財 第60集

大宰府条坊跡 20

—第199次調査—

2002

太宰府市教育委員会



SE010 柰内出土白色土器



SK065 出土緑釉陶器



SE130 暗灰色土出土緑釉陶器



第199次調査出土緑釉陶器



SK120 灰褐色土出土石帯



SE045 柰内出土墨書土器

序

大宰府条坊跡第199次調査は、市営住宅の建設に伴って実施しました。調査地は菅原道真が住んでいたと伝えられる榎社の東側に位置し、大宰府政庁から延びる中央大路に近接しています。今回の発掘調査では緑釉陶器などの貴重な遺物をはじめ、道路、建物、井戸など当時の生活空間を知る上で、貴重な成果を得ることができ、大宰府条坊の解明に大きな手がかりになるものと考えられます。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財調査に対してご協力頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成14年3月
大宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例言

1. 本書は太宰府市朱雀4丁目270-1に所在する大宰府条坊跡第199次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N. (座標北) を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は宮崎亮一、中西武尚 (現大分市歴史資料館)、西野範子 (金沢大学大学院) が行い、調査区全景の空中写真は (有) 空中写真企画が行った。
4. 出土した鉄製品の保存処理は下川可容子、安芸朋江が行った。
5. 遺物の実測は担当者のほか森田レイ子、阿部浩子、酒井三保子、境一美、松本理栄子が行い、遺物の写真撮影はフォトハウスおか (代表 岡紀久夫) が行った。
6. 図の浄書は宮崎、森田が行った。
7. 本書に用いた分類は基本的に以下のものによっている。
土器 【宮ノ本遺跡II -壙跡篇-】 太宰府市教育委員会 1992
【大宰府条坊跡II】 太宰府市教育委員会 1983
陶磁器 【大宰府条坊跡XV】 -陶磁器分類編- 太宰府市教育委員会 1999
製塩土器 森田勉 「焼塩壺考」 『大宰府古文化論叢』 九州歴史資料館 1983
8. 本書の執筆は第4章 (1) を森田、その他は宮崎が行った。
9. 編集は、宮崎が担当した。

目次

1、調査経過と調査体制	1
2、遺跡の位置と環境	4
3、調査の成果	
(1) 現況と層位	4
(2) 検出遺構	4
(3) 出土遺物	19
4、調査まとめ	63
(1) 緑釉陶器について	63
(2) 条坊について	68

大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

↑出現、↑増加、↓減少

2000.2補訂

紀年銘	AD.	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式 (型式の上限)		瀬織磁器	半瀬織磁器
				灰胎	緑釉		
⑥	900	V	(A古)	鎌倉O-10 井ノ丸塚G-78	長門?・畿内	白磁I類 越州窯系青磁III類 長沙窯系青磁・黄釉 埴形・埴輪	唐三彩・二彩 絞胎
	825	VI		黒松K-14	長門・海北・(海 陸)1・(黒賀K-14)		
	850	VII	(A新)	福岡S-4 黒松K-90	洛西 黒松K-90	青磁埴形・埴輪 初期イスタム陶器	
	900	VIII					
①	925	IX	(A新)	北原山I (折戸O-53)	近江	越州窯系青磁III類 白磁XI類	
	950						
	1000	X	(B)	折戸O-53		越州窯系青磁III類 白磁XI類	
	1050	XI		東山社-72 (丸石2)			
②	1100	XII	(C)	丸石2 百代寺 東山H-105 福岡S-1		白磁II類,III,IV,V1~3,VI,XII, XIII類 黒II,IV,V,VI,VII類	初期龍泉窯系・阿安窯系青磁の類 越州窯系青磁 初期高麗青磁I,II,III類 青白磁
				XIII			
	1150	XIV	(D)			龍泉窯系青磁II-1~4,6, III類 阿安窯系青磁II-IV,III類	白磁II,III,V-4,黒山類増加
	1200	XV			白磁II,VII,III-1類		
	1230	XVI	(E)			龍泉窯系青磁II-a,b類	白磁III-VII-2類
③	1250	XVII			龍泉窯系青磁III類 白磁IX類		
		XVIII	(F)				
④	1300	XIX		(G)			龍泉窯系青磁IV類
	1330						
⑤	1350	XX					
⑦	1450						
	1500						

紀年銘資料

- ①AD.927 延長5年,大宰府74次SD205A 溝
 ②AD.1091 寛治5年,平安京左京4条1坊SE8 井戸
 ③AD.1224 貞応3年,大宰府33次SD605 溝
 ④AD.1304 嘉元2年,大宰府109.111次SD3200溝
 ⑤AD.1330 元應2年,大宰府45次SX1200池
 ⑥AD.784 延暦3年,長岡京102次SD10201溝
 ⑦AD.1459・1465,長祿3・寛正5年,福岡市井相田CII・SG16池
 ⑧AD.1501 文龜元年,大宰府70次SD1805溝
 ⑨AD.1265 文永2年,博多62次713土溝

文献

- ①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 ②田辺昭三・吉川義彦「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
 ③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
 ④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
 ⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
 ⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
 ⑦福岡市教育委員会「井相田C遺跡II」【福岡市埋蔵文化財調査報告書179】1988
 ⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 ⑨福岡市教育委員会「博多48」【福岡市埋蔵文化財調査報告書397】1995

1、調査経過と調査体制

調査地は太宰府市朱雀4丁目270-1で、大宰府条坊跡の中心付近に位置する。

調査原因は地区道路整備事業に伴って、その路線が朱雀3丁目2584-1、2584-2に所在する御垣野市営住宅を通ることになり、その移転先である今回の対象地を調査することになった。現地での調査は、平成10（1998）年3月17日～7月21日まで実施した。調査対象面積は1100.03㎡、調査面積は905㎡を測る。その後、1999年に移転新築された市営住宅の敷地の一面には、今回の調査成果を含めた周辺遺跡の説明板が設置された。

なお、これらの調査に伴う整理作業は、太宰府市文化ふれあい館において、平成13（2001）年度に行った。調査及び整理の関係者は以下のとおりである。

（平成10/1998年度）・・・・・・発掘調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一（調査担当）
	主任技師	城戸康利 山村信榮 中島恒次郎 井上信正
	技師	高橋 学
		宮崎亮一（調査担当）
	技師（嘱託）	下川可容子 森田レイ子
	調査補助員	中西武尚（現大分市歴史資料館）

（平成13/2001年度）・・・・・・整理報告

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原 稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮 中島恒次郎 井上信正 高橋 学
		宮崎亮一（整理担当）
	技師（嘱託）	下川可容子 森田レイ子 佐藤道文

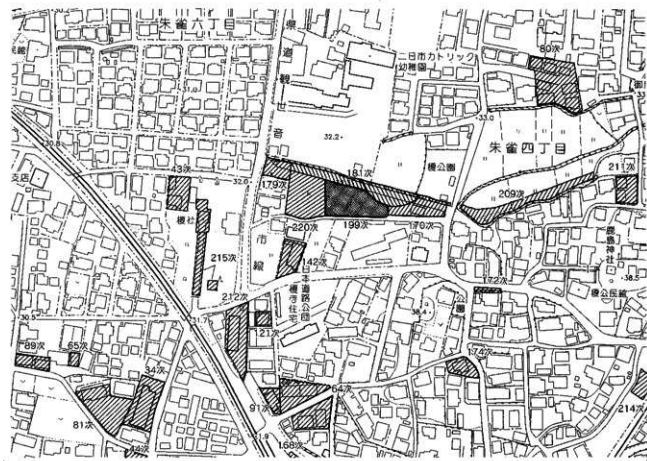


Fig.1 第199次調査位置図および旧地形図 (上図,昭和23年、下図,平成10年 上が北)

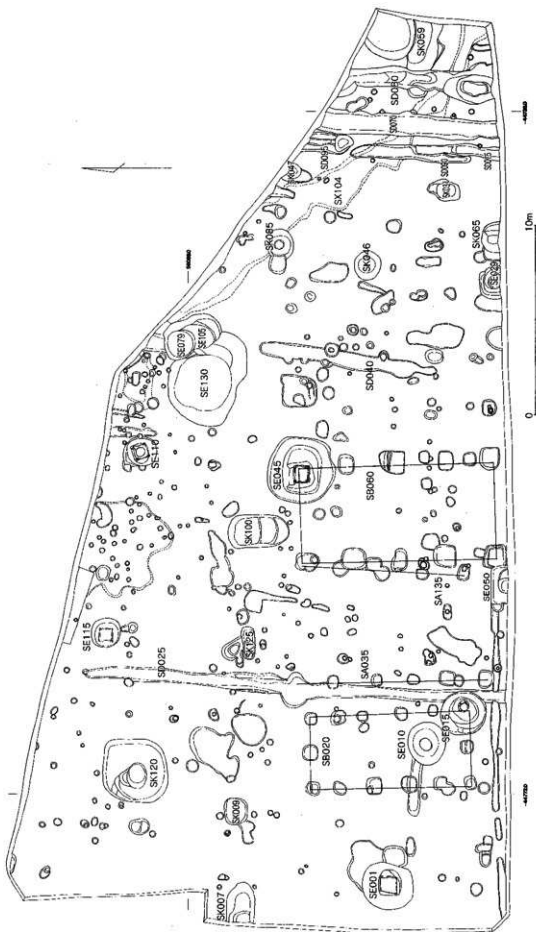


Fig.2 第199次調査遺構全体図 (1/200)

2、遺跡の位置と環境

調査地は大宰府条坊跡左郭十条一坊に位置し、東に奈良・平安期の大宰府条坊跡の朱雀大路推定ラインを望むことができ、それを挟んだ位置には菅原道真の南館があったといわれている覆社がある。また、調査区北側に細い水路が走り、水路を挟んで北側の字名は御垣野で、調査地を含む一帯は字を隈といい、調査地の南東約100mの丘陵上に残る菅原道真の息子である隈麿の墓に由来するものと伝えられている。

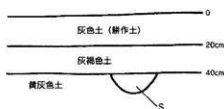


Fig.3 第199次調査土層模式図

3、調査の成果

(1) 現況と層位

調査前は水田で、調査区北側を水路が走っていた。灰色の耕作土が厚さ約20cmあり、その下に灰褐色土が約20cm堆積する。遺構は、その下の灰色砂と黄灰色土が入り乱れた層に残存している。遺構が残存する地盤は、水はけが非常に良好である。

(2) 検出遺構

掘立柱建物

199SB020 (Fig.4・5、Pl.3・6)

南北棟で2間×5間で、振れはN-0° 45' -W程度で、柱間は約1.25~2.0mで、やや不規則な間隔である。柱掘り方はほぼ方形で長さ0.54~0.9m、深さは0.23~0.56mを測る。掘り方の埋土は全体的に黄灰色土や淡灰色土で、周囲の地山との区別がわかりにくく、ほんやりと確認できる状況であった。土層観察では柱痕跡が明瞭に確認できたものは少ないが、柱は抜き取られた可能性が考えられる。

199SB060 (Fig.4・5、Pl.3・4)

南北棟で1間×4間分確認しているが、調査区際のため、南に建物が続くことも予想され、4間を越える建物の可能性も考えられる。南北の柱間は約2.6mで、振れはN-1° 55' -W程度で、柱掘り方はほぼ方形で長さ0.8~1.3m、深さは0.41~0.77mを測る。当初はほんやりとした不定形の土坑が重なりながら並んでいたため、櫛列と考えていたが、同様に對に並ぶ大きな方形の掘り方が検出されたため掘立柱建物と判断した。全体的に掘り方の埋土は黄色土が混じるような灰色砂質土である。

櫛列

199SA035 (Fig.4・5、Pl.3・4・6)

SB020の掘立柱建物の東側を遮蔽するように掘り方が5個確認された。振れはN-1° 3' -W程度で、掘り方はほぼ方形で長さ0.54~0.96m、深さは0.51~0.54mで、柱間は1.8~2.25mを測る。また、北端の掘り方のさらに北側に、明確なプランとしては確認できていないが、SD025の底面に、掘り方と同様な埋土が僅かに残存していたことから、さらに掘り方がもうひとつ存在していたと考えられる。このことから建物より南北にやや長い櫛列が存在していたものと考えられ、柱間が5間で長さ約10.3mの櫛列であったと考えられる。埋土の状況から柱を抜き取ったものと考えられる。

199SA135 (Fig.4、Pl.3・4)

南北に並ぶ柱列があり、櫛列と考えられる。振れはN-3° 4' -E程度で、掘り方は不整形な方形で、長

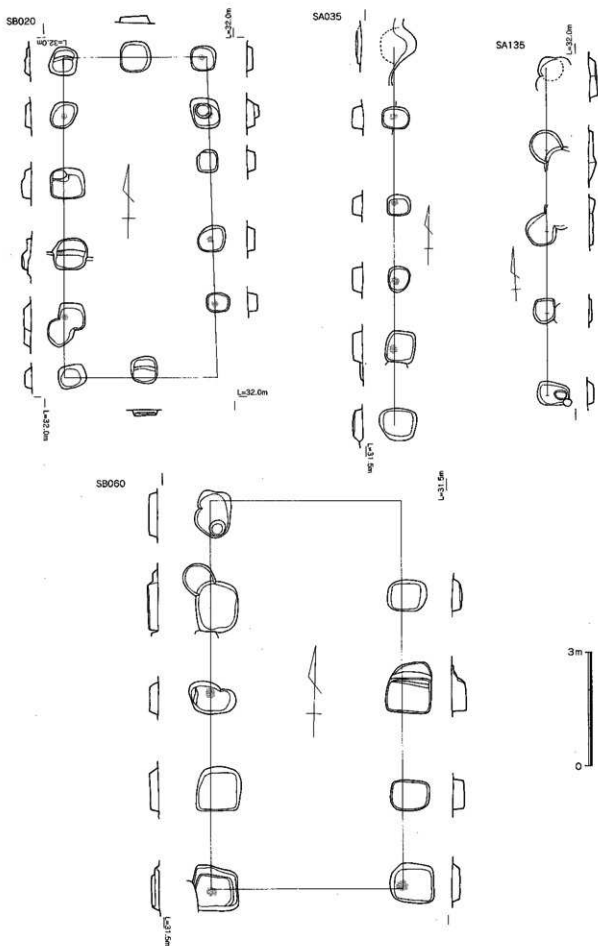


Fig.4 199SB020 · 060 · SA035 · 135遺構実測図 (1/100)

さ約0.58~0.85m、深さは0.15~0.35mで、柱間は約2.15mである。この欄列は199SB060の掘り方に切り込んでつくられている。

井戸

199SE001 (Fig.6, Pla.7)

掘り方が南北2.7m、東西2.6m、深さ約2.1mのほぼ円形をした井戸である。中央付近には一辺0.92mの方形の井戸枠が確認でき、四隅に支柱と枠材が残っている。木材の材質そのものの保存状態は悪く、また周囲が崩壊し始めたため取り上げることができなかった。縦板は幅0.11m前後で北側が7枚、東側が約7枚、南側が約8枚、西側が転落したものも多く、6枚以上と思われる。支柱は径約0.1mでやや不明瞭だがホゾを設け、横棧が切り込む形で残っていた。横棧は径約0.04m程で、掘り下げ途中にいくつか崩壊した。南側は横棧が残っているが、原位置を保っていない。東側は横棧はやや動いているものの原位置に近い状態で残っているものと考えられる。これら横棧は樹皮らしきものが残っていたため、自然木を利用したものと考えられる。

周囲の地山の砂質土と井戸枠との間には、黄色ブロック混じりの黒灰色土がみられ、この埋土が裏込めと考えられる。しかし、残存する井戸枠と掘り方の間にはウラゴメは殆ど見られない。特に北側はウラゴメが少ない。

また、井戸枠内の底面は湧水があり、明確に捉えがたいが、0.05m前後の石が多く見られ、支柱付近には0.01m程のやや大きな石が見られる。このレベルに限って大きな石が多くみられることから、人為的に置かれたものと考えられる。また、曲物等は検出されていないためこれらの小石が浄化機能を有していたものと考えられる。

199SE010 (Fig.7, Pla.8・9)

掘り方が南北2.0m、東西2.26m、深さ2.35mでほぼ円形をした井戸である。埋土は黄色ブロック混じりの黒灰色土で、中央やや西寄りに明瞭な黒色土の円形プランが確認された。

深さ1m付近で、井戸枠を囲むように13個の石と瓦が並べられている(2個は検出中に転落。その他数個転落したと思われる)。その周囲のウラゴメは明灰色砂でその前後には石囲いは見られなかった。その下も明灰色砂が約0.2m程続き、その下に黄灰色砂が井戸枠遺存レベルまで続く。

井戸枠は円形のいわゆる桶枠で、内径0.63×0.65mを測る。個々の板材は縦は長さ0.5m前後残り、下部は約0.1mほど埋め込まれていた。桶は全部で19枚の板材で構成されている。その中に曲物が2重に置かれ、外側の曲物が内径0.4~0.43cm、内側の曲物が内径0.32cmを測る。

井戸枠と曲物の間には間隔をあけて火を受け黒くなった石が置かれている。大小曲物の間には小石や土器片が見られる。内側の曲物内は黒褐色粘質土が堆積し、その下部に黒褐色粘質土にもまれる形で白磁皿と糸切りの土師器小皿が検出された。

井戸底からは、比較的きれいな湧水があり、40分程で曲物内が満水になるほどの湧水量である。また、外側の曲物と井戸枠との間からの湧水も目立つ。

199SE015 (Fig.6, Pla.10)

掘り方が南北2.4m、東西2.35m、深さ1.9mでほぼ円形をした井戸である。最上層中央付近で約20cm前後の石と50cm程の大石が2個検出された。

ウラゴメ土は上層が黄色ブロック混じりの黒灰色土で、下層は黄色ブロックを少量含む暗灰色砂質土で、他の井戸と異なり黒灰色土の量は少なく壁面の一部に挟り込んでいる。そして、井戸枠は東側に寄って検出され、黒灰色土の埋土下の砂層からは、黒色粘質土が円形状に確認され、井戸枠を検出した。井戸枠は径0.56~0.64mの桶枠で、土圧でやや内傾した楕円形を呈する。しかし、板材の保存状態は悪

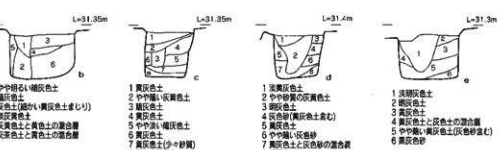
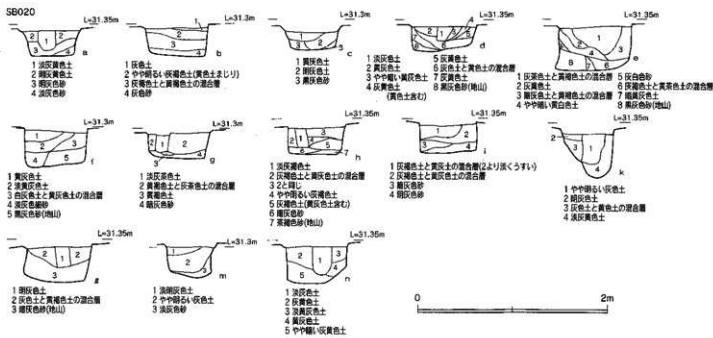


Fig.5 199SB020・060・SA035土層観察図 (1/40)

く、取り上げることはできなかったが、枠を構成する板材は約18枚程と推定される。その内側には内径0.4mの曲物が検出された。こちらも保存状態は良くない。井戸枠との間には10cm前後の川原石が不規則に置かれ、小石もみられる。曲物内の底は砂層で曲物中位まで湧水する。

なお、井戸枠や曲物は、雨による土砂の流入によって取り上げることはできず、また、保存状態も良

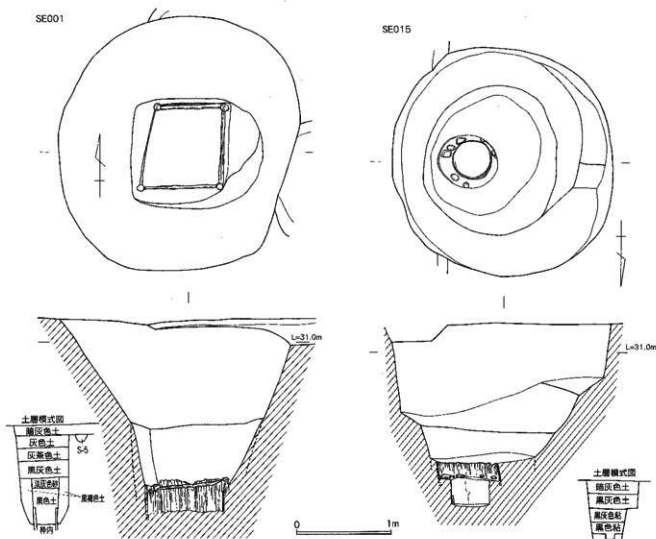


Fig.6 199SE001・015遺構実測図 (1/40)

好とはいえなかったため、現状のまま埋め戻した。

199SE029 (Fig.7, Pla.10)

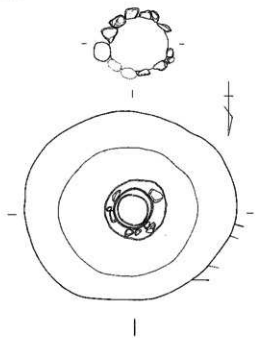
調査区際にある隅丸方形の土坑だが、形状から井戸として報告する。東西1.7m、深さ1.2m以上の掘り方で底まで検出していない。埋土は暗灰色土で下層の黒灰色土は湿気を帯び、骨片を含んでいる。

199SE045 (Fig.8, Pla.11~13)

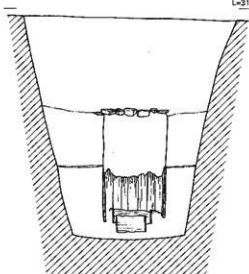
南北3.6m、東西3.44m、深さ1.95mで隅丸方形の掘り方をした井戸である。埋土の最上層である暗灰色土は、他の井戸に比べ固く締まっている。一段下げた段階で掘り方をひとまわり小さくしたような暗灰色のプランが確認されたが、西側は黒色が強く東端は茶色が強い。よって、西側ほどプランは明瞭であった。東側は内側と外側にぼんやりと二つのプランが見えたが、外側のプランで掘り下げた。よって、やや東西に長いプランになっている。さらに掘り下げていくとやはり西側に寄った黒灰色土の方形プランが確認できた。それを掘り下げ後まもなく青灰色の粘質土が厚く堆積していた。青灰色の粘質土は井戸枠プランから東側のウラゴメの方まで続いていた。

井戸枠は内法で南北0.7m、東西0.75mの方形で、非常に頑丈に作られ、四隅に径10~15cm程の丸木の支柱を立て、その支柱に横桟と入れ込むためのホゾが彫り込まれている。また、各支柱の間には丸太を半裁した材を立てている。横桟は2ヶ所ホゾにくい込んだ状態で検出された以外は、殆ど下にずれ落ちた状態で検出された。

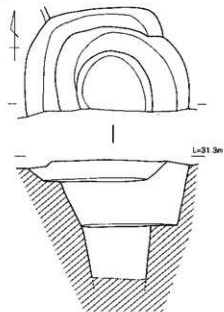
SE010



L=31.4m

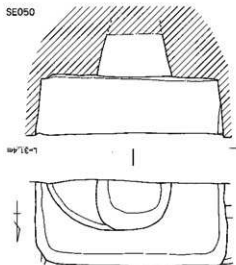


SE029

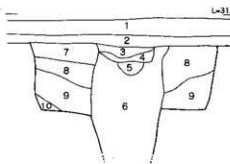


L=31.3m

SE050



L=31.2m



- 1 暗灰色土(新存土)
- 2 灰茶色土(灰土)
- 3 灰茶色土
- 4 灰層
- 5 黄灰色土
- 6 暗灰茶色土
- 7 暗灰茶色土(黄色ブロック少量まじる)
- 8 暗灰茶色土(黄色ブロック多くまじる)
- 9 灰茶色土(黄色ブロックまじり)
- 10 淡灰色土

Fig.7 199SE010・029・050遺構実測図 (1/40)

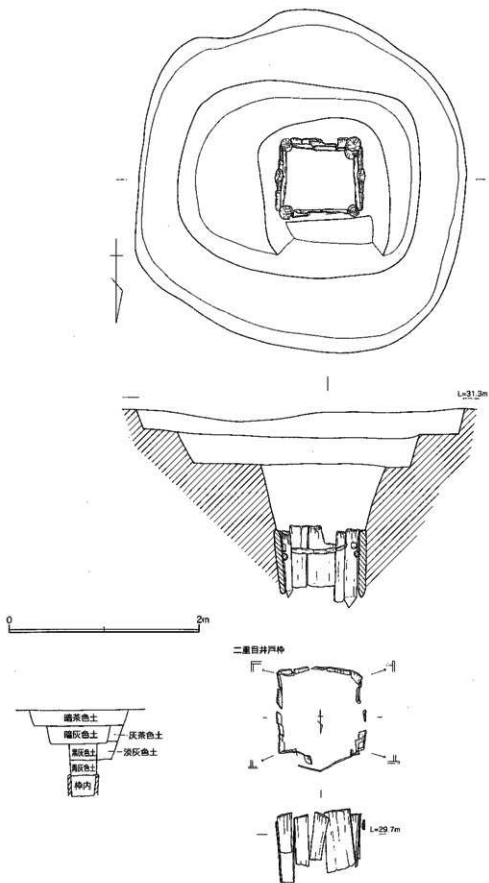


Fig.8 199SE045遺構実測図 (1/40)

支柱の裏にも縦板が配され、それらに続くように縦板が巡っていて、いわゆる2重構造の状態になっている。その外側は内法で南北0.78~1.05m、東西0.78~0.88mの方形を呈し、使用した部材は内外とも差はないが、外側の方が、内側より部材同志の隙間が目立っていた。これが偶然か意図的かの判別は難しい。また、外側の方が部材が深い位置まで刺さっていた。

支柱は先端が鉛筆状に尖っていて、その部分にホゾや穿孔を施しているのも多く見られた。そして、北側両隅支柱の先端の削りを施している部分が埋もれていた部分に、7~8cm程の川原石が2個置かれていた。支柱を押さえる機能は、果たしていない状態だったため、このレベルに川原石がばらまかれていた可能性が考えられる。底面には5cm前後の川原石が多く検出されたが、曲物等の痕跡は遺構として確認できなかった。

また、北側では特に多く大きな板材、2枚ずつ重なって合計5枚検出された。しかし、最も崩壊が著しかったのも北側である。

井戸枠内からは曲物の底板が5個出土した。井戸枠内の西、南端で検出され、南東隅から出土したものは曲物の側板が一部遺存していた。そして、1個は北側の内外の枠材隙間から検出された。

199SE050 (Fig.7, Pla.14)

調査区南端に位置しているため、半分が調査区から外れるため全容は不明である。南北0.9m以上、東西2mの方形の掘り方で、中央部分に径0.75mほどの円形の井戸枠痕跡を確認したが、調査区際のため完掘できず、井戸枠等については不明である。井戸枠部分の埋土である暗灰茶色土は、遺構検出面近くまで確認でき、その最上面には炭層が検出された。ウラゴメと考えられる埋土は、黄褐色土が混じる灰茶色土である。

199SE079 (Fig.9, Pla.15)

検出面から30cm程は灰褐色砂質土であったが、その下のプランとは埋土の違いが別遺構なのかは不明瞭。下層つまり黒灰色粘質土に黄灰色粘土ブロックが混じる埋土はSE105の井戸枠材検出面付近まで確認でき、その下は茶灰色砂のプランが続いている。茶灰色砂を取り除くに内法東西0.6m、南北0.68mの方形の井戸枠が検出された。西側は粘質土で、SK087との境のラインと井戸枠の西側のラインとが一致している。検出段階でS-87とした粘質土はSE079のウラゴメもしくは埋土と考えられる。

井戸枠は基本的に各面大きな一枚板で構成され、部分的にそれを補うように普通の板材が使用されている。井戸枠全体が土圧によって上部が内側に傾いている。枠内の黒灰色粘質土に混じって支柱推定される丸木が検出された。また、南西隅にも下まで残っていない丸木が検出された。

井戸枠の下方から0.1mの位置に、径0.05~0.06mの自然木を利用した棧が検出された。

井戸枠のさらに0.1m下から二重構造の曲物が検出された。外側は内径0.48m、高さ0.15m、内側は調査中に湧水等で崩壊したため正確でないが、径約0.28m、深さは約0.15mほどであった。この曲物は井戸枠より下で検出されたため、別遺構の可能性も考えられたが、位置的に井戸枠内の中心におさまっていることから、井戸枠と一体のものと考えられる。しかし、曲物が意味をなしていたかどうかは不明である。

199SE105 (Fig.9, Pla.16)

掘り方は南北約2.1m、東西2.2mを測り、埋土最上層である暗灰色土では、中央付近に15~25cm程の花崗岩石が多く検出された。これらの石は一部が火を受け焼けていものも含まれていた。埋土中位から砂質土に変わり、中央西側にやや灰色を帯びた砂質土が円形状にはんやり確認でき、その直下で井戸枠が確認された。相変わらず井戸枠内でも川原石が検出された。井戸枠は桶状で内径0.5mを測り、木材は底面から約0.5mまで残存していた。桶は幅約11cm程の板材15枚で成り立っていた。木材は一部芯が

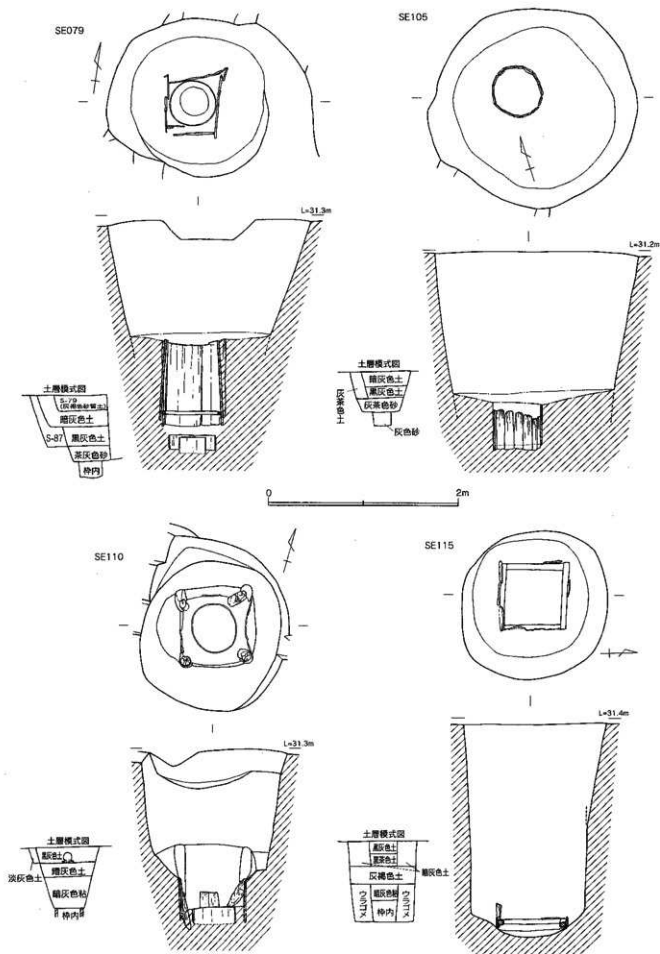


Fig.9 199SE079 · 105 · 110 · 115遺構実測図 (1/40)

残っているが保存状態は良好なものではなかった。井戸枠内は曲物等はなく、その痕跡すら確認できなかった。底面はやや固い砂質土であった。

199SE110 (Fig.9, Pla.17)

掘り方が南北1.78m、東西1.56m、深さ1.8m以上ではほぼ円形をした井戸である。埋土最上層の黒灰土中に残りの良い土師器壺が逆さに置かれた状態で検出された。周囲は黒灰色土でその他に完形に近いものは全くなく、一括廃棄の様子は全く見られない。壺の中には坏や瓦等の破片が少量見られた。その下の埋土も同じ黒灰色土で全く変化は見られない。

黒灰色土の下の中央付近には炭が固まって検出され、土層図のようなやや複雑な堆積状況を示している。全体的に各層は南にやや下がり中央付近が凹んでいる。

井戸枠は四隅に自然木の支柱が立て、その外側に縦板を並べている。大きさは内法で南北約0.7m、東西約0.67mを測る。縦板の遺存は悪く南側は全く残ってなく、北と西が僅かに残存し、東側の縦板は比較的残りは良いのだが、土圧によって弧を描くように遺存していた。さらに、井戸枠中央には大きな曲物が良好に残っていた。径は内法で南北約0.54m、東西0.45mを測り、西側に接合点が見られた。この内部にも曲物のような破片が検出されたが、同一のものか別のものかは確認できなかった。横棧は腐っていたが支柱のホゾに入り込んで残っているものもあった。

湧水が激しく、川の中で調査をやっているような状態で、曲物を取り上げた段階では縦板はすでに崩壊、回りはどンドン挟れていく状態であった。よって、底まで達することはできず、数値等はやや正確さを欠ける所も多い。また、井戸枠の北側地山に自然木が突き刺さっていたため除去したところ、激しい湧水があったが、自然木の意味は不明。

199SE115 (Fig.9, Pla.18)

掘り方が南北1.56m、東西1.56m、深さ2.2mで円形をした井戸である。表土を剥いだ時点できれいな暗灰色の円形プランとその中央に炭と石を多く含む黒灰色土の不整形なプランが確認できた。方形の井戸枠は内法南北0.6m、東西0.57mを測り、縦板は僅かに残存するのみであった。井戸底には曲物痕跡は確認できなかった。

199SE130 (Fig.10, Pla.19)

掘り方が南北3.7m、東西3.8m、深さ1.7mではほぼ円形をした井戸である。井戸のウラゴメは北側を中心に黄褐色ブロックまじりの灰褐色土で、南側が暗灰色砂質土である。

井戸枠はその検出状況から二時期あるものと考えられる。古い井戸枠は内法南北0.64m、東西0.68mの方形にホゾ組みし、その外側にくり抜き井戸枠を再利用したと思われる大きな材を置いている。しかし、井戸枠とくり抜き材との間に縦板が南側と東側に残存していることから、くり抜き材は湧水地点に近い最下部の補強の役目をしていたものと推定される。また、東側はくり抜き材ではなく、大きな川原石を用いている。

そして、その井戸枠内に不自然に角材が4本立っているが、こちらが新しい井戸枠の支柱と考えられ、何らかの要因で改修するにあたり、支柱となる杭を打ち込み新しい井戸枠を造ったと思われ、南北0.7m、東西0.65mの井戸枠が想定される。支柱以外に枠材は検出されていないため、このレベルは地中に埋まっていたため遺存していたものと考えられる。土層の切り合いで新旧を確認したわけではないが、支柱のある井戸枠を古いと考えたとすると、この支柱は当然取り除かれたであろうから、支柱の方が新しいと考える方が妥当だろう。井戸底は井戸枠から0.15m程掘り下がったが、曲物およびその痕跡は確認できなかった。

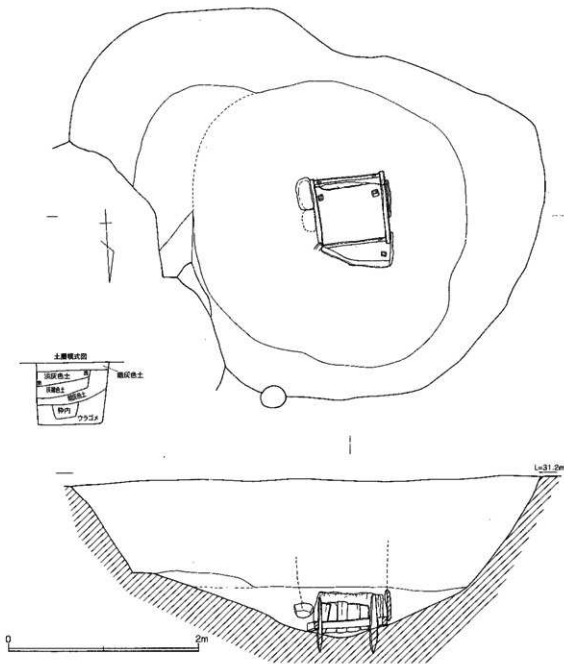


Fig.10 199SE130遺構実測図 (1/40)

溝

199SD025 (Fig.11)

振れはN-3° 13' -E程度で、長さ22.15m以上、幅0.6~1.05m、深さ0.15mの逆台形状に掘られた南北溝で、SE015を切って掘られている。F13付近でやや埋土が異なる部分が見られたが、別遺構が切りあっているという状態ではなかった。Hラインより北側の深さは浅く、周囲の黒灰色砂の地山と同化している。北側に向かって浅くなり、自然に消滅している。

199SD040 (Fig.11, Pla.20)

振れはN-7° 29' -E程度で、長さ9.3m、幅0.32~0.9m、深さ0.01~0.08mの非常に浅い南北溝で、遺物は若干出土しているが、その殆どは北半から出土している。

199SD070 (Fig.11, Pla.20)

振れはN-3° -E程度の南北溝で、長さ9.6m以上、幅0.8~1.34m、深さ0.2~0.35mの南北溝で、埋土は

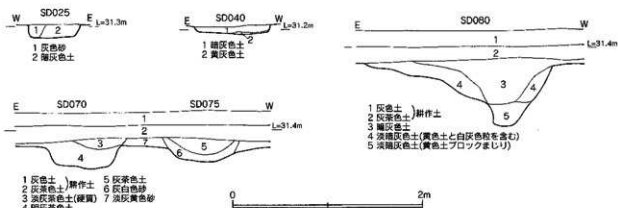


Fig.11 199SD025・040・070・075・080土層観察図 (1/40)

灰色土の上に薄く灰褐色土があり、その上にやや暗い灰色土がのっているような状態である。また、暗い灰色土は南側で途切れている。その周囲はややしまった灰色土である。暗い灰色土には9世紀代の土師器が混じっているが、灰色土には須恵器が多く、8世紀前半に近い遺物が多く出土した。時期の異なる溝が重複しているのか同一遺構なのか問題だが、北半にいくほど明瞭に暗い灰色土を検出されず、殆ど灰色土であったため同一遺構内の埋没過程の違いではないかと考えられる。

199SD075 (Fig.11, Pla.20)

振れはN-1° 20' -E程度の南北溝で、長さ7.85m以上、幅0.72m、深さ0.15mの南北溝で、底面は若干の起伏がある。

199SD080 (Fig.11, Pla.20)

振れはN-1° 48' -E程度の南北溝で、長さ8.1m以上、幅0.88~1.85m、深さは0.15~0.5mだがおよそ0.4m前後である。検出範囲の北半は底面が黒灰色の砂利層で、やや掘り込んで土坑状になっている。層位は土坑が確認された時点までの埋土が暗灰色土、土坑内で2層確認でき、上層が黒灰色土、下層が淡灰色土である。土坑底面は白灰色の細かい砂層である。南半は周囲が黄褐色土で土坑状に大きく掘り込んでいる。この土坑の層位は北側と同様に土坑が確認された時点までの埋土が暗灰色土、その後土坑内は黒灰色土であったが、そのさらには下に遺物こそ殆ど見られぬが、黄褐色土に灰色土が混ざったような一見地山と思うような埋土である。それが取り終わると白灰色の細かい砂層が現れる。しかし、その砂層の直上には厚さ3cm程の黒灰色の腐食土層が見られ、腐れた木も出土した。基本的には黒灰色土までが溝の遺構と考えられるが、その下の遺構については検討を要する。

199SD090

南北溝で、幅はSD075を切り合っていない部分で0.25m、深さ0.15mを測り、長さはSD075と重なっている部分を含めると6.3m以上の南北溝にある。SD075と切り合っていて、SD090の方が古く思えるが、その境はやや不明瞭である。

199SD095

南北溝で、SD075・090の延長上に位置し、一連の溝と考えられる。幅1.08m、深さ0.37mを測り、長さは2.7m分検出している。

土坑

199SK007 (Fig.12)

南北1.5m、東西2.2m、深さ0.58mを測る南北に長い土坑である。埋土は灰褐色の砂粒の細かい砂質土で、周囲の地山に近いので、人為的な埋土ではなく、また、遺物も目立った出土状態でないことから自然堆積と考えられる。

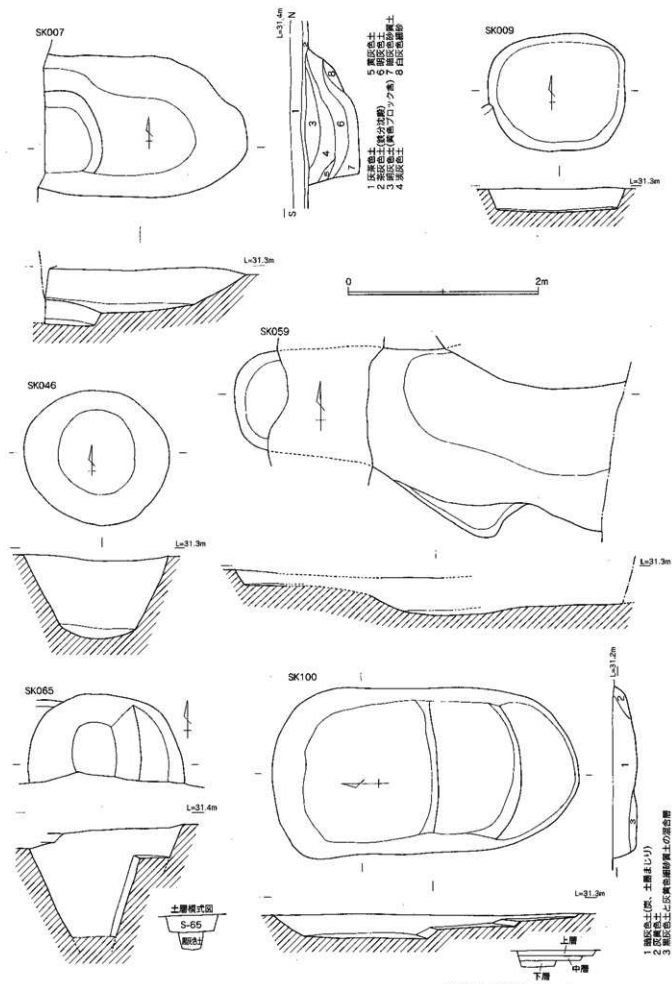


Fig.12 199SK007・009・046・059・065・100遺構実測図 (1/40)

199SK009 (Fig.12)

南北1.2m、東西1.45m、深さ0.25mで楕円形をした土坑である。埋土は黒灰色土である。

199SK031

南北1.7m、東西1.5m、深さ0.45mを測る楕円形をした土坑である。

199SK046 (Fig.12)

南北1.4m、東西1.15m、深さ0.86mでやや楕円形をした土坑である。埋土は暗灰色土である。

199SK047

南北1.6m、東西0.95m、深さ0.25mを測る。南側は約0.03mと浅く、北側が深い。土坑として報告するが、調査区際のため溝の可能性も考えられる。

199SK059 (Fig.12)

SD080を挟んで検出されたS-61も同一遺構と考えられ、SD080によって切られた状態である。全体は南北約1.7m、東西4.1m以上、深さ0.4mで、溝状の土坑として報告する。黒灰色土がU字形に埋没し、その下の北側のみに灰色土混じりの暗灰色土が堆積している。黒灰色土には南側の地山と同様の黒灰色粗砂が混じっているが、灰色土混じりの暗灰色土には砂粒は目立たない。同一遺構内の堆積の違いと考えられる。

199SK065 (Fig.12, Pla.21)

南北0.95m以上、東西1.65m、深さ1.2m以上で円形をした土坑である。調査区南端に位置し、全体の半分ほどしか調査できず、底も完掘できていないため全容は不明のため、井戸である可能性も考えられる。暗灰色の埋土で遺構面から比較的浅い位置から緑釉陶器碗が出土した。同様に浅い位置で見つかった龍泉窯系青磁碗片は混入と考えられる。

199SK085 (Fig.13)

南北1.5m、東西1.6m、深さ0.93mで円形をした土坑である。底面中央には径0.5m、深さ0.2mほどの円形の穴が検出された。緑釉陶器、越州窯系青磁碗、灰釉陶器など多くの遺物が出土している。埋土は炭混じりで特別な層位はなく上位から単純な層位が確認され、廃棄土坑の可能性が考えられる。

199SK100 (Fig.12)

南北3.25m、東西1.8m、深さ0.25mでやや南北に長い土坑である。底面は南側から段々に検出され、埋土は殆ど暗灰色土で各段とも特に変化はない。

199SK120 (Fig.13, Pla.21)

南北3.45m、東西3.3m、深さは若干の起伏があるが、およそ0.6m前後で隅丸方形をした土坑である。中央が砂質土周囲が黄灰色土ブロック混じりの暗灰色土である。一見、円形周溝遺構のような状態で検出されたが、堆積状況を見ると中央の灰色砂が厚く堆積し、それにもぐり込むように黄灰色土ブロック混じりの暗灰色土が続いている。

土層観察から北側から堆積した状況が確認でき、南側に一番新しい層が見られる。東西断面はU字形の堆積である。中位に灰茶色砂質土が厚く堆積していることや検出段階でも砂質土が中央付近に覆っていたことなどから、この土坑は自然堆積によって埋没したと推測される。

中央底部付近にはさらに南北1.05m、東西1.35m、深さ0.5mを測る土坑があり、湧水も若干ある。井戸の可能性も考えられたが、湧水に関しては調査時期が梅雨ということに起因するものと考えられ、遺構内の壁や床面は全て砂質で不安定な状態であることから、現段階では井戸の可能性は否定したい。

なお、遺構面から0.15m程の浅い位置から土帯が出土しているが、U字形に堆積している黄灰色土ブロック混じりの暗灰色土の端のため、層位的には古い層からの出土である。

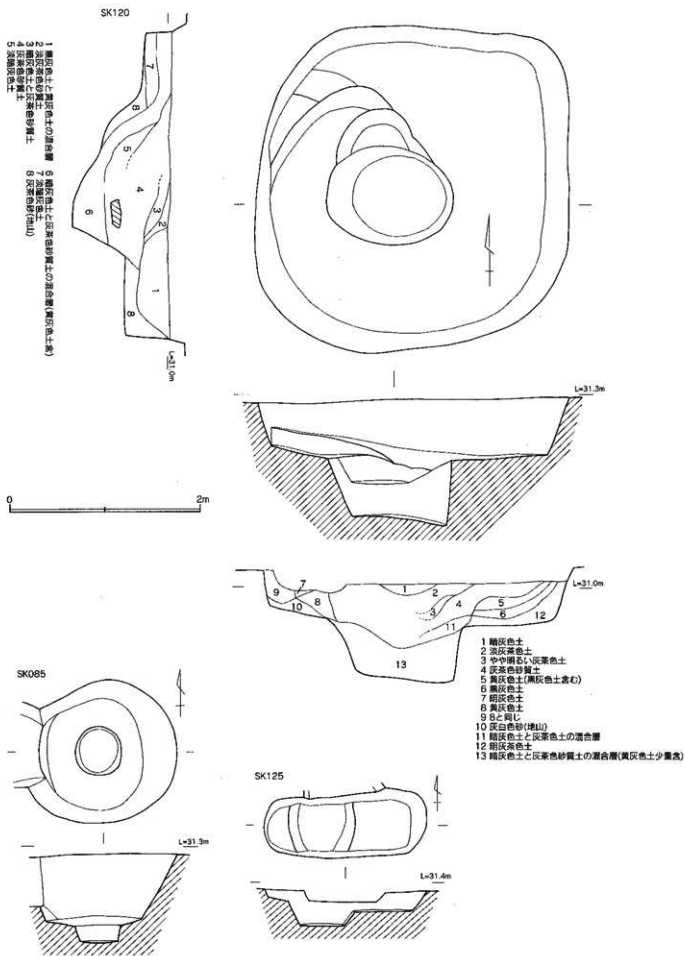


Fig.13 199SK085・120・125遺構実測図 (1/40)

199SK125 (Fig.13)

南北0.75m、東西1.73m、深さ0.4mで東西に細長い土坑である。全体的に遺物を多く含んでいる。その形状から木棺墓の可能性も考えられたが、それらしい痕跡は確認出来なかった。また、中央付近の底面が円形に一段低い。

その他の遺構

199SX063

SE130敷上面に掘り込まれた径0.3m、深さ0.35cmのビット。

199SX104

調査区の東側を斜めに横切る溝状の遺構で、幅は不規則で0.25m～2.25m、深さは0.15～0.35mを測る。その状況から流路と考えられる。

(3) 出土遺物

井戸

199SE001灰色土出土土器 (Fig.14、Pla.22)

土師器

小皿a (1、2) 底部切り離しはヘラ切り。それぞれ口径は8.2cm、9.6cm、器高は1.1cm、1.2cmを測る。

丸底坏a (3) 体部中位が僅かに膨らみを帯び、屈曲している。屈曲部の下には指頭圧痕が確認できる。内面は磨滅し調整不明。

黒色土器

小皿a (4) 復原口径10.2cm、器高1.7cmを測る。外面底部はヘラ切り。外面上部と内面にはミガキcが明瞭に残る。

199SE001黒灰色土出土遺物 (Fig.14)

土師器

小皿a (5～8) 復原口径9.2～10.8cm、器高1.05～1.3cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。その他の面は回転ナデ調整。

碗c (9) 高台の端部が外反する。器面は磨滅し調整は不明だが、その外反については端部調整のヨコナアした際に変形したものか。

黒色土器

碗c (10) 復原高台径9.2cm。内面には僅かにミガキcが残る。外面調整は磨滅し不明。

石製品

平玉石 (11) 大きさは1.25×1.1cm、厚さ0.45cm。白色の石材を使用。

199SE001黒色土出土土器 (Fig.14、Pla.22)

土師器

小皿a×坏a (12) 底部のみのため小皿か坏かの判別は難しいが、体部と底部の境はやや丸味を持つ。底部切り離しはヘラ切り。

碗c (13、14) 若干細い高台で、それぞれの復原高台径は7.6、7.7cm。内外面とも回転ナデか。

黒色土器

皿a (15) 復原口径12.0cm、器高2.1cm。体部は内湾しながら立ち上がる。底部は回転ヘラ切り。その他は内外面ともミガキcを施す。

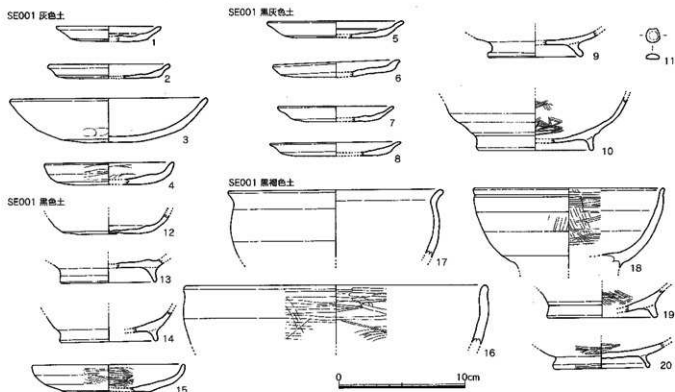


Fig.14 199SE001出土遺物実測図 (1/3)

鉢 (16) 口縁部はほぼ直口だが、端部を僅かに外反させる。内外面とも調整はミガキcで、外面は黒色土のようにやや黒味がかっている。復原口径24.0cm。

199SE001黒褐色土出土土器 (Fig.14)

土師器

甕 (17) 復原口径17.0cm。調整は内外面とも回転ナデ。外面は二次焼成によるススが附着する。

黒色土器

碗c (18~20) 18は復原口径15.0cm。体部中位までヘラケズリ。口縁端部外面には浅い段が付いている。内面はミガキc。A類。19は復原高台径8.8cm。内面にミガキcが明瞭に残る。A類。20は復原高台径7.6cm。調整は底部外面はナデ、その他の内外面はミガキc。高台内側の不規則な沈線状の段が見られる。B類。

199SE010黒灰色土出土遺物 (Fig.15, Pla.38)

土師器

小皿a (1, 2) 底部はヘラ切りし、板状圧痕を残す。

瓦器

碗c (3) 焼成は不良。復原高台径7.6cm。

緑釉陶器

碗 (4) 胎土は精製され、灰白色を呈する。釉はやや濁った黄緑色で、やや厚めに施釉されている。高台畳付けに浅い沈線が見られる。

金属製品

鉄製品 (5) やや太い方形したもので、鉄釘と考えられる。

199SE010黒色土出土遺物 (Fig.15)

土師器

小皿a (6~11) 口径8.8~10.4cm、器高0.9~1.3cm。10、11は底部ヘラ切り。その他は底部糸切り。

坏a (12) 底部切り離しは糸切り。

瓦器

碗c (13) 三角形をした低い高台を貼付する。内面にはやや不明瞭だが、ミガキがある。復原高台径7.1cm。

石製品

滑石加工品 (14) 石鍋の把手の部分だが、不規則に割れた断面には、部分的に研磨した痕跡が残る。

199SE010黒褐色土出土土器 (Fig.15、Pla.22)

土師器

小皿a (15) 底部切り離しはヘラ切り。

坏a (16、17) 底部切り離しは糸切り。色調は明橙色を呈し、焼成は良好。

瓦器

小皿a (18) 口径10.0cm、器高2.1cm。内面は強いナデが施されている。底部は糸切りで、その後板状圧痕を残す。

199SE010黒灰色砂出土遺物 (Fig.15)

土師器

小皿a (19~21) 復原口径はそれぞれ9.0cm、9.4cm。19、21は底部ヘラ切り。

瓦器

碗c (22) 低く丸味のある高台を付す。外面底部には板状圧痕が残る。復原高台径7.2cm。

瓦加工品

瓦玉 (23) 大きさは2.35×2.0cm、厚さ1.7cm。

199SE010マゲモノ内出土土器 (Fig.15、Pla.22)

土師器

小皿a (24) 底部切り離しは糸切り。内面底部は不定方向のナデ。

白磁

皿 (25) 口径9.9cm、器高2.95cm、底径3.1cm。VI-1a類。

199SE010枠内出土土器 (Fig.15、巻頭図版)

土師器

碗c (26) 白色土器と呼ばれるもので、内面はミガキbのあとミガキcを丁寧に施し、外面もミガキcを丁寧に施している。高台や底部内面も丁寧に回転ナデを施している。

中国陶器

天目碗 (27) 復原口径11.5cm。口縁部内面に稜を付けて僅かに外反する。

199SE010出土遺物 (Fig.16、Pla.22・23)

木製品 (Tab.5)

縦板 (1~11) この井戸は19枚の板材からなる円形の桶を利用していった。そのうち、調整の加工以外に加工を施しているものを図化した。全体として表面は腐食し、調整痕跡は殆ど確認できない。また、側面の加工は、全体が粗上がったとき円形になるようにやや斜めに加工している。1は下部に縦7.0~8.0cm×横6.2cmの方形の穴が開けられ、裏面から測る穴の大きさは縦5.0~6.0cm×横5.5cm。下部の左側面は斜めにカットされている。2は下部に縦8.2~8.8cm×横6.7cmの方形の穴が開けられ、裏面から測る穴の大きさは縦6.2cm×横5.5cmとやや狭い。3は下部に縦7.0~8.0cm×横6.4cmの方形の穴が開

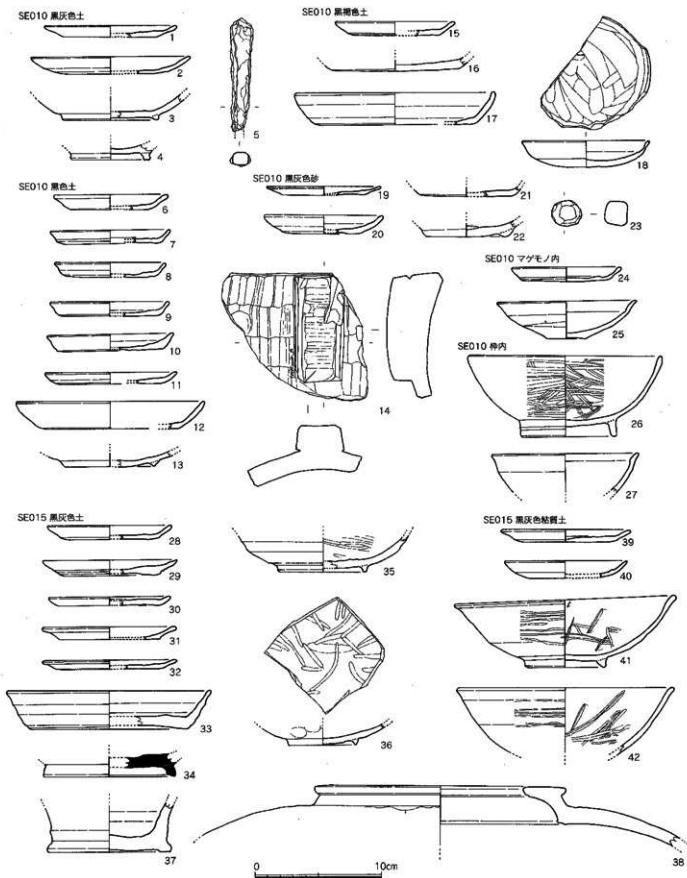


Fig.15 199SE010・015出土遺物実測図 (1/3)

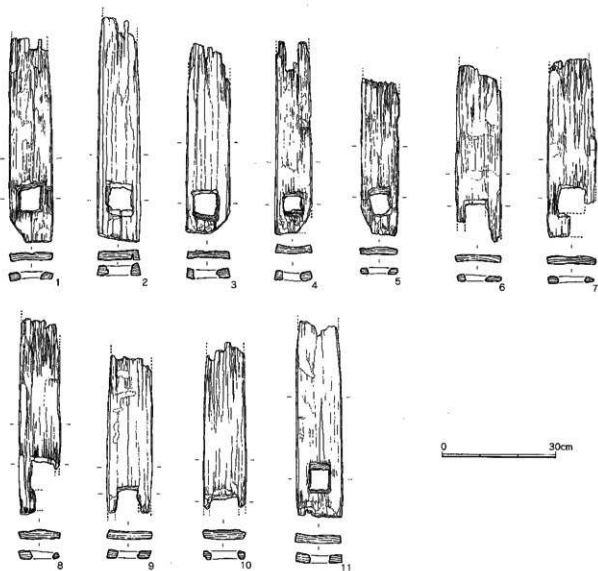


Fig.16 199SE010出土井戸部材実測図 (1/10)

けられ、裏面から測る穴の大きさは縦4.5~6.5cm×横6.0cmとやや狭い。下部側面は斜めに加工されている。4は下部に6.0cm×5.2cmの方形の穴が開けられている。表面(井戸内側)の方から主に彫り込んでいるため、裏面から測る穴の大きさは5.0cm×5.0cmとやや狭い。材には虫喰い穴が少々見られる。5は下部に縦7.0~7.2cm×横5.4~6.0cmの方形の穴が開けられ、裏面から測る穴の大きさは縦4.5~5.5cm×横5.0cmとやや狭い。下部側面は腐食が目立つが、井戸枠使用時点で斜めに加工されていた可能性がある。6は下部も一部欠損しているが、横6.0cm×縦6cm前後の方形の穴が開けられていたものと考えられる。材の中央付近が痩せている。7は下部も一部欠損しているが、縦7.2cm×横7.5~8.0cmの方形の穴が開けられている。裏面は縦6.7cm×横7.3cmとやや狭い。裏面の腐食はあまり見られない。8は下部も一部欠損しているが、縦9.0cm×横6.5cmの方形の穴が開けられている。9は下部も一部欠損しているが、縦9.5cm前後×横5.7cmの方形の穴が開けられていたものと考えられる。左側面には虫喰い穴が多く見られる。10は両端とも欠損しているが、残存部分から横7.5cmの方形の穴が開けられていたことがわかる。11は下部に縦7.3~7.6cm×横5.7~6.0cmの方形の穴が開けられ、裏面から測る穴の大きさは縦5.4cm×横5.0cmとやや狭い。下部を中心に虫喰い穴が少々見られる。

199SE015黒灰色土出土土器 (Fig.15, Pla.24)

土師器

小皿a (28~32) 口径9.6~10.6cm、器高0.7~1.2cm。底部切り離しは全て糸切り。

坏a (33) 底部切り離しは糸切り。内面底部は不定方向のナデ。その他の面は回転ナデ。

須恵器

大坏c (34) 復原高台径10.4cm。高台底部内側に段がつく。底部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ。胎土は茶灰色を呈し、やや粗い。焼成は良好だが、還元不良。肥後荒尾産の搬入品と考えられる。

瓦器

椀c (35、36) 内面にミガキcを雑に施している。34は体部中位がやや厚く僅かに屈曲している。屈曲下は指頭圧痕があり粗くナデている。35は体部下半まで板状圧痕が残っている。

越州窯系青磁

壺(37) 底部復原径9.8cm。底部内面はヘラケズリし、高台をつくり出している。底部畳付けは目跡を削り取っている。釉は灰緑色で不透明。胎土は明茶灰色で精製されている。II類と推測される。

陶器

甕(38) 胎土は0.2cm前後の砂粒を含み粗い。器面は丁寧にナデられ、体部は僅かに緑色をした灰色の釉を施す。頸部および口縁部は露胎し、外面は紫茶色、内面は灰褐色を呈す。

199SE015黒灰色粘質土出土土器 (Fig.15、Pla.24)

土師器

小皿a (39、40) 復原口径はそれぞれ10.2cm、9.6cm。39は底部ヘラ切り。

瓦器 (41、42) 39は体部中位で僅かに屈曲し、それを境に上部は回転ナデとミガキcで調整され、下半はミガキcとヨコナデを施すが器面は粗い。内面はミガキbのあとミガキcを施している。口径17.4cm、器高5.8cm、高台径5.4cm。40は内面ミガキbのあとミガキcを雑に施す。外面は粗いミガキcが施されている。復原口径17.0cm。

199SE029出土土器 (Fig.17、Pla.24)

土師器

小皿a (1~4) 復原口径10.0~12.0cm、器高1.3~1.7cm。底部切り離しはヘラ切り。内面底部はナデ。その他の面は回転ナデ。

椀(5) 内面にミガキbのような痕跡があるが、器面が磨滅しているため不明瞭。体部下半は指頭圧痕を残す。

黒色土器

椀c (6) 高台は低く若干外開きで、復原高台径8.4cm。内面にミガキcを施す。胎土は少量の砂粒は見られるが、精製されている。

199SE029暗灰色土出土遺物 (Fig.17、Pla.24・38)

小皿a (7、8) 2点とも底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は砂粒が目立ち粗い。

小皿c (9) 完形で、口径11.1cm、器高2.25cm、高台径7.4cmを測る。内面底部は不定方向のナデ、回転ナデを施す。胎土は精製され、色調は淡橙茶色を呈する。

皿a (10) 底部はヘラ切り未調整。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。

黒色土器

椀(11) 復原口径12.9cm。口縁端部を外反させる。内面の調整はミガキcだが、外面は磨滅している。

瓦

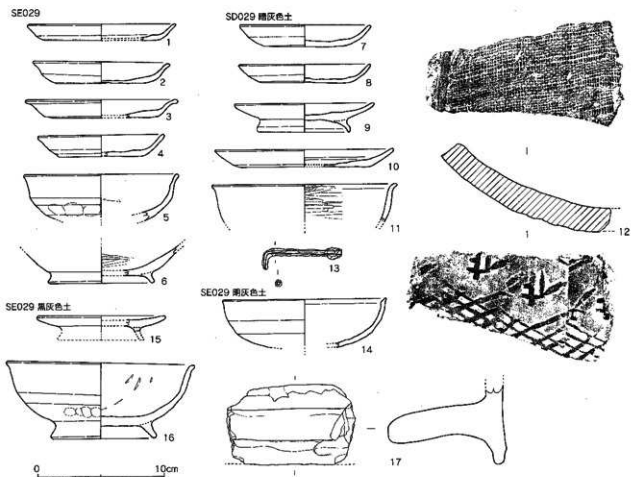


Fig.17 1999SE029出土遺物実測図 (1/3)

文字瓦 (12) 「佐」の文字を入れた格子叩を施した平瓦。

金属製品

鉄釘 (13) 先端部を約90度程屈曲させたもので全体に錆が覆っている。鉄自体は細く一辺0.3cm程の方形をしている。

1999SE029黒灰色土出土土器 (Fig.17、Pla.24)

土師器

小皿c (15) 復原口径10.2cm、残存部分は全面回転ナデ。

碗c (16) 器面は磨滅が著しいが、内面にはミガキbのヘラ挿入痕跡が確認できる。外面下半には指頭圧痕が僅かに確認できる。口縁端部は僅かに外反する。

カマド (17) カマドの底部で、底の下面の一部と内面全体にススが附着している。その他の面は熱を直接受けている部分は淡茶色で、その他は黒茶色をしている。胎土は0.2~0.4cmほどの砂粒を多く含む。

1999SE029明灰色土出土土器 (Fig.17)

土師器

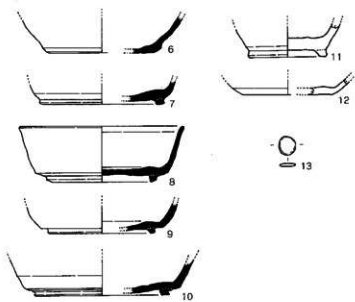
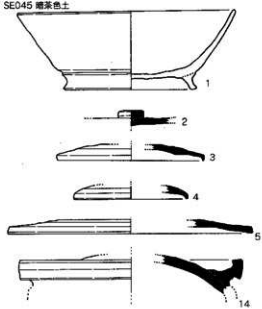
碗 (14) 口縁端部が細くなりながら、内面に稜をつけ僅かに外反する。体部下半にはヘラ切り痕跡が残る。

1999SE045暗茶色土出土遺物 (Fig.18、Pla.24)

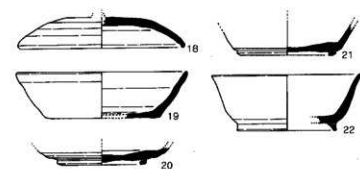
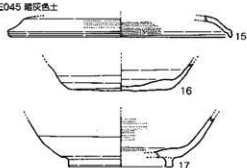
土師器

坯c (1) 体部はほぼ直線的に立ち上がる。底部はヘラ切り未調整。胎土は砂粒を少量含み、色調は

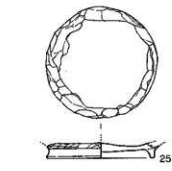
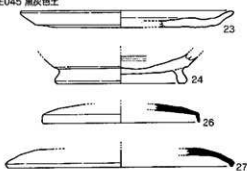
SE045 赭灰色土



SE045 赭灰色土



SE045 黑灰色土



SE045 青灰色土

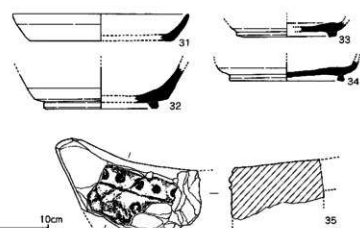
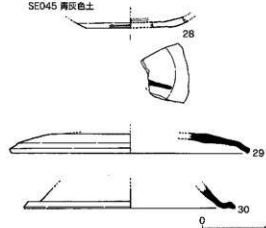


Fig.18 199SE045出土遺物実測図1 (1/3)

SE045 灰青色土

SE045



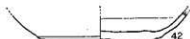
36



40



41

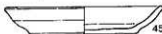


42

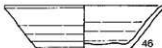
SE045 种内



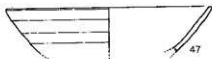
44



45



46



47



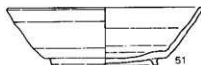
48



49



50



51

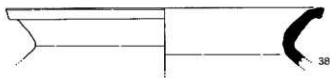
SE045 淡灰色土



37



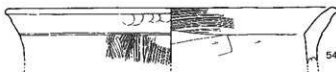
39



38



43



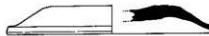
54



52



53



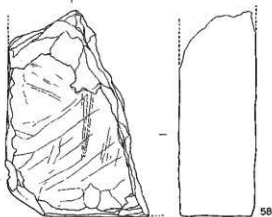
55



57



56



58

0 10cm

Fig.19 199SE045出土遺物実測図2 (1/3)

明茶色を呈している。

須恵器

蓋c (2) やや潰れた円形のツمامミを貼付する。

蓋3 (3、4) 3は復原口径11.6cm。4は復原口径9.0cmと小さな蓋で、外面は端部を除きヘラケズリを施す。

蓋4 (5) 口縁端部内面に0.1cmにも満たない僅かな段差はある。外面と共に回転ナデされている。復原口径19.2cm。

坏a (6) 底部切り離しはヘラ切り未調整。側面にヘラ挿入痕跡を明瞭に残している。復原底径9.8cm。

坏c (7~10)

円面硯 (14) 硯面は中央が盛り上がり、周囲が溝状になっていて、その部分に墨痕が残存している。欠損部には透かし孔の切り込みが僅かに残る。復原径17.5cm。

灰釉陶器

壺 (11) 復原高台径6.2cmを測り、やや外開きの安定した高台を貼付する。内面は強いヨコナデ。胎土は粗く0.2cm前後の砂粒を含む。

朝鮮系無釉陶器

(12)は壺もしくは甕などの底部と推測される。現存している範囲で外面はヘラケズリ。内面はナデ。色調は外面黒青色で、断面は小豆色を呈する。復原底径7.0cm。

石製品

平玉石 (13) 大きさは1.5×1.3cm、厚さ0.2cm。緑灰色の石材を使用。

199SE045 暗灰色土出土土器 (Fig.18, Pla.24)

土師器

蓋3 (15) 内外面にミガキを施している。

坏a (16) 底部と体部の境はやや丸味を持つ。外面底部はヘラ切り後粗いナデを行っている。

大坏c (17) 内面にミガキを施し、外面下部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデを行っている。体部は全体的に丸味をもち、方形の高い高台を貼付している。

須恵器

坏a (19) 底部はヘラ切り、体部は回転ナデを行っている。焼成は良好で、口縁部付近のみ灰黒色を呈する。

坏c (20~22) 20は方形のやや貧弱な高台がやや内側に貼付されている。21は外面底部はヘラ切り後粗いナデ調整し、低い高台を貼付している。22は内外面とも回転ナデ。内面底部のみ不定方向のナデ。やや高く外側に開いた高台を底部端に貼付している。全体的になめらかに仕上がっている。

蓋3 (18) 口縁端部を僅かに折り曲げ、体部は丸味を持っている。頂部は欠損しているが、ツمامミが付いていたと思われる痕跡を僅かに残す。しかし、ツمامミは復原口径に対し、やや偏った位置に付いていた可能性が考えられる。また、内面は墨の痕跡は残していないが、研磨された痕跡を明瞭に残していることから、硯に転用されたものと考えられる。

199SE045 黒灰色土出土土器 (Fig.18)

土師器

皿a (23) 内面底部は不定方向のナデ、外面底部はヘラ切り後粗いナデ。その他は回転ナデを施している。表面が一部朱色になっているが、赤色顔料の可能性も考えられる。

皿c×大坏c (24) 内面に僅かにミガキaを施している。外面は底部から体部にかけてヘラケズリを行っている。

坏c (25) 底部と高台を残し、体部を人為的に打ち欠いている。

須恵器

壺蓋3 (26) 口縁端部を長く折り曲げ、体部は比較的の水平に近いため、壺蓋と考えられる。外面は回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。

蓋3 (27) 体部はやや丸味を持つ。外面頂部付近は調整が不明瞭だが、その他は回転ナデ。

199SE045青灰色土出土遺物 (Fig.18)

土師器

皿a (28) 内外面にミガキaを施し、外面底部は回転ヘラケズリ。また、外面底部には墨書が残っているが、破片のため詳細は不明。

須恵器

皿a (31) 小片だが、外面底部はヘラ切りで、体部は回転ナデを施している。

坏c (32~34) 32は体部の厚いため大坏の可能性も考えられる。体部下半は回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ。外面底部はヘラ切りしている。33は台形の低い高台を貼付する。34は高台は小さい方形で、外面底部にはヘラ切り痕跡を残す。内面は不定方向のナデを施しているが、全体的に粗い調整である。

蓋3 (29) 外面は頂部付近はヘラケズリし、その他は回転ナデ。内面は口縁部は回転ナデ。その他はナデを施している。また、口縁部は重ね焼きによって黒灰色に変色している。口縁部を僅かに折り曲げている。

高坏 (30) 高坏の脚部と考えられる。内外面とも回転ナデ。

瓦

軒先瓦 (35) 文様部分は殆ど欠落しているが、珠文は残存。

199SE045灰茶色土出土土器 (Fig.19)

土師器

蓋3 (36) 復原口径16.6cm。内外面ともミガキaを施す。

須恵器

坏c (37) 復原高台径8.8cm。体部は内外面とも回転ナデ調整。

甕 (38) 復原口径25.0cm。内外面とも回転ナデ調整。

199SE045淡灰色土出土土器 (Fig.19)

須恵器

坏c (39) 外面底部が回転ヘラケズリ、内面底部が不定方向のナデ、その他は回転ナデ。変形した高台を貼付する。

199SE045出土遺物 (Fig.19~21, Pla.24~29)

土師器

坏a (40~42) 40、41は内面全体にミガキaが施されている。底部から外面下部まで回転ヘラケズリを行っている。42は外面底部はヘラ切り後、粗いナデ調整を行っている。内面は回転ナデ。

大坏c (43) 内面は底部までミガキaが施され、外面にも僅かにミガキaが施されている。底部から体部下半まで回転ヘラケズリを行っている。

木製品 (Tab.5)

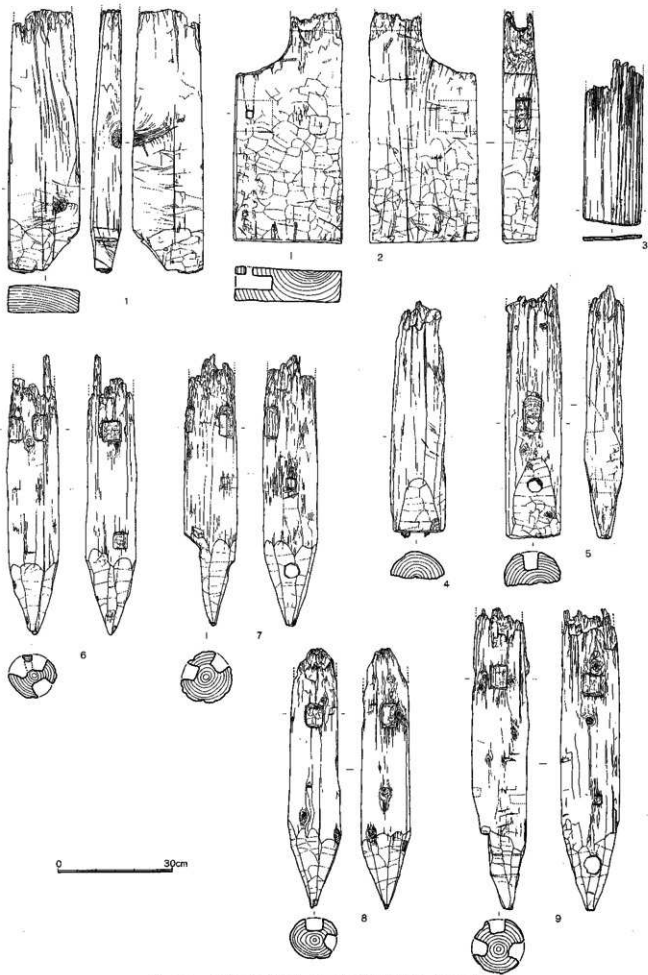


Fig.20 199SE045出土井戸部材実測図1 (1/10)

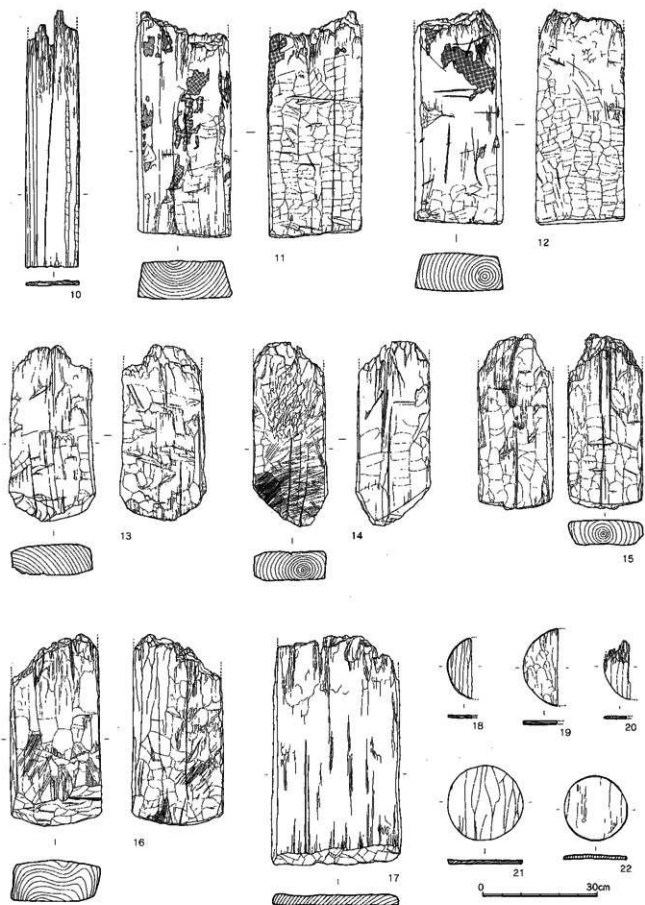


Fig.21 199SE045出土井戸部材実測図2 (1/10)

井戸杵材 (1~5、10~17) 全体として表面は両面とも調整の粗い加工が明瞭に残っている。1~5は一重目の井戸杵材である。1は先端部側面を斜めに切断し、その他の面も浅く削り込み、細く仕上げている。また、先端部側面に溝があり、井戸杵材として転用する以前に彫り込まれた穿孔である可能性が考えられる。2は上部半分に径約27cm程の円弧を描く彫り込みがあり、その残り半分の断面には幅4cm前後、深さ4.6cmのホゾ穴が溝状に彫られている。また、中位側面には幅3.9cm、高さ8.5cm、奥行9.3~9.7cmの方形のホゾ穴が穿たれ、そのホゾ穴に貫通する形で1.8×1.9cmの穴が穿たれている。また、下部断面中央付近には、横1.8cm×縦0.8cm×奥行1.2cmの長方形の小さな穴が彫られている。表面は上部が若干腐食するが、全面に加工痕が残る。この材は施されている加工痕跡から建築物の転用材と考えられる。3は下端から約4cmの位置に径0.6cmの孔が開けられている。表面は腐植しているため木目が浮き出ていて調整痕は確認できない。4は丸太を半載した部材で、井戸東側中央に使用されていた。土中に埋もれる下部は円弧面を大きく削り、反対側の半載面を僅かにひと削りし、細く仕上げている。下部断面には、2ヶ所木片が飛び出しているが、これは切断した際に完全に切り落とさず、最後に折ったことによって残った部分と考えられ、当初長かった丸太材を半載し、その後この長さで切断したものと推測される。5は丸太を半載した部材で、井戸西側中央に使用されていた。先端部をナナメにカットし、その面に径3.6cmの円形の孔が貫通している。その上部には縦9.5cm、横4.5cm、深さ3.7cm、ホゾの中の長さが3cmという台形状に彫り込まれたホゾ穴がある。また、半載面の下部は若干ケズリ調整を行っている。

10~17は二重目の井戸杵材である。10は薄い縦板材で唯一調整の加工痕が表面に残存している。11は全面に加工痕が残存。左図は腐食が若干目立つが、表面に薄くスス状に炭化したところが多く見られる。その他の面にも僅かにススが付いているところが見られる。12は全面に加工痕が残り、表面に僅かにススが付着している。表面の最も出ていたであろう部分をチョウナのようなもので削ったと見られる。それ以外の表面は腐食せず残っているものの、調整の加工は見られない。13は右図の表面加工はやや深く抉るように加工されている。また、上部は暗黒色を呈し、焼け焦げたような状況を示している。上部断面部分も暗黒色を呈していることから、井戸に使用された時点で、この大きさであった可能性が考えられる。その他の面も浅い削りが見られる。下部先端は中央を尖らすように粗く削り出している。14は左図の表面は、全体が削るというより鈍のようなもので細かく叩いた痕跡を残す。その加工痕の間に黒色の焼け焦げたような所を僅かに残していることから、それを除去する目的の加工かもしれない。右図の表面には削り痕跡のみで、叩いた痕跡は見られない。側面も僅かに加工している。下部先端は中央を意図的に尖らすように削り出している。15は北側の外側の井戸杵中央付近にあったもので、木の中心部分を利用している。側面に樹木の表面部分が残っていることから、直径20cm前後の樹木を使用したと考えられる。表面調整は工具の入り方から図の下方に向かっての動作が推測される。断面切断はややガタガタになっているため、斧かナタのようなものによる加工もしくは切断か。16は両側面に樹皮が僅かに残存し、木目から中心近くを載断し利用していることが窺える。表裏面ともに小刻みな加工痕が明瞭に残り、一部に工具によるものと考えられる細い切り傷がみられる。下端は斜めに切り出し、粗い加工痕を残している。17は下端の片面を斜めに削りだしている。全面に加工痕は確認できない。しかし、極端な腐食も見られないため、他の目的で使用したことによって加工痕が磨滅してしまったのか。転用材の可能性が考えられる。

支柱 (6~9) 6は北西隅の支柱で、丸太材を使用し、先端をおよそ8面にカットし尖らしている。その先端カット面のすぐ上に縦4.4cm、横3.8cm、深さ4.2cmの方形ホゾ穴が彫られている。上部には方形のホゾ穴が3ヶ所彫られ、横棧が差し込まれていた2ヶ所はそれぞれ縦5.6cm、横4.8cm、深さ4.2cmと縦

6.8cm、横5.0cm、深さ3.5cmを測る。そのうち1ヶ所は別のもうひとつのホゾ穴と連結している。7は北東隅の支柱で、丸太材を使用し、先端をナナメにカットし尖らしているが、一部水平に削り段が付いているところがある。その先端カット面に径4.0~4.5cmの粗く彫られた円形の穴が貫通している。先端削り込みの上約15cmの位置には縦3.4cm、横3.1cm、深さ4.0cm方形のホゾ穴が1ヶ所彫られている。上部には横棧が差し込むホゾ穴が2ヶ所彫られ、大きさは縦6.5cm、横4.7cm、深さ3.3cmと縦7.5cm、横5.0cm、深さ3.3cmを測る。先端の貫通孔と中段の方形ホゾ穴と上部のホゾ穴の1ヶ所が直線に並んでいる。8は南東隅の支柱で、丸太材を使用し、先端をおよそ7面にカットし尖らしている。その先端部カット面に縦2.5cm、横2.2cm、深さ3.2cmの方形ホゾ穴が彫られている。上部には方形のホゾ穴が2ヶ所彫られ、それぞれ縦7.0cm、横5.0cm、深さ3.5cmと縦7.0cm、横4.5cm、深さ3.2cmを測り、横棧が差し込まれていた。9南西隅の支柱で、丸太材を使用し、先端をナナメにカットし尖らしているが、一部水平に削り段が付いているところがある。その先端カット面に径4.5~5.0cmの粗く彫られた円形の穴が貫通している。この孔とナナメの削りがどちらが先行するかは不明である。先端削り込みの上約10cmの位置には相対するように方形のホゾ穴が2ヶ所彫られている。それぞれ縦2.2cm、横2.0cm、深さ2.2cmと縦2.5cm、横2.3cm、深さ4.7cmを測る。上部には横棧が差し込むホゾ穴が2ヶ所とそれ以外のホゾ穴が1ヶ所彫られている。大きさは縦5.6~6.5cm、横4.5~6.0cm、深さ3.6~4.1cmを測る。先端の貫通孔と中段の方形ホゾ穴と上部のホゾ穴のうち2ヶ所がそれぞれ直線に並んでいる。

曲物 (18) 曲物の底板と考えられるもので、半分欠損している。表面は腐植しているため木目が浮き出ている調整痕は確認できない。復原径約16.2cm、厚さ0.7cm。

199SE045埴内出土土器 (Fig.19, Pla.25・巻頭図版)

土師器

坏a (44~46) 44は中央部分が欠損しているが、内面から意図的に孔を開けた可能性が考えられる。外面は口縁部近くまでヘラケズリ、内面底部は不定方向のナデ。45は復原口径12.4cm、器高2.25cm。46は焼成が良く、須恵器のような仕上がりでである。復原口径12.6cm、器高3.65cm。

坏 (47~49) すべて体部は直線的で、底部を欠損している。調整は47が内外面とも回転ナデ。48は外面回転ナデ、内面ミガキa。49は内外面ともミガキa。

坏c (50, 51) 50は体部外面中位まで回転ヘラケズリ、口縁部までは回転ナデ。内面はミガキaが明瞭に残存。51は内外面とも回転ナデ。内面底部は不定方向のナデ。底部外面がやや赤色を帯びている。

Ⅲa (52) 外面底部はヘラケズリ。その他の面はミガキaが施されている。復原口径20.6cm。

大皿c (53) 復原高台径8.6cm。

甕a (54) 体部内面は横方向のヘラケズリ、外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケ、頸部内面は明瞭な稜線を付ける。外面は二次焼成で黒褐色に変色している。復原口径26.1cm。

須恵器

蓋3 (55) 頂部が回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。復原口径16.6cm。

蓋c (56) ツマミの横に「肥後□」と3文字の墨書が残っているが最後の文字は途中で欠損しているため不明。

Ⅲa (57) 復原口径13.8cm、器高10.6cm。底部はヘラ切りのあと粗いナデ。内面には墨痕のような痕跡を残す。

土製品

埴 (58) 方形の無文埴だが、角の部分は面取りしている。全面ナデ調整されている。胎土には0.2~0.4cmほどの砂粒を多く含んでいる。現存長16.4cm、幅11.2cm、厚さ6.0cm。

199SE045 枠内出土遺物 (Fig.21)

木製品 (Tab.5)

曲物 (19~22) 曲物の底板と考えられるもので、井戸枠内の西、南端で出土し、一部曲物の側板が遺存していたものもあった。1個は北側の二重になっている井戸枠の間から出土した。すべて不安定な状態で確認されたため、井戸に転落もしくは投げ込まれたものと推測される。全体としてこれらは片面の面には加工痕が明瞭に残っているが、その反対の面には表面が粗れ、木目が浮き出ているため加工痕の観察が困難である。また、側板の破片も若干検出された。大きさは19は半分残存し、復原径20.5cm、厚さ1.0cm、20は欠損が著しいが、復原径18.0cm、厚さ0.7cmを測る。21は完形で径19.5cm、厚さ1.0cm、22は完形で径15.5×16.7cm、厚さ0.8~1.0cm。

199SE050 黒灰色土出土遺物 (Fig.22, Pla.29)

土師器

小皿a (1) 内面底部のナデが明瞭に残っている。底部ヘラケズリ。

椀c (2~5) 2は精製された胎土である。3は胎土は精製され、色調は白色を呈し、焼成は硬質。4はやや貧弱な高台を貼付する。5は若干砂粒を含む胎土で、色調は橙茶色を呈する。口縁部は僅かに外反し、高台は内面に沈線状の段差が巡っている。体部中位までヘラケズリ。

椀 (6) 口縁部を僅かに外反させ、端部はやや尖り気味である。

蓋3 (7) 小片のため、若干不確定だが、径は19.6cmに復原できる。口縁部はやや潰れた感じで、端部を僅かに屈曲させている。

盤 (8) 外面底部と体部は粗いヘラケズリを行う。内面は磨滅が著しいが、やや強いナデを行っている。胎土は砂粒を多く含む粗い。欠損部の状況から器高はさほど高いものではないと考えられる。

須恵器

椀 (9) 底部糸切り。搬入品と考えられる。

黒色土器

椀 (10, 11) 10はA類。復原口径16.0cm。11はB類。復原口径13.6cm。

石製品

石包丁 (12) 両側を欠損する。表面は研磨され、円孔が2つ穿たれている。刃先は丸くなっている。背の部分は敲打と研磨を施し、背面調整している。粘板岩製。

199SE079 出土遺物 (Fig.22)

土師器

小皿a (13~16) 口径9.2~10.2cm、器高1.05~1.35cm。14は口縁端部が小さな玉縁状になっている。

坏a (17) 磨滅が著しく調整は不明瞭だが、口縁端部が玉縁状に丸く仕上がっている。

丸底坏a (18) 体部中位がやや厚く僅かに屈曲している。

石製品

平玉石 (19) 2.0×1.7cm、厚さ0.3cm。暗灰色の安山岩のような石材を使用。

199SE079 ウラゴメ出土遺物 (Fig.22, Pla.30)

土師器

小皿a (20) 底部はヘラ切り未調整。S-87出土。

坏a (21) 体部中位に僅かな屈曲を有する。S-87出土。

丸底坏a (22) 内面上位に沈線状の段が付く。体部外面中位には僅かに屈曲が残る。調整不明瞭。S-87出土。

土製品

円形土製品 (23) 径8.0cmほどに復原できる。中央も円形に凹んでいる。胎土にはやや大きい砂粒とスガが入り、その上に精製された土を重ねている。鑄型の可能性も考えられる。S-87出土。

199SE079暗灰色土出土遺物 (Fig.22)

土師器

小皿a (24~26) 口径8.2~10.6cm、器高0.8~1.4cm。26は口縁部に強いナデ。

丸底坏a (27) 体部中位が僅かに厚いが、屈曲はない。器面磨滅し調整不明瞭。

高坏 (28) 脚部の径は8.5cmと大きく、ずんぐりしている。坏部の外面底部は強くナデられている。胎土は0.1cm前後の砂粒を多く含む。

瓦

文字瓦 (29) 「平」の文字を刻んだ格子印を施した平瓦。

199SE079枠内出土遺物 (Fig.22、23、Pl.30・31)

黒色土器

碗c (30~32) 30は口径15.7cm、高台を欠損する。内外面には明瞭にミガキcが施され、黒光りしている。31は口径14.8cm、器高4.9cm、内外面には明瞭にミガキcが施され、黒光りしている。底部外面に十字形のヘラ記号が見られる。32は他の黒色土器と異なり、胎土に細かい砂粒が目立ち粗い。磨滅が著しいが、内外面に僅かにミガキcが確認できる。

木製品 (Tab.5)

井戸杵材 (1~5) 1は表面には右斜め方向に削った調整加工痕が残り、下端は面取りしている。中央付近には3.3×1.7cm、3.5×2.0cmの方形をした2つの孔が平行に穿たれている。また、その穿孔の下部には径1cm前後の円形の穿孔や彫り込みが見られる。方形と円形の両方の穿孔は側面に寄ったところにあるため、転用以前には似通った目的を持っていた可能性も考えられる。また、側面に近い位置の表面にはスガが付着している。2は幅広い板材で、円化した面には表面整形の加工痕が残っているが、反対面は腐食のためか殆ど残っていない。下部が方形状に切断され、井戸杵材として転用する以前の加工と考えられる。また、下部から約25cmの位置に長さ2.25cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmの楔状の鉄釘が打ち込まれている。3は丸太材を割り裂いた様子を残す。年輪によって膨らんでしまった中央付近を削るためにナナメに加工している。4は一面面に樹皮が残存している。やや残りは悪いが、内外面とも右斜め方向の表面調整加工痕が残っている。5は内外面とともに加工痕が残っている。上端は腐食のためこぼしているが、下端は腐食とは異なる不規則な欠落をしているが、原因は不明。表面の一部にスガのようなものが付着している。

199SE105暗灰色土出土遺物 (Fig.24、Pl.31)

土師器

小皿a (1、2) 1は底部切り離しは不明瞭。2は底部糸切り。

坏a (3) 胎土は砂粒を多く含む粗い。底部は糸切り。

瓦器

碗c (4) 内面底部は不明瞭だが、滑らかになっているためミガキcを施していたと推測される。底部には三角形の高台を貼付する。

青磁

小碗 (5) 復原高台径4.6cm。胎土は淡乳灰色を呈し、僅かに黒色細砂粒を含むのみで、精製されている。内外面全体に不透明な暗緑色の釉を施す。高台畳付けには目跡が残る。

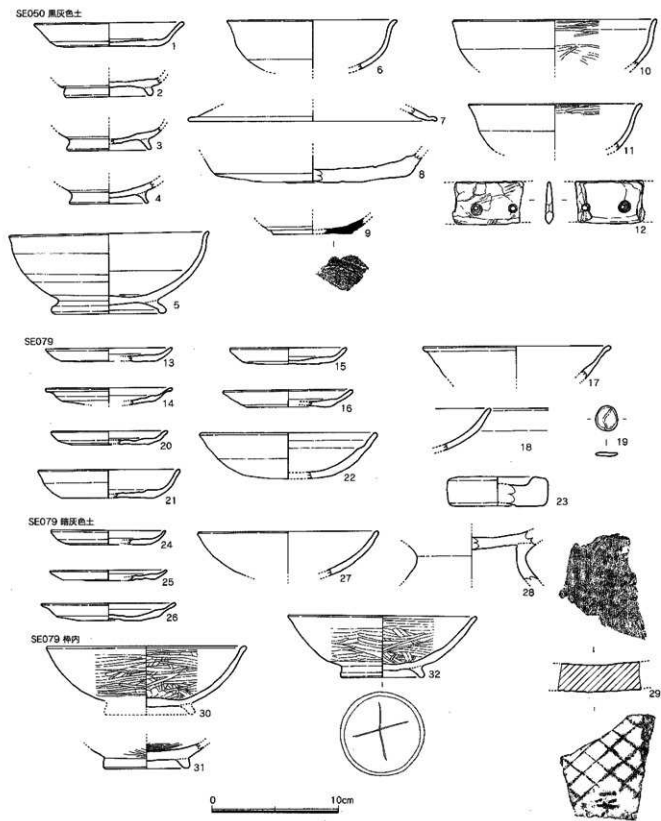


Fig.22 199SE050・079出土遺物実測図 (1/3)

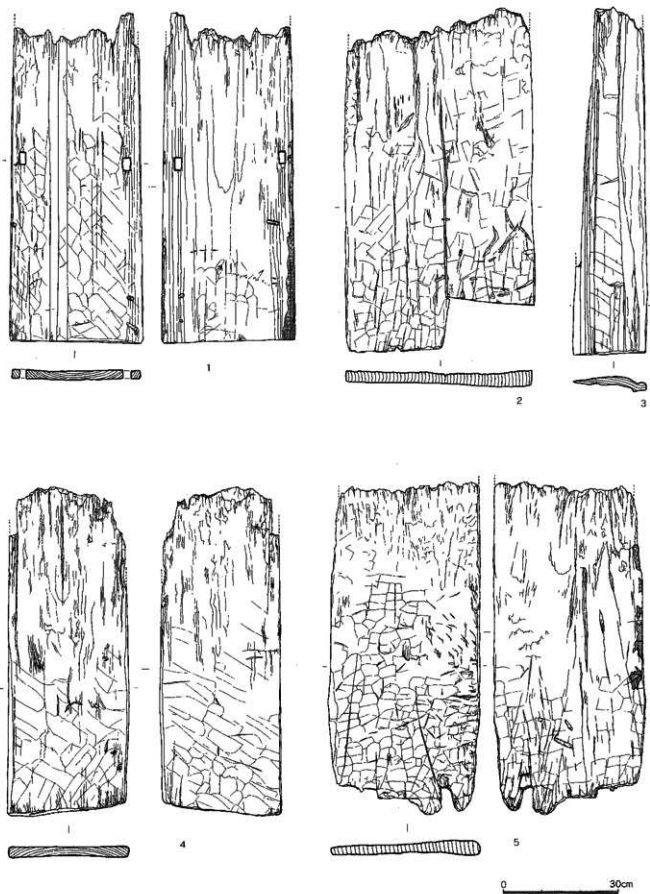


Fig.23 199SE079出土井戸部材実測図 (1/10)

陶器

甕 (6) SE015黒灰色土出土の甕と同様な器形である。胎土は0.1~0.2cmの白色砂粒を含む。体部には緑灰色の釉が施され、頸部から口縁部及び内面は露胎している。露胎部は淡茶色を呈している。頸部根元内外面に段が付くことから、ここで接合したことが窺える。

石製品

円形加工品 (7) 半分欠損しているが、全体は5.5cm程の円形をなしていたと考えられ、中央に約径1.4cmほどの円孔が穿たれている。紡錘車の可能性が考えられる。現存長5.4cm、厚さ2.8cm。

平玉石 (8) 大きさは1.1×1.4cm、厚さ0.45cm。青黒色の石材を使用。

199SE105灰茶色土出土遺物 (Fig.24)

石製品

平玉石 (9) 大きさは1.55×1.8cm、厚さ0.65cm。乳白色の石材を使用。

199SE105黒灰色土出土土器 (Fig.24)

瓦器

碗c (10) 内外面ともミガキcを施す。高台はやや外に開く安定した高台で、復原径7.1cmを測る。

199SE105灰茶色砂出土土器 (Fig.24)

瓦器

碗c (11) 内外面ともミガキcを施す。高台は厚く、復原径7.6cmを測る。

199SE105灰色砂出土土器 (Fig.24)

土師器

坏a (12) 底部はヘラ切りで、底部と体部の境は明瞭に屈曲する。胎土は精製され、茶褐色を呈している。内外面とも回転ナデ。

199SE105出土遺物 (Fig.24)

瓦

平瓦 (13) 外面に格子の中に菱形がある叩きを用いている。内面は布目痕があり、側面はヘラ切りしている。

199SE110黒灰色土出土土器 (Fig.24)

土師器

小皿a (14、15) それぞれ大きさは口径は9.4cm、10.4cm、器高は1.3cm、1.4cmを測る。底部ヘラ切り。

丸底坏a (16) 体部には屈曲が全くなく、滑らかに丸味を持って立ち上がる。

黒色土器

碗c (17、18) 17は高台径6.6cm。内面にミガキcが確認できる。A類。18は復原高台径6.1cm。内外面ともミガキcを施す。B類。

199SE110暗灰色土出土遺物 (Fig.24, Pla.31・38)

土師器

小皿a (19、20) 復原口径9.6cm、器高1.0~1.4cm。底部ヘラ切り。

丸底坏a (21、22) 2点とも体部中位でほんの僅かに屈曲している。調整は磨滅し不明。

金属製品

鉄錐 (23) 全体の幅4cm程の製品だったと考えられ、厚さ約0.4cmの細長い鉄棒を折り曲げてつなぐ「兵庫鎖」である。折り曲げ重ねた部分はその痕跡が明瞭に確認できる。

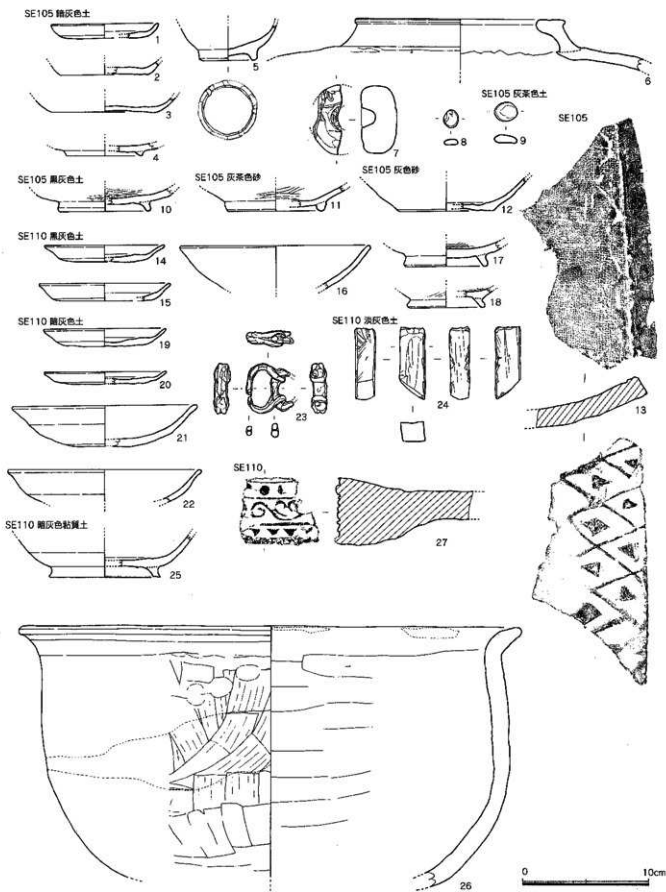


Fig.24 199SE105·110出土遺物実測図 (1/3)

199SE110淡灰色土出土遺物 (Fig.24, Pla.31)

石製品

砥石 (24) 淡い灰色をした泥岩系の石材で、図の上部断面以外は全て研磨されている。

199SE110暗灰色粘質土出土土器 (Fig.24, Pla.38・巻頭図版)

緑軸陶器

碗c (25) 内面底部には幅広い沈線を施す。高台疊付部分には僅かに段を付けている。胎土は精製され、暗灰色を呈し、須恵器のようである。内面にはトチンの使用痕が残る。内外面には濃緑色に施軸するが、底部内面はやや薄く施軸する。近江産。高台復原径8.7cm。

199SE110出土遺物 (Fig.24, Pla.31)

土師器

甕a (26) 口縁を下にして検出されたため、底部は欠損している。内面調整は表面が粗れ、砂粒が浮いているため不明瞭だが、部分的に横方向のヘラケズリが確認できる。口縁部内面には一次焼成の黒斑が部分的に見られる。外面中位には二次焼成によるススが付着している。

瓦

軒平瓦 (27) 均正唐草文の一部と考えられる。

199SE115黒灰色土出土土器 (Fig.25, Pla.31)

土師器

小皿a (1, 2) 2点とも底部ヘラ切り。それぞれの大きさは口径9.6cm、器高7.6cmと8.6cm。

碗c (3) 底部ヘラ切り未調整。内面底部はナデ。

丸底坏a (4) 内面には細かくミガキbを施した調整痕が残っている。

199SE115灰褐色土出土土器 (Fig.25)

土師器

小皿a (5, 6) 2点とも底部ヘラ切り。それぞれの大きさは口径9.5cmと10.6cm、器高1.4cmと1.3cm。

199SE115暗灰色粘質土出土土器 (Fig.25)

土師器

小皿a (7) 底部ヘラ切り。その他は回転ナデ。胎土はやや白いが焼成は良好。

199SE115黒茶色土出土土器 (Fig.25)

瓦器

碗c (8) 内面の調整はミガキcで暗灰色を呈する。外面は磨滅のため不明。やや貧弱な高台が付く。復原高台径8.2cm。

199SE115暗灰色土出土土器 (Fig.25)

土師器

丸底坏a (9) 体部中位に僅かに段差が残っている。

199SE115ウラゴメ出土土器 (Fig.25, Pla.31)

土師器

小皿a (10, 11) 底部ヘラ切り。11は底部に板状圧痕を残す。

199SE115出土遺物 (Fig.26, Pla.32)

木製品 (Tab.5)

井戸枅材 (1~4) 4点とも横棧である。1は両端にホゾを作り出すもので、ホゾを省いた部分の長さは59.4cmを測る。また、一面中央には幅、深さとも約1.5cmほどの溝が彫られ、それを挟むように長さ

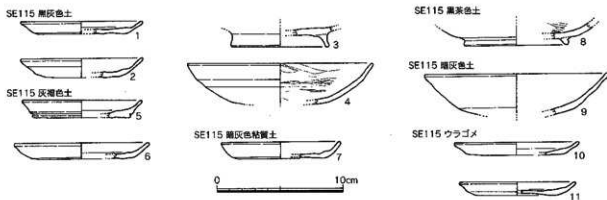


Fig.25 199SE115出土土器実測図 (1/3)

3.8cm、幅0.6cm、深さ1.5cmの長方形のホゾ穴がある。対になる片方は欠損し、残りは良くない。それと20cmの間隔をおいて同様に長さ4.5cm、幅0.5cm、深さ1.7~2.0cmの長方形のホゾ穴がある。対になるホゾ穴は殆ど欠落し、残りは良くない。2はホゾをはめ込むための袢りを入れるもので、袢り込みを省いた部分の長さは55.5cmを測る。一面中央に幅、深さとも約1.5cmほどの溝が彫られ、それを挟むように、長さ3.8~4.3cm、幅0.6~0.7cm、深さ2.0cmの長方形のホゾ穴が対になって16cm、15cmの間隔で4ヶ所彫られているが、図下の2ヶ所については一部繋がっているため、見た目には長さ6.5cmのホゾ穴に見える。また、その連結したホゾ穴の上5cm程のところには長さ2.1cm、幅1.4cm、深さ1.5cmの方形の穴がある。これは三角錐状に穴は穿まっているが、裏面まで貫通している。側面にはススのようなものが付着している。3は両端にホゾを作り出すもので、ホゾを省いた部分の長さは58.7cmを測る。また、一面中央には幅、深さとも約1.5cmほどの溝が彫られ、その途中に長さ4.3~5.5cm、幅3.1~3.5cm、深さ2.1~2.2cmの方形のホゾ穴が14cm、17cmの間隔を置いて、3ヶ所彫り込まれている。ホゾ穴は溝が彫り込まれた後に彫り込まれたであろうが、同時に存在したと推測する。4はホゾをはめ込むための袢りを入れるもので、袢り込みを省いた部分の長さは59.6cmを測る。一面中央に幅、深さとも約1.5cmほどの溝が彫られ、それを挟むように、長さ4.0cm、幅0.5cm、深さ1.8cmの長方形のホゾ穴があり、対になる片方はほぼ欠落している。それと約19cmの間隔を置いて、同様に長さ4.2cm、幅0.6cm、深さ1.7cmのホゾ穴があり、対になる片方は腐食し残りは良くない。

これらの4点に見られる溝などの加工面は、井戸では上面を向いていないため、井戸のためではなく、転用以前の加工と考えられる。

199SE130暗灰色土出土遺物 (Fig.27, Pla.32・巻頭図版)

土師器

椀c (1~3) 磨滅が著しく調整は不明瞭。2は細い高台。3は丸味を帯びた深い体部で、高台は全く残っていない。

須恵器

壺 (4) 底部は糸切り。そのほか内外面はヨコナデされている。胎土は精製されている。篠産。

緑釉陶器

椀 (5, 6) 5は小片のため口径は不正確だが、およそ16.4cmを測る。口縁部には頂点から工具で押したような輪花がある。口縁端部はやや外反気味で、ミガキを施した後に施釉しているものと考えられる。釉はやや濁った黄緑色で、全体に薄く施している。胎土は精製され、須恵質に焼成されている。京都産。6は体部中位で屈曲しているが、その内面は沈線状の段になっている。胎土はキメがやや粗く、

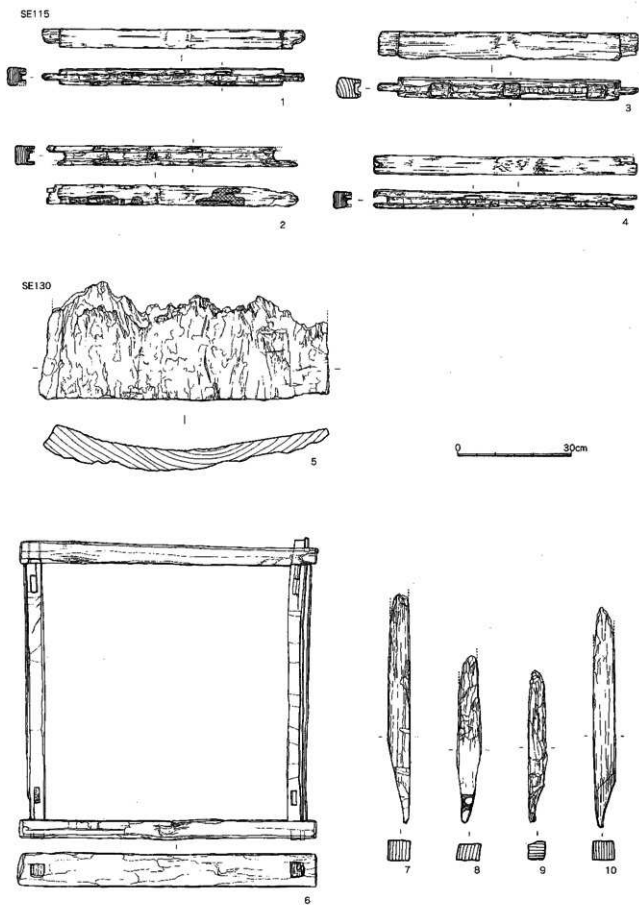


Fig.26 199SE115・130出土井戸部材実測図 (1/10)

明茶灰色を呈し、回転ナデのあと淡緑色の釉を薄めに施しているが、部分的に剥落している。防長産か。

碗c (7) 胎土は白灰色を呈し、精製され、やや濁った黄緑色の釉が施されている。内面にはハリの痕跡が見られる。防長産。

瓦

軒丸瓦 (8) 単弁重弁十四葉蓮華文軒丸瓦。中房には蓮子が1+6施され、外区には小さな連珠文があり、周縁は素文である。

199SE130淡灰色土・淡灰色土系出土遺物 (Fig.27, Pla.32)

土師器

坏a (9~11) 口径11.9~12.6cm、器高3.1~3.65cm。体部下位に若干丸味がある。

碗c (12~16) 12は僅かに外反しながら立ち上がる。13は高台端をやや跳ね上げる。14はやや体部に丸味がある。16は安定した高台で、体部も他に比べ厚い。

黒色土器

碗c (17, 18) 17の内面は小さなクレーターのよう器面があらわれている。やや丸味のある高台を貼付する。高台径7.0cm。18は高台径8.0cm。底部切り離しはヘラ切り。板状圧痕も残る。体部調整は不明瞭。

灰釉陶器

段皿 (19) 内面の段下には重ね焼きをしたような痕跡が見られる。底部外面は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデを行い、外面端部から内面にかけて刷毛塗りで施釉する。釉は淡い灰緑色を帯びた透明釉で、胎土は砂粒を多く含み、黒色物質を少量含んでいる。復原口径16.8cm、器高2.8cm、復原高台径7.3cm。

緑釉陶器

皿 (20) 高台内側に浅い段を有する。胎土は茶灰色でやや粗い。釉は明緑黄色を呈し、やや厚めに施釉する。復原高台径7.4cm。防長産か。

碗 (21) 小片で端部を僅かに外反させる。外面に細い沈線があり、粘土紐などの痕跡の可能性も考えられる。胎土は精良で硬質に焼成されている。釉はやや暗めの黄緑色で薄く施釉する。

須恵器

硯 (22) 甕を利用した転用硯。甕の当て具痕の間に墨痕が残る。

石製品

丸石 (23) 大きさは1.7×1.5cm、厚さ0.5cm。白色の石材を使用。

199SE130灰褐色土出土遺物 (Fig.28, Pla.32・38・巻頭図版)

土師器

坏a (24~28) 口縁部は欠損する。底部と体部の境に丸味がある。底部切り離しはヘラ切り。内面底部はナデ。

碗c (29) やや厚く安定した高台で、体部もやや厚く作られている。内面底部はナデ、他は回転ナデ。

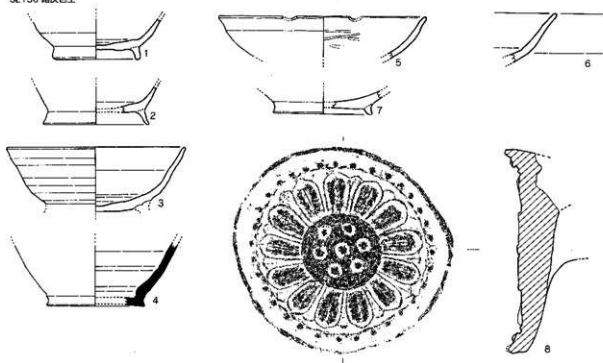
黒色土器

碗c (30) 体部内面にはミガキcが施されている。高く細い高台が付く。復原高台径7.2cm。

甕 (31) 頸部付近には僅かにミガキcが確認できる。外面中位から上には厚くススが附着する。口径15.6cm、器高10.85cm。

緑釉陶器

SE130 暗灰色土



SE130 淡灰色土

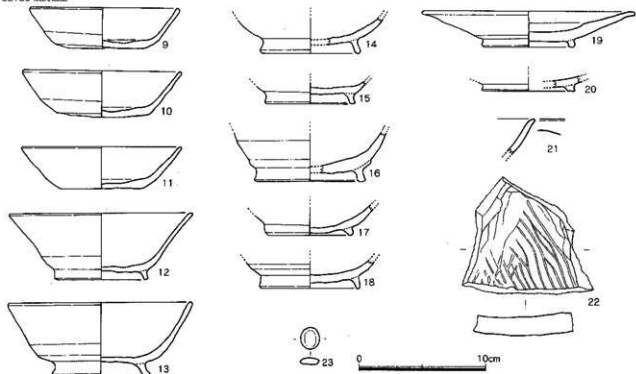


Fig.27 199SE130出土遺物実測図1 (1/3)

碗 (32) 中位で僅かに屈曲し、僅かに外反しながら立ち上がる。口縁部付近には炭化物が付着している。胎土は明褐色の土師質で精製されている。釉は淡黄緑色で、口縁部はやや黒っぽく変色している。二次焼成によるものか。復原口径15.0cm。防長産か。

瓦

軒平瓦 (33) 均整唐草文の一部と推測される。

199SE130明灰色土出土土器 (Fig.28・Pl.38・巻頭図版)

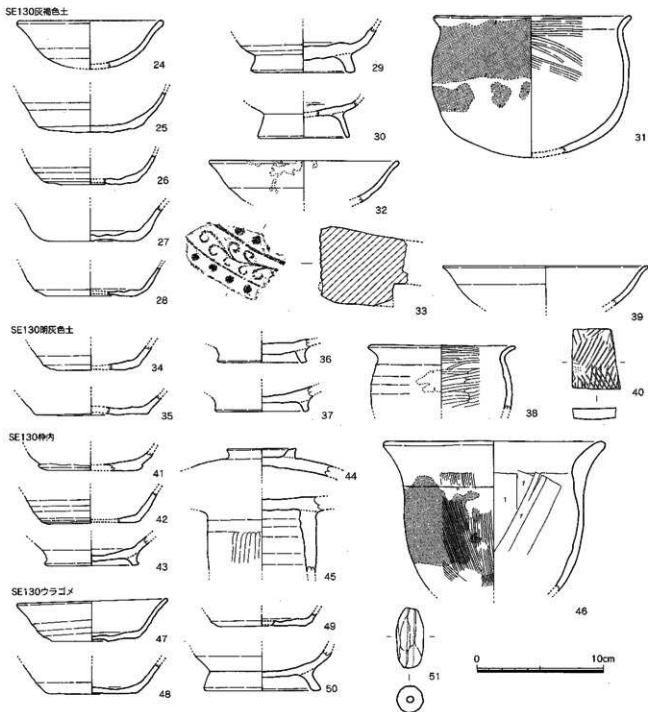


Fig.28 199SE130出土遺物実測図2 (1/3)

土師器

坏a (34、35) 34は底部に若干丸味がある。35は体部と底部に明瞭な屈曲を有する。

碗c (36、37) 2点とも僅かに外側に開いた高台を有する。

黒色土器

小甕 (38) 口縁部は丸味を持って屈曲する。内面にはミガキc、外面はヨコナアが施されている。外面の一部にスガが付着している。復原口径11.6cm。

緑釉陶器

碗 (39) 胎土は細砂粒を僅かに含むが精製され、硬質に焼成されている。色調は暗茶灰色を呈する。

僅かに緑がかった暗茶色の釉を薄く施している。

須恵器

硯(40) 甕を転用した硯で、甕の当て具痕がかなりすり減り、その間に墨痕が残る。

199SE130 埴内出土土器 (Fig.28)

土師器

埴a (41、42) 41は外面底部のナデによって、胎土が外側に押され、体部との境に段が付いている。42は底部へラ切りで、直線的な体部を有する。

椀c (43) 外側に跳ね上げたような、安定した高台で、底部外面に板状圧痕が残る。

蓋b (44) 胎土は0.1cm前後の細かい砂粒を含むやや粗いもので、色調は暗茶褐色を呈する。器面は磨滅し調整不明。頂部には径5.4cmに復原できる輪状ツマミを貼付する。

高坏 (45) やや径が大きな脚部を持ち、外面は細かいミガキをタテに施す。内面は粗く強いタテハケを施し、一部にスガが付着する。坏部は欠損し、磨滅も著しく調整等不明。

甕a (46) 口縁部がやや厚く作られている。内面へラケズリ、外面は細かいタテハケで、二次焼成によるスガが厚く付着している。復原口径17.4cm。

199SE130ウラゴメ出土遺物 (Fig.28、Pla.32・33)

土師器

埴a (47-49) 体部と底部の境に若干丸味を有する。底部はへラ切りし、板状圧痕を残す。

椀c (50) 外側に広がった安定した高台を貼付する。外面底部はへラ切り後、板状圧痕が付き、その後ナデている。

土製品

土錘 (51) 長さ4.75cm、径2.1cmで、中央に0.5cmほどの円孔を開けている。表面は粗れている。

199SE130出土遺物 (Fig.26、Pla.33)

木製品

井戸枠材 (5、6) 5はくり抜きされた部材の一部と推測される。表面の加工等は全くわからない。その曲線具合から、相当大きな部材であったことがわかる。この他にも同様の材が検出されている。6は井戸枠底部付近にある枠組みで、遺存状況が良かったため出土した状態で取り上げた。枠組みの西側材は方形のホゾ穴を両端とも貫通させ、それぞれにホゾを入れ込み、その隙間を厚さ0.8cm、幅2.5~2.8cmの長方形の木片をクサビとして打ち込ませ安定させている。特に南西部分はクサビを強引に打ち込んだようで、ホゾ穴周囲がクサビと共にめり込んだ状態になっている。東側材も同様に2ヶ所にホゾ穴を設けているが、2ヶ所ともホゾ穴を開けた後に土圧などによって木目に沿って、ひび割れを起こしている。南北材は上面両端に4.0~4.5cm×1.3~1.7cmの方形のホゾ穴が彫られている。貫通はしていない。北側材の1ヶ所のホゾ穴には木材が詰まっている状態で、井戸の枠材のようなものを差し込むホゾであった可能性が考えられる。

支柱 (7-10) 全て方形に加工されている。7は先端部分を3面加工しているが、そのうち1面は僅かな加工である。また、先端部分の一部が薄く焦げている。8は先端部分を4面加工し、細くしている。また、先端部分の一部が薄く焦げている。9は腐食が著しく、表面を残している部分はない。10は先端を3面加工し、細くしている。

溝

199SD025出土遺物 (Fig.29、Pla.34)

土師器

小皿a (1~3) 口径9.6~10.4cm、器高0.9~1.6cm。底部切り差し不明。内面底部ナデ。

須恵器

坏a (4) 底部外面に墨書があるが、内容は不明。

硯 (5) 須恵器甕の転用硯。内面の当て具痕が磨り減って、凹凸が殆どなくなっている。

石製品

平玉石 (6) 1.3×1.8cm、厚さ0.5cm。暗青色の石材を使用。

199SD025暗茶色土出土土器 (Fig.29)

龍泉窯系青磁

椀 (7) 内外面に緑色の釉が厚く施されている。外面にはラマ蓮弁と雷文が、内面には草花文が施されている。IV類と考えられる。上田分類C-II類。

199SD040出土土器 (Fig.29)

土師器

小皿a (8) 小片のため全体を復原できないが、器高は1.2cm。

椀c (9) 低くて貧弱な高台を貼付する。復原高台径8.6cm。

丸底坏a (10) 内面ミガキb。内面中位に僅かに段差が見られる。外面中位には指頭圧痕がほんやり残る。

瓦器

椀c (11) 内外面ともミガキcを施し、内面は滑らかに仕上げている。底部は三角形の低い高台を貼付する。

199SD070暗灰色土出土土器 (Fig.29、Pla.38・巻頭図版)

土師器

坏c (12) 磨滅し残りは良くないが、低い高台が付く。高台復原径7.8cm。

緑釉陶器

椀 (13) 胎土は精製され、焼成は良好で須恵質。釉は薄緑色で全体に薄く施釉されている。内面底部は丁寧にミガキを行っている。高台はケズリ出し。復原高台径6.6cm。洛西産。篠塚群前山2、3号窯産か。

199SD070灰褐色土出土土器 (Fig.29、Pla.34)

須恵器

蓋c2 (14) 頂部から中位まで回転ヘラケズリ。口縁端部は明瞭に折り曲げている。内面はナデ。頂部には潰れたツマミが付いている。復原口径13.0cm、器高1.85cm。

坏c (15) 体部は回転ナデ。内面底部はナデ。底部外面はヘラ切り未調整。口径16.8cm、器高6.25cm。

199SD070灰色土出土土器 (Fig.29、Pla.34)

須恵器

蓋c3 (16、17) 16は頂部はヘラケズリし、ツマミ接合後にヨコナデしている。内面は回転ナデ。17は、器面の凹凸を頂部のみヘラケズリしている。ツマミを欠損する。内面に墨痕のような痕跡が見られる。

蓋3 (18、19) 頂部のみヘラケズリ、その他内面はナデもしくは回転ナデ。

蓋c (20) 内面に「M」という英字のようなヘラ記号が刻まれている。

坏c (21~26) 調整は外面底部はヘラケズリ、内面底部はナデ、体部は回転ナデ。23、24は高台を

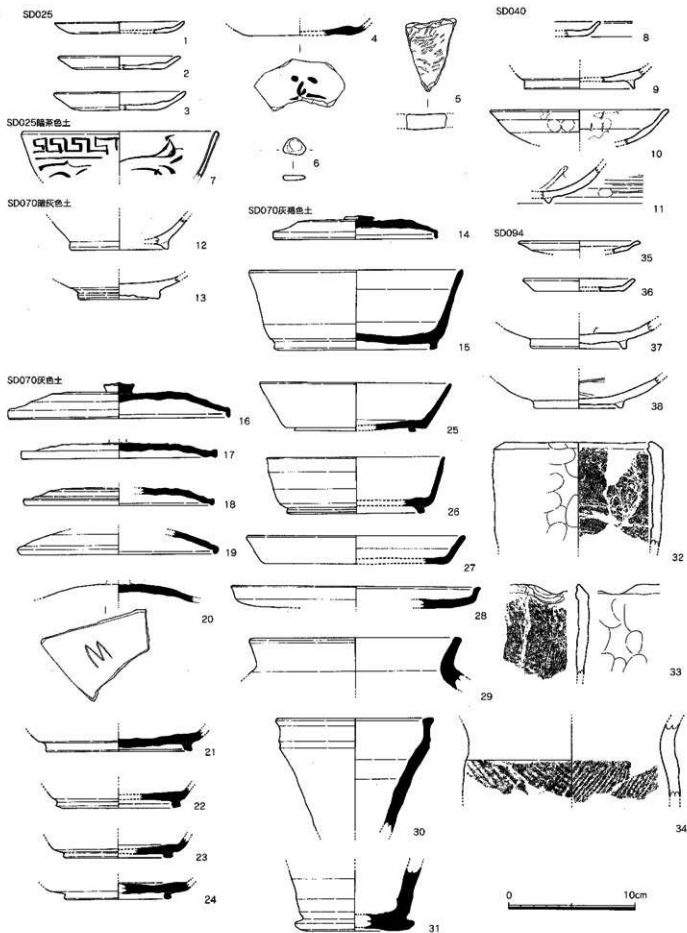


Fig.29 199SD025·040·070·094出土遺物実測図 (1/3)

やや内側に貼付している。

皿a (27) 体部は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後未調整。

高坏 (28) 坏部のみで復原径19.6cm。坏の外面底部はヘラケズリを行っている。その他は回転ナデ。

短頸壺 (29) 復原口径16.6cm。口縁部外面に僅かな段差を有する。胎土は僅かに砂粒を含むが、比較的精製されている。色調は明橙茶色を呈する。

長頸壺 (30) 二重口縁で復原口径は12.4cm。屈曲部分に沈線を巡らしている。外面はやや雑なヨコナデ。内面は焼成時の熱で表面が粗れている。

鉢 (31) 底径9.4cm。こね鉢と考えられるが、内面の作りが粗く、付着物も見られ、外面の突出している部分の一部が研磨されていることなどから、ほかの用途の可能性も考えられる。

製塩土器

焼塩壺 (32、33) 32は砂粒を殆ど含まない胎土を用いて、硬質になっている。口縁端部は外側に斜め下に向面している。口径13.1cmに復原できる。外面は指頭瓦痕が残り、内面には細かい布目が残る。I類。33は口縁部が歪んでいるが、その他は32と同様。I類。その他にもII-b類の破片も出土している。

煎熬土器 (34) 内面にはハケ目、外面には細かい格子叩き目が残る。体部径は約17cmほどに復原できる。III類。

199SD094出土土器 (Fig.29)

土師器

小皿a (35、36) 底部切り離しはヘラ切り。復原口径はそれぞれ9.6cmと8.8cm。

椀c (37) 砂粒を殆ど含まない胎土で、内面はミガキを施した感じを受ける。高台は安定した台形をしている。

瓦器

椀c (38) 内面はミガキを施し、内面のみ色調は黒褐色を呈する。高台は低く安定感のある。

199SD080暗灰色土出土遺物 (Fig.30, Pla.34)

土師器

小皿a (1) 小片のため明確ではないが、坏aの可能性もある。

坏a (2) 体部中位に屈曲が見られる。外面底部には粘土紐の痕跡を残している。

椀c (3) 高台は底部端に貼付されている。調整は磨滅し不明瞭。

皿c (4) 底部のみだが、坏部が平坦になっているため皿cと考えられる。胎土は比較的精製されているが、高台は雑に貼付されている。

甕 (5) 口縁部は僅かに外反するが、全体的に直口している。焼成は良好で、内面ヘラケズリ、外面ヨコナデの調整が明瞭に残る。外面には二次焼成によるスガが付着する。

黒色土器

椀c (6、7) 2点とも磨滅が著しく調整は内面に僅かにミガキが確認できるのみ。復原口径はそれぞれ8.8cm、7.6cm。A類。

椀 (8) 口縁部を僅かに外反させる。A類。

土製品

土錘 (9) 長さ4.0cm、径1.3~1.35cm、中央に0.4cmの孔を開ける。端部を若干欠損する。

199SD080黒灰色土出土遺物 (Fig.30, Pla.34・38)

坏a (10~12) 10は体部中位に屈曲を有する。11は胎土が精製され、色調は橙茶色を呈する。

小皿c (13) 調整は磨滅のため不明瞭。復原口径12.6cm、器高8.2cm。

椀c (14~16) 16は底部と体部の境にやや外開きに太い高台を貼付する。色調は橙灰色を呈する。

椀 (17) 口縁部を僅かに外反させる。

甕 (28) 口縁部はやや丸味を持って外反する。胎土には0.1cm前後の白色砂粒を多く含む。調整は不明瞭。復原口径34.0cm。

黒色土器

椀c (18) 坏部の内面にはミガキcを施す。薄く高い高台を付けている。A類。

椀 (19) 口縁部を僅かに外反させる。内面にミガキc。A類。

長沙窯青磁

水注 (20) 水注の耳の一部。胎土は淡褐色で、やや黄色味を帯びた飴色の釉を施している。一部褐彩が付いている。外面に2条、内面に1条の沈線を付けている。

土製品

輪羽口 (21) 小型の輪羽口で、先端部に近い部分。表面は被熱によって小豆色を呈し、脆くなっている。

瓦

文字瓦 (22) 「平」の文字を刻んだ格子印を施した丸瓦。

金属製品

鉄製品 (23~27) 24は釘と考えられ、頭の部分を折り曲げている。23、25、26は一辺0.4cm前後の細長い鉄製品で、釘の可能性もあるが、10cmを越える長さを考えるとその他の製品の可能性も考えられる。27は先端部が平坦である。

199SD080淡灰色土出土土器 (Fig.30)

土師器

坏a (29、30) 底部へラ切り。底部と体部の境はやや丸味を帯びる。

耳皿 (31) 小片のためやや不明瞭が、体部内面に直線的に立ち上がる部分があるため、耳皿の可能性が考えられる。胎土は精製され、色調は橙茶色を呈する。

黒色土器

椀c (32) 坏部はやや丸味があり、内面調整はミガキcである。復原高台径8.2cm。A類。

緑釉陶器

椀 (33) 胎土はやや粗い土師質で、色調は灰白色を呈する。釉はやや濁った緑黄色で、やや厚めに施釉されている。防長産。

199SD090出土遺物 (Fig.30)

石製品

砥石 (34) 使用痕跡を2面残す。そのうち1面は特に研磨されている。両端を欠損し、現存する大きき9.4×6.6×7.0cm。

199SD090上層出土土器 (Fig.30)

土師器

坏a (35) 底部と体部の境はやや丸味を帯びる。

椀 (36、37) 口縁部を僅かに外反させる。36は体部がやや丸味を帯びる。37は体部がやや直線的。

須恵器

鉢 (38) 底部は丸味を帯びやや不安定な器形である。外面は粗いナデ。内面も粗いナデを施し、内

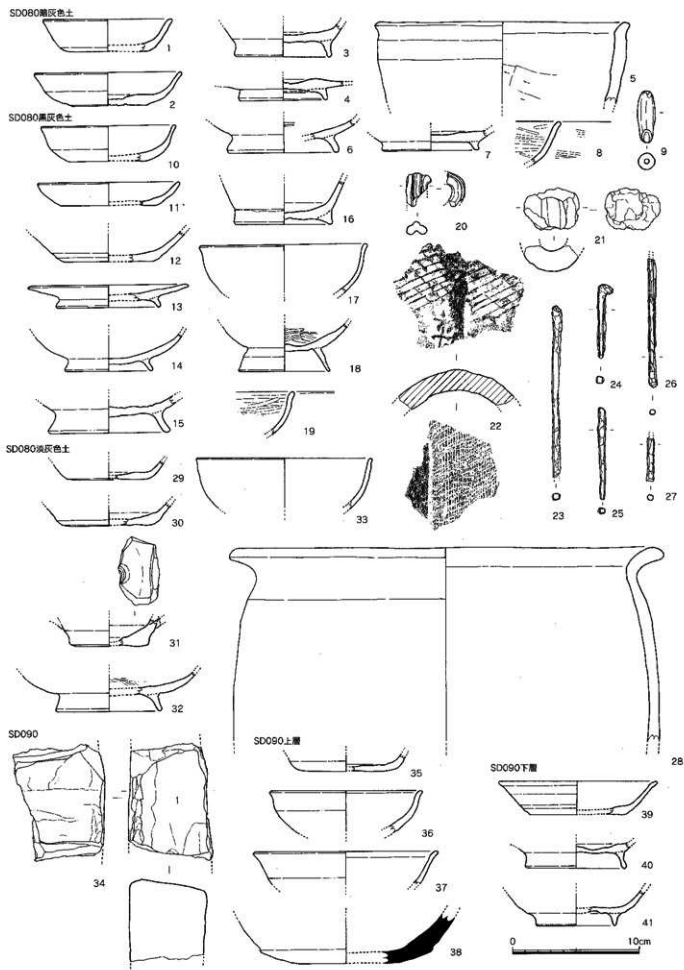


Fig.30 199SD080・090出土遺物実測図 (1/3)

面底部にススが附着する。

199SD090下層出土遺物 (Fig.30)

土師器

坏a (39) 底部ヘラ切り。体部は直線的に立ち上がる。

椀c (40、41) 40は内面底部にナデ調整が明瞭に残る。外面底部はヘラ切り。41は調整不明瞭。

土坑

199SK007出土土器 (Fig.31)

土師器

甕a (1、2) 口縁部分。1は胎土にカクセン石を僅かに含む。

須恵器

蓋3 (3、4) 2点とも口縁端部は僅かに折り曲げ、頂部から外面中位まではヘラケズリを施している。

坏a (5) 底部ヘラ切り未調整。

坏c (6、7) 6は高台内面の表面に僅かに赤色顔料のようなものが見られる。7は高台貼付がやや粗い。

鉢×壺 (8) 精製された胎土で、焼成状態はやや瓦器に近い。内外面ともヨコナデ調整。

199SK009出土土器 (Fig.31)

瓦器

椀 (9) 内外面ともミガキcが施されている。復原口径16.8cm。

椀c (10) 底部に三角形の低い高台を貼付する。

199SK031出土遺物 (Fig.31、Pla.35)

土師器

坏a (11) 底部と体部の境にやや丸味を持つ。

坏c (12) 12は体部が直線的で、高台は底部というより体部に貼付している。

椀c (13) 胎土は黄灰色を呈している。底部外面はヘラ切り後にナデ調整。内面底部は不定方向のナデ。

須恵質土器

鉢 (14) やや粗い胎土で、口縁端部は黒褐色を呈する。内面に幅広く浅い沈線が確認できる。東播系。

石製品

剥片 (15) 打面調整し、大きく剝離したもの。安山岩製。

199SK044出土遺物 (Fig.31、Pla.35)

須恵器

器種不明 (16) 器種は不明だが、内面もしくは底部と考えられる面に「田」と刻まれている。

石製品

滑石加工品 (17) 径4cmの孔が穿たれている。側面のうち3面が面取りされている。図の左側には碗に似たような浅い彫り込みが見られ、それに合わせて反対面も湾曲している。全面に細かいキズが付いている。

199SK046出土遺物 (Fig.31、Pla.35)

土師器

坏a (18) 胎土は精製され、橙茶色を呈する。調整は内外面とも回転ナデ。

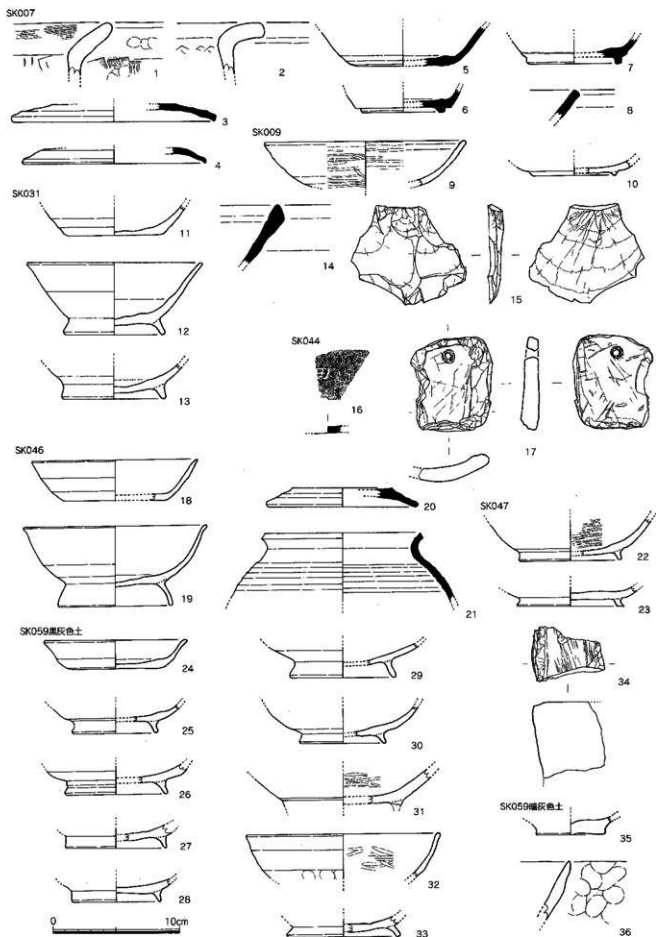


Fig.31 199次調査土坑出土遺物実測図 (1/3)

柄c2 (19) 体部は丸味を持ち、口縁端部は僅かに外反する。高い高台を貼付する。

須恵器

蓋 (20) 胎土は僅かに砂粒を含み、橙茶色を呈する。頂部は回転ヘラケズリ調整し、その他は回転ナデ。

小甕a (21) 復原口径12.7cm。外面は頸部から口縁部、内面にかけて黒色を呈し、光沢がある。自然釉の可能性も考えられるが、意図的に何か塗布された可能性も考えられる。体部は内外面とも波打つような回転ナデの痕跡を残す。

199SK047出土土器 (Fig.31, Pla.38・巻頭図版)

黒色土器

柄c (22) 内面はミガキcを施し、外面下半は回転ヘラケズリ調整を行っている。A類。

緑釉陶器

皿c (23) 胎土は淡い茶白色を呈し、精製されている。全面ヘラミガキを施した後に、淡い黄緑色に施釉する。釉はやや剥落気味。防長産。

199SK059黒灰色土出土遺物 (Fig.31)

土師器

坏a (24) 体部中位に緩い屈曲を有する。胎土には金雲母が目立つ。

柄c (25~30) 25~28は底部は回転ヘラ切り後ナデ。低い高台を貼付する。29、30は他に比べやや丸味を持った体部である。

黒色土器

柄c (31、33) 31は体部外面下部はヘラケズリ、内面にはミガキcが残る。A類。33は磨滅著しいが、内面にミガキcが僅かに確認できる。B類。

柄 (32) 内面はミガキc、外面下部に指頭痕を残す。A類。

石製品

砥石 (34) 欠損著しいが、研磨された面が1面残り、表面に細かいキズが見られる。

199SK059暗灰色土出土土器 (Fig.31)

土師器

柄 (35) 底部付近のため器種は不明瞭。胎土は明茶色を呈し、比較的精良。外面底部はヘラ切り未調整。

製塩土器

焼塩壺 (36) 胎土は橙茶色を呈している。外面は指頭圧痕を残し、口縁部はやや波打っている。II-b類。

199SK065出土土器 (Fig.32, Pla.36・巻頭図版)

土師器

坏a (1~12) 体部と底部の境に若干丸味が付いている。口径は11.5~13.0cm、器高は2.9~3.7cmを測る。底部切り離しはヘラ切り。内面底部はナデ、その他はヨコナデ調整している。

坏c (13~15) 13は底部に打ち割ったような穴があいている。欠損部がやや磨滅しているため、意図的に開けられたものと推測される。14、15は底部切り離しはヘラ切り、坏部は深い。

甕a (16) 頸部内面は稜をつけて屈曲している。調整は外面がタテハケ、内面はヘラケズリしている。内面は表面の剥落が目立つ。口縁部付近には粘土紐痕跡が確認できる。胎土は0.2~0.3cmほどの砂粒を多く含む。色調は暗褐色を呈している。二次焼成を受けている。

甕 (17) 頸部から口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリされ、外面はハケを感じさせるやや強いナデを行っている。胎土は粗く、淡黄灰色を呈している。

須恵器

把手 (18) 手捏ねによって成形しているため表面は指頭圧痕やナデで凸凹している。端部は傘の柄のように曲げている。

黒色土器

椀c (19~22) すべて体部は僅かに内湾しながら立ち上がる。内面はミガキcを施している。A類。21は内面底部に近いほど磨減が目立つ。また、外面は一部灰色に変色している。

緑釉陶器

椀 (23) 小片のため復原は若干困難だが、口径14.6cm前後と考えられる。口縁端部には輪花のようなものが見られる。体部中位で屈曲している。胎土は暗灰色で精良。濁った濃緑黄色の釉を施している。

皿c (24) 口縁部が僅かに外反し、端部に外面から押圧し、輪花をつくり出している。高台削り出し。内面は手持ちヘラミガキ。内面底部に重ね焼きの痕跡を残す。外面には波を打ったような細い沈線が見られ、粘土粒の痕跡の可能性も考えられる。胎土はやや黄色味を帯びた灰色を呈し、精製されている。釉は黄緑色で、一部やや濁った明るい緑色の釉を薄く施している。篠窯前山2、3号窯の可能性が考えられる。復原口径13.7cm、器高3.3cm。

199SK085出土遺物 (Fig.33, Pla.36・38)

土師器

坏a (1、2) 内面底部は不定方向のナデ。体部は回転ナデ。底部はいずれもヘラ切りし、板状圧痕を残す。

椀c (3) 内面底部は不定方向のナデ。体部は回転ナデ。外面底部の端部近くにやや低い高台を貼付する。

黒色土器

椀c (4~8) 4はやや高い高台。内面残存部分には回転ナデとナデが施されているが、ミガキは確認できない。A類。5は表面が磨減し調整不明。6は口縁端部を僅かに外反させる。内外面ともやや不明瞭だが、ミガキcが施されている。A類。7は一部淡茶色を残す部分がある。高台は低くやや太い。A類。8は僅かにミガキcを残存。焼成は良好である。B類。

瓦

平瓦 (12) 格子叩きに「平井」の文字を作りだした文字瓦である。

石製品

平玉石 (11) 黒緑色の石材で、表面は磨かれ光沢がある。大きさは径2.0~2.4cm、厚さ0.75cmを測る。

金属製品

鉄釘 (10) 断面が方形にした鉄釘で、頭の部分を折り曲げている。

199SK100上層出土土器 (Fig.33, Pla.36)

土師器

坏a (13、14) 13は底部と体部の境に若干丸味のある屈曲を有する。14は精製された胎土で、底部と体部の境は丸味を持つ。

椀c (15) 体部と底部の境に高台を貼付する。底部はヘラ切り。

黒色土器

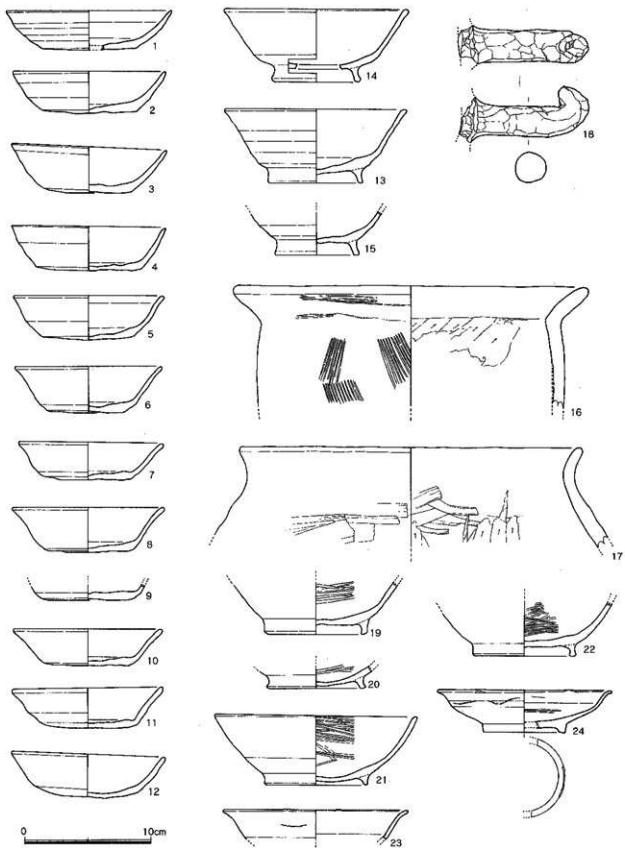


Fig.32 199SK065出土遺物実測図 (1/3)

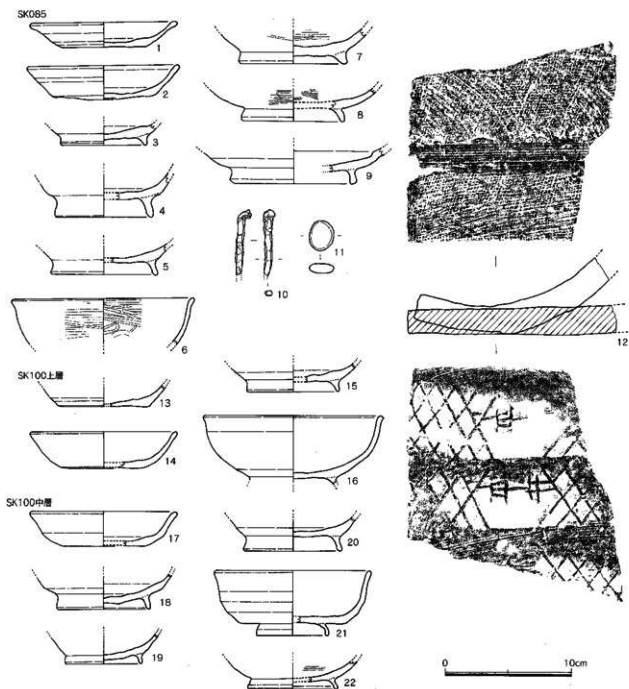


Fig.33 199SK085・100出土遺物実測図(1/3)

碗c (16) 口縁端部を僅かに外反させる。表面が磨滅しているため、調整は確認できない。A類。

199SK100中層出土土器 (Fig.33, Pla.36)

土師器

坏a (17) 体部中位に緩い屈曲を付ける。底部はヘラ切り。

碗c (18~21) 全体的に表面は磨滅している。18、19は胎土に砂粒を含む。20は胎土は精製され、やや高い高台を貼付する。21は深い碗で、口縁部を僅かに外反させる。胎土は僅かに砂粒を含むが、精製されている。底部には径が小さい貧弱な高台を貼付している。底部はヘラ切り。

黑色土器

碗c (22) 体部内面に僅かにミガキcが確認できる。高台内面には端部調整の際できたような沈線が

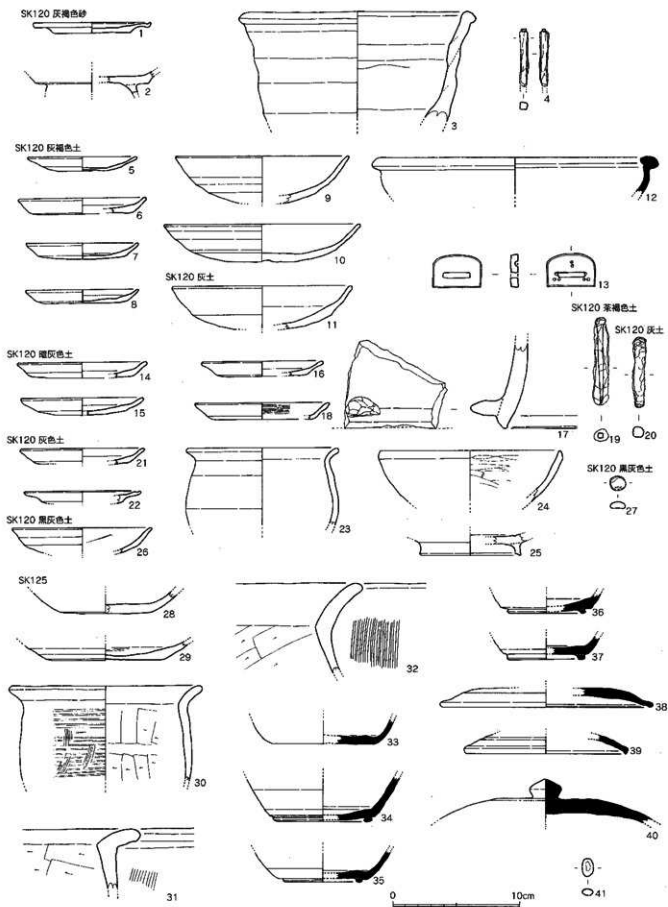


Fig.34 199SK120·125出土遺物実測図 (1/3)

見られる。B類。

199SK120灰褐色砂出土遺物 (Fig.34)

土師器

小皿a2 (1) やや硬質で、底部外面はヘラ切り痕跡を残す。

小皿c (2) 体部と底部の境には明瞭な屈曲を付けている。底部にははっきりとした高台を貼付する。

鉢 (3) 口径18.6cmに復原できる。全体的にやや凸凹していて、粘土紐の痕跡も確認できる。この鉢は灰褐色砂の検出面で土坑から出土したもの。

金属製品

鉄釘 (4) 断面が方形にした鉄釘で、先端を欠損する。

199SK120灰褐色土出土遺物 (Fig.34, Pla.37・巻頭図版)

土師器

小皿a (5~8) 口径8.6~10.0cm、器高1.1~1.3cmに復原できる。

丸底坏a (9~11) 全体的に体部中央外面に僅かな屈曲を残す。9は砂粒を含まない精製された胎土である。10はやや厚みがあり、内面は使用したことによるものと思われる磨滅が見られる。やや硬質。11は土層観察ベルトから出土。

須恵器

鉢 (12) 口縁部を玉縁状に作っている。胎土は精製されている。篠窯産。

石製品

巡方 (13) やや黒味が混ざった薄い緑色の石材である。中央に細長い孔を開ける。表面は丁寧に研磨され、背面に糸を通す穴が3つ彫られ、端部は面取りされている。

199SK120暗灰色土出土土器 (Fig.34)

土師器

小皿a (14~16) 口径9.6~10.2cm、器高1.2~1.35cmに復原できる。

甌 (17) 内面に突起を貼付する。外面は粗いナデ。小破片のため二次焼成の痕跡は残っていない。瓦器

小皿a (18) 口径10.6cmに復原できる。内面には僅かにミガキcが確認できる。外面はナデ。

199SK120出土遺物 (Fig.34)

金属製品

鉄釘 (19・20) 19は頭の部分を折り曲げている。茶褐色土出土。20は灰土出土。

199SK120灰色土出土土器 (Fig.34・Pla.38・巻頭図版)

土師器

小皿a (21) 口径9.6~10.2cm、器高1.2~1.35cmに復原できる。

小皿a2 (22) 口縁内面に明瞭な沈線を施している。

椀 (24) 口径14.2cmに復原できるが、小破片のためここでは椀として報告する。内面はミガキcが施され、外面も磨滅しているが、丁寧に調整されている。胎土は精製されている。

小甕 (23) 口径は12.0cmに復原できる。胎土に含まれる砂粒は比較的少ない。一部に二次焼成のガスが付着している。

緑釉陶器

椀c (25) 内面底部には幅広い沈線を施す。高台登付部分に段を付けている。胎土は精製され、茶灰色を呈する。内外面には淡緑色に施釉するが、底部内面は極めて薄く施釉する。近江産。

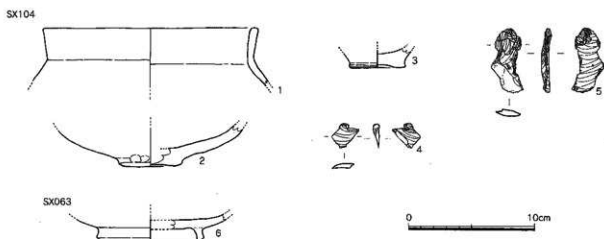


Fig.35 199SX063・104出土遺物実測図 (1/3)

199SK120黒灰色土出土遺物 (Fig.34)

土師器

坏a (26) 内面に工具の痕跡を残すが偶然当たったものか。

石製品

平玉石 (27) 径1.1~1.2cm、厚さ0.5cm。黒色の石材。

199SK125出土遺物 (Fig.34)

土師器

坏a (28、29) 胎土は明橙茶色土を呈している。29の内面にはミガキaが施されている。

甕 (30~32) 外面はハケ、内面はヘラケズリ調整を行っている。30は外面が横方向にカキ目状の調整が行われている。また、胎土には僅かにカクセン石を含んでいる。復原口径15.2cm。32は外面に二次焼成のススが僅かに付着する。

須恵器

坏a (33) 内面に墨痕のようなものが観察できる。外面底部はヘラ切り未調整。

坏c (34~37) 全体的に低い高台をやや内側に貼付している。器形はやや小振りで、高台径は6.2~7.8cmほどである。

蓋3 (38、39) 復原口径はそれぞれ16.8cmと13.0cm。38は外面頂部を回転ヘラケズリ調整している。

大蓋c (40) 外面は回転ヘラケズリされ、宝珠形のツマミを貼付し、その周辺は簡単なナデ調整を行っている。胎土は全体的に暗茶色を呈している。

石製品

平玉石 (41) 大きさは0.95×0.85cm、厚さは0.54cm。白色の石材。

その他の遺構

199SX104出土遺物 (Fig.35)

弥生土器

壺 (1、2) 1は直口壺で、復原口径17.0cm。2は胎土に0.1~0.2cmの砂粒を多く含む。

甕 (3) 貼付高台で、丁寧にナデ整形している。

石製品

剥片 (4、5) 黒曜石製。

199SX063出土遺物 (Fig.35)

灰釉陶器

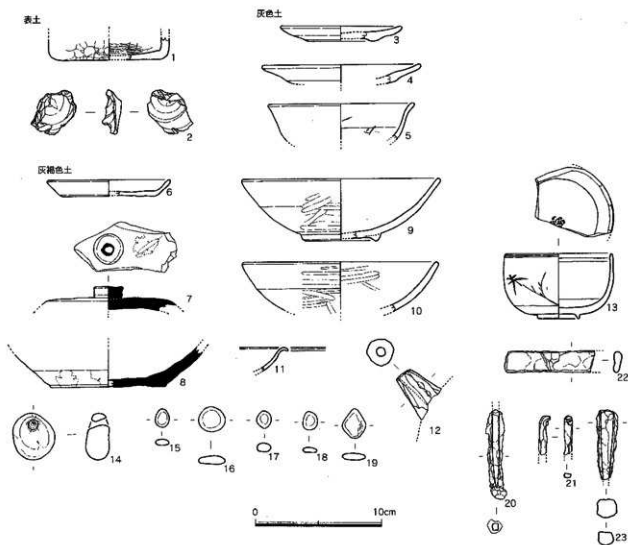


Fig.36 表土・灰色土・灰褐色土出土遺物実測図 (1/3)

皿(6) 胎土はやや粗く、明黄灰色を呈する。底部外面以外、灰緑色の釉を施している。内面底部はやや雑だが、輪状に釉を拭き取っている。復原高台径8.4cm。

表土出土遺物 (Fig.36)

石製品

滑石加工品 (1) 碗型に加工され、内面は横方向に削り、外面は小刻みに加工している。復原径は9.5cm。

剥片 (2) 黒曜石製の剥片。表面の風化が著しい。

灰色土出土土器 (Fig.36)

土師器

皿a (3, 4) 底部切り離しは磨滅し不明。内面ナデ、外面回転ナデ。

緑釉陶器

碗 (5) 体部は僅かに外反しながら立ち上がる。胎土は淡灰色を呈し、少量の細砂粒を含む。釉は淡黄緑色で、全体に薄く施釉されている。

灰褐色土出土遺物 (Fig.36, Pla.38)

土師器

小皿a (6) 底部切り離しは糸切りで、板状圧痕を残す。

須恵器

蓋c (7) ツマミの頂部に円形状の墨書が見られる。

須恵質土器

鉢 (8) 回転糸切り。内面はやや荒れている。こね鉢の可能性が考えられる。東播系。復原底径9.2cm。

瓦器

椀c (9) 内外面はミガキcを小刻みに施している。復原口径15.6cm、器高4.9cm、高台径6.0cm。

椀 (10) 体部中位がやや厚い。内外面ともミガキcが残る。復原口径15.4cm。

緑釉陶器

皿 (11) 口縁端部を大きく外反させている。胎土は僅かに細砂粒を含み、黄灰色を呈する。釉は黄緑色で、部分的に剥落している。

水注 (12) 胎土は僅かに細砂粒を含み、黄灰色を呈する。表面はヘラケズリし整形している。中央には0.7cmほどの円孔が開けられている。釉は残っていないが、釉が剥がれ落ちた緑釉陶器の可能性が考えられる。

染付

椀 (13) 肥前系。復原口径8.4cm、器高5.2cm、高台径3.4cm。

石製品

円形加工品 (14) 大きさは3.7×3.3cm、厚さ1.9cm。端部に約0.7cmの穿孔を施している。

平玉石 (15~19) 15は大きさは1.4×1.0cm、厚さ0.4cm。暗灰色の石材。16は大きさは1.9×2.1cm、厚さ0.7cm。淡灰色の石材。17は大きさは1.4×1.2cm、厚さ0.8cm、白色の石材。18は大きさは1.5×1.1cm、厚さ0.4cm、黒青色の石材。19は大きさは2.3×1.8cm、厚さ0.6cm。淡灰色の石材。

金属製品

鉄釘 (20, 21) 20は頭部を欠損している。21は頭の部分を折り曲げている。

用途不明品 (22, 23) 22は錆が厚く覆っているため、詳細は不明だが、刀子のようなものと推測される。23は釘よりやや太いため鑿のようなものと考えられる。

4、調査まとめ

今回の調査で特記すべき点を以下のとおりである。

- ・南北路（坊路）の検出。
- ・条坊区割りの検出。
- ・掘立柱建物跡の検出。
- ・井戸が多数検出。
- ・緑釉陶器が多数出土。
- ・白磁I類が多数出土。

これらのうち条坊区割りと緑釉陶器について、若干の検討を行う。

(1) 緑釉陶器について

1、はじめに

大宰府の古代における土器相で搬入品の多種多様さは、大宰府が西日本の政治・経済的な中枢の役割を担っていたことで、都や西日本の各地との交流拠点であったことを想起させる。

多様な搬入品の中で、緑釉陶器は大宰府で一定の出土頻度があり、各生産地での編年・分類等の研究成果を踏まえながら、その特徴から生産地を特定し、流通年代が追える資料として有効である。

条坊跡第199次調査は、過去に報告された遺跡の中でも緑釉の出土破片数が多い（Fig.37）。そのことは第199次調査が条坊推定復原案の朱雀大路に隣接しているという、条坊内での地理的位置からも推察できる。しかも、ここでは生産地が特定でき、かつその生産地での特定の一形式にあたると考えられる緑釉の椀・皿が出土した。このことから、かねてより議論されてきた生産地と消費地での出土年代の整合性について具体的な検討資料になるのではないかと考えている。

2、出土遺物

条坊跡199次調査は推定条坊の区割りで右郭10条1坊にあたり、平安時代の遺構から緑釉陶器を多数出土している条坊跡第34次調査（右郭11・12条1・2坊）、条坊跡第81次調査（右郭12条2坊）に、比較的近い地区に位置し、それらの遺跡と同様に緑釉を多く出土している（Fig.38）。

第199次調査で注目されるのは、SK065出土の畿内産緑釉皿・SD070出土の畿内産緑釉椀ないし皿・SE130出土の防長産緑釉椀の3点である。いずれも一括とは言えないが、出土状況は良好な方で、大宰府への搬入品として、年代を考える参考資料になると考えられる。そこで、この3点の具体的特徴と出土遺構の供伴遺物から出土年代を検討してみたい。

1) SK065出土緑釉

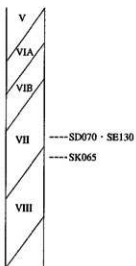
Fig.39-1はSK065出土緑釉皿で、非常に器壁が薄手に作られ、体部上位で屈曲、口縁端部を外反させるという、特徴のある器形をしている。いわゆる稜皿で、屈曲部まで回転ヘラ削りを行い高台は輪状に削り出している。外面は判別が難しいが、内面には細かい単位のヘラ磨きを施し、口縁端部は外側から押圧して輪花にしている。胎土は明灰色を呈しキメ細かく精良、微細な白色砂と黒色粒を若干含んでいる。見込みと外面底部に粘土が細く付着して、直接重ね焼きした跡が観察される。釉は黄緑色を呈し、高台の畳付まで丁寧に施釉してムラが少ない。口縁部下位に不規則な沈線が見られ、これは粘土紐の痕跡ではないかと考えている。

Fig.39-2は同じSK065出土の緑釉椀の口縁部片である。これも、前記の皿と共通の特徴をもち屈曲部から口縁端部までが1より長いので椀と考えられる。薄手で、体部中部で屈曲、端部は外反する。かなりの小片なので口径は正確ではないが、推定復原で14.6cmを測る。断定はできないが口縁端部に輪花で

緑軸陶器出土遺跡 (既報告分)

遺跡名	次数	検片数	遺跡名	次数	検片数	遺跡名	次数	検片数
条坊跡	19	45	条坊跡	91	3	条坊跡	199	64
○	27	32	○	93	16	○	204	1
○	34	151	○	94	10	国分寺跡	9	1
○	43	36	○	98	6	○	10	1
○	44	10	○	106	20	○	13	1
○	50	33	○	117	10	○	15	1
○	59	8	○	118	10	○	21	1
○	64	99	○	119	1	○	23	1
○	65	6	○	120	20	国分尼寺	7	4
○	68	10	○	121	1	○	10	2
○	73	7	○	133	4	○	14	1
○	77	1	○	141	17	川添	1	2
○	81	82	○	142	6	辻	1	8
○	87	39	○	149	180			
○	89	25	○	154	2	両条坊34次は未報告		

大宰府土器編年



土器器坪aの法量

口径 (cm)	199SK065	199SE130
13.0 ~ 13.5	1	1
12.5 ~ 12.9		2
12.0 ~ 12.4	5	1
11.5 ~ 11.9	5	2
平均	12.0	12.4

器高 (cm)	199SK065	199SE130
3.5 ~ 4.0	5	2
3.0 ~ 3.5	5	3
2.5 ~ 2.9	1	
平均	3.35	3.46

Fig.37 緑軸陶器出土遺跡および遺構編年図

はと思われる歪みがあるので輪花として復元した。胎土は青灰色を呈し若干砂粒を含みが緻密で、須恵器と同様の胎土である。胎土が前記の皿より暗いため釉は緑色が濃く見えるが、やはり丁寧に施している。この碗の口縁部下位にも1と同様な不規則な沈線が見える。2の碗と器形が非常によく似ていると考えられる碗が御笠9次調査で出土しているので参照のため図示した (Fig.39-10)。京都の洛西産と報告されている。〔御笠団印出土土器周辺遺跡〕一太宰府市の文化財第47集)

2) SD070出土緑釉

Fig.39-3は椀か皿かは不明。高台を円盤状に削りだした後、0.5cmほどの幅で浅い溝を一周させて蛇の目高台に仕上げている。胎土は明灰色を呈し、精良だが細かい黒色物質を多く含んでいる。底部外面まで釉を薄く施し、須恵質に焼成される。以上の特徴から、産地は畿内-洛西産と考えられる。同様の特徴をもつ緑釉の大宰府での出土事例は、条坊跡第44次調査側溝にある。

3) SE130出土緑釉

Fig.39の4~9まで緑釉、11・13は同じくSE130出土灰釉段皿・須恵質土器鉢ないしは壺で篠産と考えられる。4は輪花椀で、胎土は明灰色を呈し、精良で薄く施釉され須恵質に焼成されている。畿内-洛西産と考えられる。6~9は防長産と考えられ、ここでは器形に特徴がある7について、検討したい。7は口縁部小片のため口径は計測できないが、体部中位に屈曲があり、内面の屈曲部は明瞭な段がついている。胎土は明茶灰色、キメはやや粗く砂粒を少量含んでいる。淡緑色の釉が薄目に施されるが、かなり剥落している。焼成は土師質である。SE130暗灰色土出土。同一個体と考えられる口縁部片、体部屈曲部片、高台片がSE130淡灰色土東からも出土、高台は8に図示した。胎土・色調は7と同じで全面施釉し、断面方形で低めの高台をやや外開きに貼付、高台底部に浅い段がつく。これと同じ型式と考えられる緑釉椀が筑後国府跡第59-3次調査SK2931で出土している。久留米市教育委員会白木守氏のご好意により実測する機会があったので、12に掲げた。SK2931出土緑釉椀は口径14.5cm、器高4.5cm、高台径7.5cmを測り、口縁部を若干欠くがほぼ完形品である。素地はやや赤味のある茶灰色でキメ細かく白色砂を少量含んでいる。釉はやや濁った黄緑色を呈し、厚めに施されている。体部中位に屈曲があって、内面は屈曲部に沈線を施して段を作り、外面は屈曲部以下は回転ヘラ削りされている。ややシャープさに欠けるが、ためて断面台形に近い高台が「ハ」の字形に開いて貼付される。高台内面に三又トチンを使用したと考えられるハリの痕があり、見込みにも小さく丸い釉の剥離痕が残っている。口縁部には緑彩を施

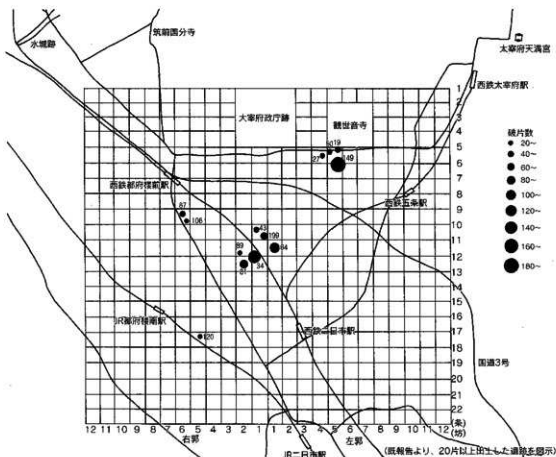


Fig.38 緑釉陶器出土遺跡分布図

し、外面から工具で線刻し端部はやや押さえて5個の輪花に作っている。199SE130の緑釉碗は輪花の有無は不明だが、筑後の碗よりシャープな感じを受ける。

3、年代観

2で述べたそれぞれの緑釉について出土した遺構の供伴遺物から、時間軸上の位置づけを行い、あわせて、それらが産地での編年なり位置づけに対し矛盾がないか検討を行ってみたい。(Fig.37土師器・坏aの法量分布)

1) SK065

ここでは供伴遺物は多く須恵器の把手、土師器の坏a・碗c・甕a、黒色土器A類の碗、越州窯系青磁の碗、龍泉窯系青磁碗が出土している (Fig.32)。

土師器の坏aは法量と底部形状から大宰府編年のVIA期からVII期までに収まると考えられる。また土師器碗cは体部が直線的に上方へ開くタイプで9世紀代まで、甕aは8世紀後半によく見られるタイプと、口縁が肥厚しない9世紀代にてでくるタイプとがある。黒色土器A類の碗は4点のうち、見込みを押さえ底部に丸味をもつものが2点あって、9世紀後半から10世紀初めに出てくる形態を持っている。越州窯系青磁碗はI-5類⁽²⁰⁾、龍泉窯系青磁碗は鎮連弁をもつ碗 II-bで後者は混入と考えられる。(Fig.39-2)の碗は、御笠団印出土周辺遺跡第9次調査のSK035黄茶色土から出土した緑釉碗 (Fig.39-10)と同様の器形と考えられその特徴をあげてみると、胎土は精良で明灰色から黄白色を呈し、ややムラがあるが明緑色の釉を薄く施しており、丁寧な作られている。しかし、口縁部の外反は緩やかで1・2ほどシャープさはないが、全体的に端正な雰囲気がある。10も直接重ね焼きをしている。

まず1の皿について、器形・製作技法は大宰府史跡70SK1800・大宰府史跡74SD205A出土の各緑釉皿(洛西型『大宰府出土の施釉陶器の編年について』による⁽²¹⁾)と類似し、同じ系譜を引くと考えられる。

出土年代は大70SK1800は9世紀後半、大74SD205Aは年代に幅があり10世紀前半までとされる。

10の碗の産地について、輪状高台を削り出し、素地は明るいが硬質焼成であるなど製作技法から畿内産と考えられるが、洛西型なのか、篠窯系なのか意見の分かれるところである。畿内で緑釉の生産が洛北から洛西に移行するのは9世紀中頃といわれ、さらに篠窯に移るのは10世紀前半になってからとされている。篠窯のなかで緑釉が確実に焼成されたのは前山2・3号窯と黒岩1号窯⁽²³⁾と言われ、最近発表された「篠窯の実年代」の中で石井清司氏は篠の碗・鉢の年代を再検討され前山3号窯は平安京Ⅱ期中・新の段階と考えられる⁽²⁴⁾と述べられている。

Fig.39-1・2・10を篠窯産ではないかと考える根拠は、『都城の土器集成Ⅱ』の平安京右京二条三坊十五町遺跡SX025の概要⁽²⁵⁾の中で出土品についての図と共に、大半は篠窯の製品であると述べられており、その中で紹介されている緑釉と器形がよく似ているという点、京都府向日市で開かれた研究会のみに実見した黒岩1号窯の緑釉と10の御笠9次調査の緑釉と器形がよく似ていたということである。このことから10の碗は篠窯の可能性を考えていた。SX025は前述の『都城の土器集成Ⅱ』の中で平安京の土器型式のⅡ期新(9世紀末～10世紀初)にあたり、御笠9次調査SK035は供伴遺物から大宰府土器編年のIX期(10世紀中頃)と報告されている。

先に述べた大宰府史跡の2点と条坊跡199SK065出土1・2の緑釉との相違点は後者は器壁が薄く、細かなヘラ磨きを施し口縁部の外反度など全体的に繊細な雰囲気がある等で、同様の製作技法を持つ御笠9次調査の碗が上記で述べたように篠窯と考えられるのであれば、SK065緑釉皿も篠窯産の可能性を考えても良いと考える。この点について、京都府埋蔵文化財センターの石井清司氏にご意見を伺うことができた。それによると条坊跡第199次調査の緑釉皿は篠窯、前山2・3号窯でもよいのではないかとということで、洛西よりも篠窯の可能性を示唆され、あわせて前山2・3号窯は平安京Ⅱ期中～新の前半にあたり、9世紀第3四半期から900年前後くらいを考えているということであった。以上の事柄を総合すると、畿内の緑釉生産が篠窯に移った後も、9世紀後半頃から900年前後という割合早い時期から大宰府に搬入された可能性があることを条坊跡第199次調査の緑釉は物語っている。今後、同様な形式の緑釉の出土をまって再度検討していきたい。

2) SD070

この溝は下から灰色土、灰褐色土、暗灰色土との層からなり、灰色土と灰褐色土層からは須恵器と製塩土器が出土、8世紀後半までの様相であるが、上層の暗灰色土からは土師器の碗c1が2片、坏aの小片3片とFig.39-3の緑釉が出土している(Fig.29)。坏aは小片だがいずれも底部から体部下位が観察でき、底部形状から大宰府土師器の編年からVIB～VII期あたりと考えられる。3の緑釉と底部の形状がよく似ている底部片が条坊跡第44次調査側溝で出土している。それは、胎土は青灰色から灰色を呈し緻密で、濁ったオリーブ色に発色した釉が高台外面まで施される。見込みのヘラ磨きは丁寧で、直接重ね焼きしたことが細く円形に残った粘土の痕跡で観察できる。底部外面は高台から一部釉がはみ出し、幅0.5cm程の沈線が一巡して蛇の目高台に仕上げている。焼成は須恵質。このように蛇の目高台風に沈線を巡らせて作っている事例が写真図版ではあるが『日本の三彩と緑釉』⁽²⁶⁾の中に掲載されており、石作窯跡(洛西)資料として紹介されている。このような底部の処理の仕方が石作窯の、ないしはその時期の一つの特徴と結びついているのであれば、SD070の緑釉も洛西-石作窯、ないしは洛西型と考えて差し支えないと思われる。条坊跡第44次調査側溝の年代は不明。SD070は上層の暗灰色土からの出土品が少なく、下層の灰褐色土、灰色土は上層と年代がやや開くが、上層の暗灰色土の年代は9世紀後半を下限と考え、3は畿内-洛西から9世紀後半頃までにもたらされたと考えられる。

3) SE130

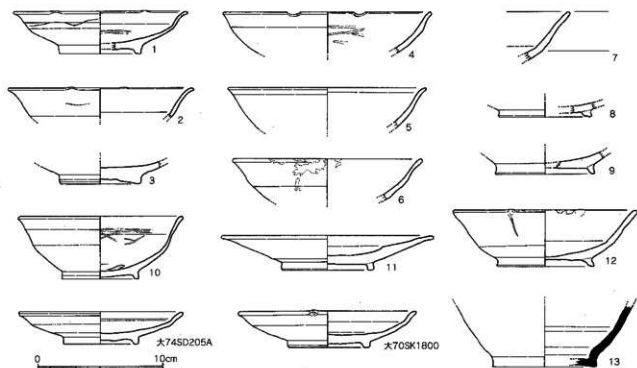


Fig.39 第199次調査出土緑釉陶器および搬入土器 (1/3)

かなり大きめの方形の井戸で、上層から暗灰色土・淡灰色土東・灰褐色土・明灰色土の埋土があり、下層は枠内・ウラゴメと堆積する。出土遺物は土師器坏a・碗c・甕a、黒色土器A類碗c・甕、緑釉、灰釉段皿、篠窯と考えられる鉢ないしは壺の底部、白磁碗1-1a・I類の小型品、越州窯系青磁碗1-1a・I-2・I-5、長沙窯青磁碗片、軒平瓦・軒丸瓦である (Fig.27・28)。埋土による大きな時間差は見られないが、灰褐色土から出土した底部の丸い形状の土師器坏は口径11.6cmを測り、他の土師器坏aとは形状を異にしている。底部の丸味を意図したのか、たまたま丸くなったのか、残存が1/4程度しかないので、この一点のみで判断するには躊躇される。図示された他の土師器の坏aはほぼVIB～VII期段階、土師器碗cと黒色土器A類の碗はVII期～VIII期。黒色土器A類甕もVII期に出土するタイプである。しかし、表2に掲げていないが底部のみ残存する土師器の坏aを調べると、V～VII期となりほぼVII期に収まる。このSE130の明灰色土から防長産の緑釉碗、灰褐色土から前者と良く似たタイプの同じく防長産の緑釉碗、淡灰色土から緑釉の高台と碗の口縁部破片、灰釉陶器の段皿、暗灰色土から畿内・洛西産の緑釉輪花碗、防長産の碗と高台が出土した。土師器、黒色土器からSE130の年代はVII期主体だがVIII期の様相も入ってきており、VII > VIIIと考えて良いと思う。この年代観で搬入品を見てみると、まず11の灰釉の段皿は、小さな角高台を持ち、底部と体部下位を回転ヘラ削り、底部から体部にかけて厚く作られた器壁、口縁部外面まで施釉され、釉は薄いが刷毛塗りであろうと思われることから、K-14-2～K-90-1段階 (齊藤孝正氏は840年前後とされている²⁰⁾)にあたる。篠産の須恵質土器13は器種が決定できないのでここでは判断を留保したい。緑釉は4個体あるが7と8は同一個体と考えられる。7は直線的に外へ開く口縁をもち、口縁部下位で明瞭に屈曲して内面屈曲部に沈線様の段をつけるいわゆる稜碗タイプである。先にふれたように筑後国府跡第59-3次調査SK2931の碗と殆ど同じ形式で、筑後国府出土の碗は高橋照彦氏は体部に稜をもつタイプをC類に分類、9世紀後半に位置づけられている²⁰⁾。また、柴尾俊氏は長登銅山跡より出土した稜碗を高橋氏の分類を採用し、長門産・C類として紹介されている²⁰⁾。

以上のように、9世紀後半頃防長でも稜碗タイプの碗が生産され、それが大宰府にももたらされていると考えている。

4、まとめ

条坊第199次調査では期せずして緑釉の9世紀後半前後の搬入状況を考える手がかりが得られた。その中で稜輪・稜皿タイプが3点あり、稜皿の器形は9世紀には白磁のI類の皿・越州窯系青磁のI類の皿に先例があって、まだ稀少だった陶磁器を祖形として影響を受けて出現したという考え方もできるのではないかと。ともあれ、器形に特徴があって、検討材料に恵まれたが、緑釉産地の編年や平安京、篠窯の土器編年等についての理解がまだ不十分で、今後の課題も大きいと感じている。

また畿内産の緑釉が初期から終末期にかけて生産窯が時間的に移動し、洛北群・洛西群・篠窯群と移行しているのは産地の方の研究でいろいろな形で紹介されているので頭では理解しているが、消費地で具体的に遺物で特定することは難しい。今回は1999年の京都の向日市で実際に遺物を実見する機会があったこと、京都府埋蔵文化財調査研究センターの石井清司氏と遺物の写真と実測図をメールでやりとりしていろいろご教示いただいたことで考えをまとめることが出来た。また、防長産の緑釉の良好な資料として久留米市教育委員会の白木守氏に実測の便宜を計っていただき、小さな破片から全体の様相をつかむことが出来たことも大きい。ここで改めてお礼を申し上げます。

(2) 条坊について

大宰府条坊の研究は鏡山猛氏⁽²⁰⁰⁾に始まり、その後文献や発掘調査成果をもとに金田章裕氏⁽²⁰¹⁾、狭川真一氏⁽²⁰²⁾、井上信正氏⁽²⁰³⁾などが修正を加え、より具体的な大宰府の都市空間が示されるようになってきた。それらの具体的な内容についてはそれぞれの論考を見ていただくとし、これらの論考をもとに今回の調査について検討していきたい。

○坊路（南北道路）

大宰府条坊跡の道路痕跡と推定される遺構については、発掘調査によって確認される例は少なくなく、狭川氏はそれらの調査結果を整理し、政庁Ⅱ・Ⅲ期の条坊痕跡は重複もしくは近接した位置で検出され、また、南北方向の条坊痕跡が約90m間隔で検出されることを指摘した⁽²⁰²⁾。その後の調査でもそれを裏付ける成果が得られている。その後さらに調査例が増加し、井上氏によってより具体的な復原案が示された（注13、Fig.40）。

今回の調査区でも、東側で検出された南北溝（SD070、075、080、090、095）は、推定朱雀大路から東におよそ90mに位置し、これらの溝の延長上に位置する条坊跡第181次調査や第168次調査でも同様の溝群が検出されている。井上氏の復原案をもとに検討すると、これらの溝群は左郭一坊の南北道路（坊路）の側溝であったと考えられる。Ⅵ・Ⅶ期埋設の溝（SD070）が1条あり、奈良時代に開削された可能性も考えられる。この溝に対応する溝は不明瞭だが、平安前期埋設のS-48が溝の残りである可能性も考えられる。第168次調査では明瞭に2条確認されているが、北隣の条坊跡第181次調査では第199次調査と同様に明確な溝が1条のみ確認され、井上氏はその西側の空閑地を道路面と考えている⁽²⁰³⁾。平安時代にはX期頃埋設するSD075、080など2条平行する溝があり、それらに挟まれた部分が道路と考えられる。X期頃の道路路面幅は約3mを測り、条坊内で検出される道路の典型的なものである。

○区割り

条坊一区画について当初から論じられてきたが、条坊一区画のさらに内部区割りについては論じたのは井上氏である⁽²⁰³⁾。井上氏は左郭で行った条坊跡第168・181次調査等において遺構密度に粗密があることから、構造物の位置に制約があったと考え、遺構密度の低い部分は構造物を造り得ない、何らかの境界を意味していると指摘している。また、溝、柵列、連続土坑なども境界（場合によっては道路）を意味すると考えている。これらを抽出すると井上氏は遺構密度の薄い部分や溝など境界を意味するで

あろう遺構が約20～25m前後の間隔で見られるとし、東西におよそ4区画の区割りがあったことを推定している。今回の調査地が位置する左郭一坊については、奈良時代には1区画分を朱雀大路の一部に充てているため、3区画であったとしている。

そこで、この復原案をもとに今回の調査区を見ていくと、北側では奈良時代から10世紀までの土坑の集中ラインが座標X=56086.00付近にあり、11世紀後半以降になると、5m程やや北側に5基の井戸が集中している。その間は遺構が散散としているため、この付近に南北を分ける境界(A)があったと推測される。東側については奈良時代から10世紀までの土坑が、座標Y=-44741.00ラインに集中しているように思え、その東側の溝との間は、井上氏が第181次調査で指摘したようにやや遺構が散散としている。11世紀後半以降になると、11世紀後半埋没の溝(SD040)が掘られている。大きく2時期に分けて考えてみたものの、時代にかかわらずその境界ラインは大きな変化は見られないことがわかった。また、2棟の掘立柱建物の間には、横列(SA035)や南北に掘られた土坑(SK100など)の存在から、座標Y=-44763.00ライン付近(B)に境界が存在した可能性が考えられる。12世紀後半から僅かに時間を置いて、13世紀後半埋没の南北溝(SD025)と井戸(SE105)があり、南北溝の東側に横列(SA135)が確認されている。この横列の時期については遺物や切り合いなどから特定できないが、溝と同じ方位を示すことから、同時期の可能性も考えられる。これらの溝や横列から鎌倉時代になっても、このラインに境界が存在したことが窺える。

また、周辺の調査(条209・215次調査)から、この調査地のすぐ南を条路(東西路)が通ると考えられ、現在調査中の西隣の第220次調査でも予想通り東西溝が確認されている。

今回の調査成果は、井上案(Fig.40)のL1-Bの延長上に位置するBライン付近に、条坊168次調査と同様に区割りが存在することが窺え、条坊一区画内を東西4区画するという井上案を補強する結果となった。また、南北についてもAライン付近に区割りが存在した可能性が推測され、均等に区割りされたと仮定すると東西と同様に4区画に細分されていた可能性が考えられ、条坊一区画内はほぼ正方形の区画によって16分割されていた可能性が推測される。しかし、条坊跡第168次調査のように2区画にまたがる建物が存在するなど不明瞭な点も数多いが、今回は発掘調査を進める上での課題として提示し、今後調査例が増加していく中で検証・修正していかなければならないであろう。

○掘立柱建物

今回の調査区内には、奈良時代以前に2棟の掘立柱建物が造られているが、出土遺物からの建築年代の特定は非常に難しい状況である。

2棟の掘立柱建物をそれぞれ詳細に検討していくと、まずSB020はその掘り方が8世紀代のビット(S-34)を切っている。そして、最終埋没時期がXIV期(12世紀中頃)の井戸(SE015)によって切られ、また、年代を与えるには遺物量が乏しいが、奈良時代の可能性が考えられるS-58にも切られている。これらのことからSB020は奈良時代の建物跡であると推測される。SB060は8世紀後半の井戸(SE045)とIX期(10世紀中頃)の井戸(SE050)によって切られていることから、8世紀後半より古いことは明らかである。また、この2棟の埋土は、SB020が比較的分かりやすい埋土であったのに対し、SB060は非常に分かりづらい埋土であったことから、廃絶時期の違いが予想される。

また、上記したような区割りから判断すると、2棟の掘立柱建物はそれぞれ別の区画内に1棟づつ建てていた可能性が考えられる。平安時代の区画内には、11世紀後半～12世紀後半にかけて埋没した井戸が存在するものの、建物は検出されていない。しかし、SD040が深さ10cm未満の非常に浅い溝であることから、かなり削平されていたことが窺え、かつて建物が存在したとしても、その基礎部分は削平された可能性も考えられる。

また、SB060の掘立柱建物を切るように奈良時代の井戸（SE045）が造られている。あくまでも推測の域をでないが、SE045に転用されている井戸枠部材は、この掘立柱建物の解体部材の一部を用いた可能性も考えられる。

今回の調査地の周辺は新設道路に伴う調査が行われ、整理報告作業中の現も隣接地で条坊跡第220次調査が行われている。これら周囲の調査を含めた成果については、それらの報告書でまとめて述べることにする。

註

1. 陶磁器の分類については「大宰府条坊跡XV」-陶磁器分類編-2000を使用し以下同様とする。
 2. 水谷善克「藤前山2・3号竈跡再考」『京都府埋蔵文化財論集第4集』2001の中で須恵器を焼成しており、須恵器は2・3号竈とも時期的な変化がみられないので報告書では2・3号竈出土とあつかわれていると述べられている。
 3. 山本信夫「大宰府出土の施釉陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告第82集』1999
 4. 石井浩司「藤原の実年代」『京都府埋蔵文化財論集第4集』2001
 5. 平尾政幸「平安京右京二条三坊十五町SX25」『都城の土器集成II』-古代の土器研究会編-1993
 6. 『日本の三彩と緑釉』-開館20周年記念特別企画展-愛知県陶磁資料館 1998
 7. 齊藤孝正「東海地方の施釉陶器生産-遺投案を中心に-」『古代の土器研究 第3回シンポジウム 律令的土器様式の西・東・3-施釉陶器の生産と消費』奈良文化財研究所 1994
 8. 高橋照彦「防長産緑釉陶器の基礎研究」『国立歴史民俗博物館研究報告第50集』1993
 9. 柴尾俊介「長門・周防の緑釉陶器生産」『古代の土器研究 第3回シンポジウム 律令的土器様式の西・東・3-施釉陶器の生産と消費』奈良文化財研究所 1994
 10. 鏡山猛「大宰府都城の研究」風間書房 1968
 11. 金田章裕「大宰府条坊プランについて」『人文地理』41-5 1989
 12. 狭川真一「大宰府条坊の復原～発掘調査成果からの試案～」『奈良製研究』6 1990
 13. 井上信正「大宰府条坊の区割りについて」『奈良製研究』第13号 1997
- 井上信正「大宰府の街区割りと街区成立についての予察」『奈良製・古代都市研究通巻17号』 2001

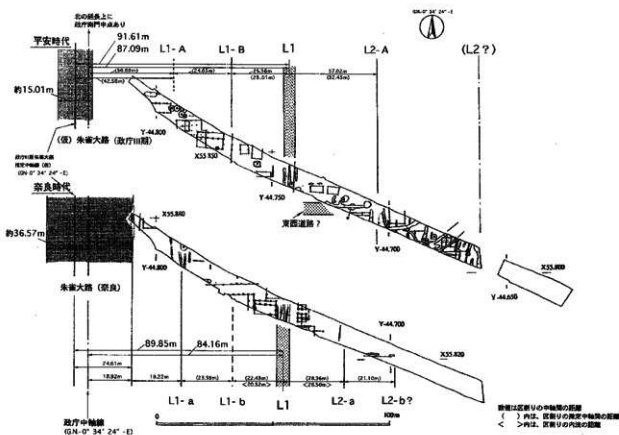


Fig.40 大宰府条坊地割り復原案 (条坊第168次調査)

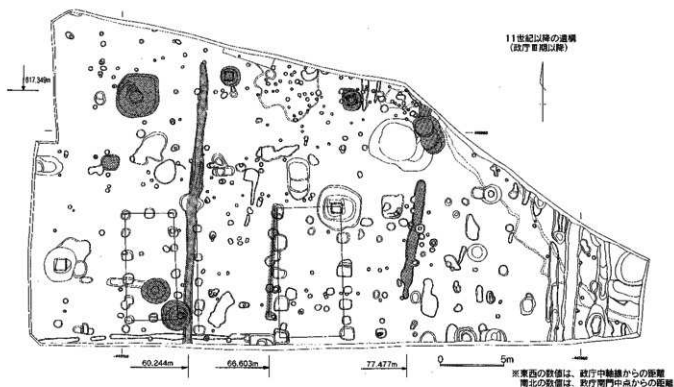
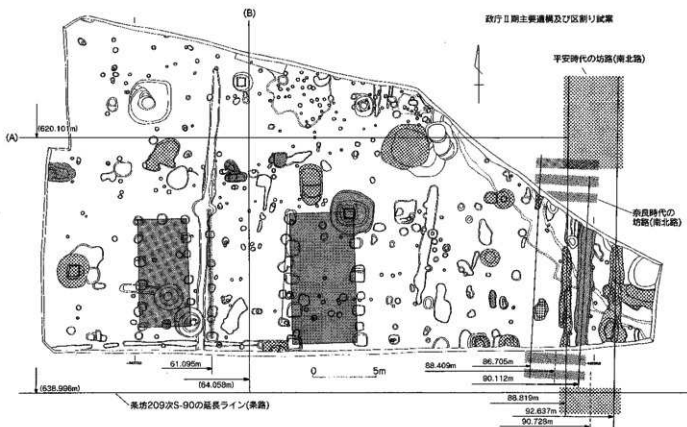


Fig.41 第199次調査 時期変遷図及び復原試案 (1/300)

Tab.1 第199次調査検出条坊関連遺構任意中点座標値

遺構番号	位置 ※	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X方向 (m)	Y方向 (m)	
SD025	北P	56093.00	-44765.64	-615.098	61.248	N-3° 13' 58" -E
	南P	56071.40	-44766.86	-636.709	60.244	
SD040	北P	56083.60	-44748.58	-624.327	78.401	N-7° 29' 45" -E
	南P	56076.00	-44749.58	-631.936	77.477	
SD070	北P	56080.00	-44736.56	-627.806	90.457	N-3° 0' 19" -E
	南P	56072.00	-44736.98	-635.810	90.112	
SD075	北P	56078.60	-44738.12	-629.222	88.911	N-1° 20' 52" -E
	南P	56071.80	-44738.28	-636.023	88.819	
SD080	北P	56079.00	-44734.24	-628.783	92.786	N-1° 48' 0" -E
	南P	56072.00	-44734.46	-635.785	92.637	
SA035	北P	56080.40	-44766.15	-627.702	60.864	N-1° 3' 39" -W
	南P	56072.30	-44766.00	-635.800	61.095	
SA135	北P	56082.02	-44760.02	-626.021	66.978	N-3° 4' 21" -E
	南P	56073.45	-44760.48	-634.595	66.603	
SK007	任意中点	56085.24	-44778.00	-622.981	48.966	—
SK100	任意中点	56085.00	-44758.16	-623.023	68.808	—
SK120	任意中点	56090.80	-44770.80	-617.349	56.110	—
SE130	任意中点	56087.28	-44750.12	-620.662	76.824	—
S-48	任意中点	56083.20	-44740.28	-624.644	86.705	—
南北境A	推定ポイント	56088.00	-44766.00	-620.101	60.938	
東西境B	推定ポイント	56076.00	-44763.00	-632.070	64.058	
条209 S-90	任意中点	56067.94	-44649.73	-638.996	177.403	

※北Pは遺構検出北端に近い任意中点
南Pは遺構検出南端に近い任意中点

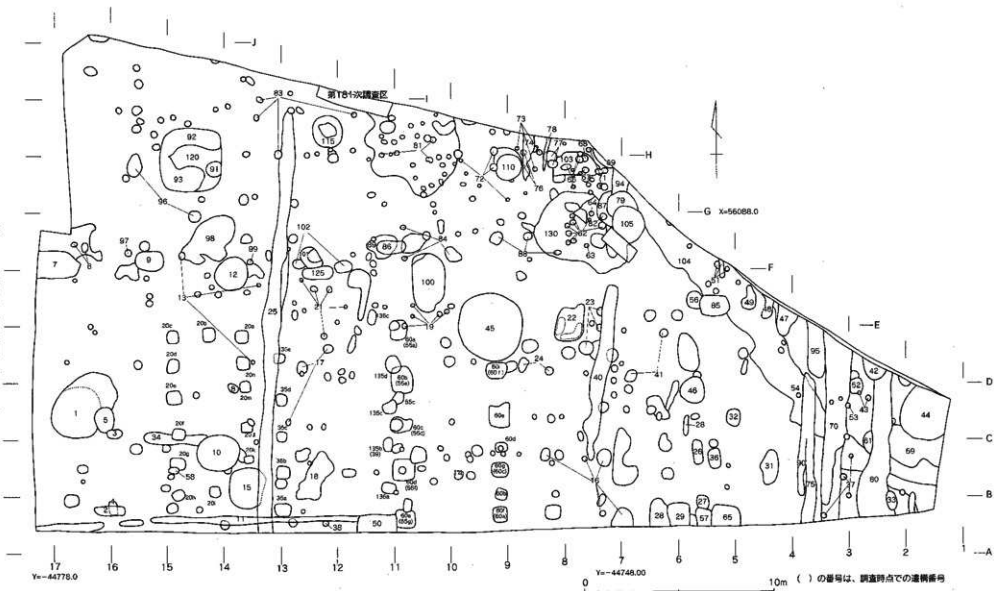
X方向の-値は政庁から南へ移動したことを示す
Y方向の値は中軸線から東へ移動したことを示す

政庁中軸線方位
N-0° 34' 24" -E

南門中点座標 X=56708.68
Y=-44820.73

Fig.42 第199次調査略測図 (1/200)

-73-



Tab.2 大宰府条坊跡199次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	時期	地区
1	199SE001	井戸 暗灰色土、北東側が黒灰色土 SE001→SK005	平安中期	C16
2		土坑 暗灰色土、16ラインを境に西が暗灰色土、東が黄灰色土		A16
3		土坑 黄灰色砂土、下層の灰白色砂は遺物なし		C15
4		土坑 灰色砂土(黄色ブロックまじり)、S-4→S-2		A15
5		土坑 暗灰色砂土(砂利まじり)、S-1→S-5	平安時代	C16
6		ピット群 暗灰色土		F16
7	199SK007	土坑 灰褐色土、さらさらした細かい塩土	8世紀末	F17
8		ピット 暗灰色土		C13
9	199SK009	土坑 黒灰色土、底面は白砂に黒色斑	XIV期	F15
10	199SE010	井戸 黒灰色土	XIV期	B14
11		溝 田圃の溝		A11~17
12		土坑 明灰土、西側が灰褐色砂質土	平安時代	F14
13		ピット群		E13
14		ピット		B9
15	199SE015	井戸 黒灰色土 S-15→S-25	XIV期	B13
16		ピット群		B7
17		ピット群		D12
18		土坑 灰褐色土		B12
19		ピット群		E10
20	199SB020	掘立柱建物	奈良時代	B13.14~D13.14
21		ピット群		E12
22		土坑 黒灰色土、その下のピットは黄灰色土		E8
23		ピット群 S-23→S-40		E7
24		ピット群 暗灰色土		D8
25	199SD025	溝 黒色系の土の下に砂層があるが、柔らかい。	13世紀以降(14c?)	I3ライン
26		土坑 暗灰色土	奈良時代?	B5
27		ピット 暗灰色土		A5
28		土坑 暗灰色土		A6
29	199SE029	井戸? 暗灰色土	X期頃	A6
30		欠番		
31	199SK031	土坑 暗灰色土	平安時代前期	B4
32		土坑		C5
33		土坑		A2
34		溝 灰黄色土 S-34→S-10	8世紀	C15
35	199SA035	欄列	奈良時代?	Bライン
36		土坑	古代	B5
37		ピット群		B2
38		ピット群		A11
39		ピット		B11
40	199SD040	溝 黒灰色土	XII期	7ライン
41		ピット群		D6
42		土坑	平安時代	D2
43		ピット群		C2
44		土坑 塩土が非常に柔らかい		C1
45	199SE045	井戸 黒茶色土	8世紀後半	E9
46	199SK046	土坑	10世紀代	C5
47	199SK047	土坑	平安時代	E4
48		土坑	平安時代前半	E4
49		土坑		E4
50	199SE050	井戸 暗灰色土	IX期	A11
51		ピット群		E5
52		土坑		C2
53		ピット		C3
54		ピット		C3
55	199SB060	掘立柱建物	奈良時代?	11ライン

56		土坑		平安時代中頃	E5
57		土坑			A5
58		土坑		奈良時代か?	B15
59	199SK059	土坑	S-59→S-80	平安時代中期	C2
60	199SB060	掘立柱建物		奈良時代?	9ライン
61		土坑	S-59の延長か?	平安時代	C2
62		ピット群			F7
63	199SX063	ピット			F7
64		ピット			F7
65	199SK065	井戸?		VII~VIII期(主にVII)	A5
66		ピット群			G7
67		ピット			G7
68		ピット			G7
69		土坑			G7
70	199SD070	溝(坊路側溝)	西側の溝の混入がある可能性あり	VI・VII期	3ライン
71		ピット群			G7
72		ピット群			G9
73		ピット群			H8
74		溝			H8
75	199SD075	溝(坊路側溝)	S-90と遺物混じっている SD090→SD075	平安時代	C3
76		ピット群	S-74→S-76		G8
77		ピット群			G8
78		溝			H8
79	199SE079	井戸	灰褐色砂質土 S-87→S-79→S-105	XII~XIII期	G7
80	199SD080	溝(坊路側溝)	S-59→S-80	X期	2ライン
81		ピット群			H10
82		ピット			F7
83		ピット群		XIV期前後	H13
84		ピット群			F10
85	199SK085	土坑		IX期頃?	E5
86		土坑	炭混じり	平安時代	F11
87			S-79の一部。ウラゴメもしくは埋土		G7
88		ピット群			F8
89		土坑	黄灰色土	奈良時代か?	F11
90	199SD090	溝(坊路側溝)		平安中頃(X期?)	3ライン
91		土坑	S-120の最上層	平安時代	G14
92		土坑	S-120の最上層	平安時代中期	H14
93		土坑	S-120の最上層	平安時代	G14
94		溝		XIV期頃	G7
95	199SD095	溝(坊路側溝)		平安時代?	D3
96		ピット群			G15
97		ピット			F15
98		土坑		平安時代前期	F14
99		ピット			F13
100	199SK100	土坑		X期	E10
101		土坑		8世紀末頃	F12
102		ピット群			F12
103		土坑			G7
104	199SX104	流路		奈良時代	B1~G6
105	199SE105	井戸		XIX期	F6
110	199SE110	井戸		XII期	G9
115	199SE115	井戸		XII期	H12
120	199SK120	土坑		XII期	G14
125	199SK125	土坑	暗灰色土	8世紀末	E12
130	199SE130	井戸	埋土中にS-79の混入品ある可能性あり。	VII~VIII期	F7
135	199SA135	横列		鎌倉時代以降?	11ライン

Tab.3 第199次調査 出土遺物一覧表

S-1黒タツ土

須恵 器	杯c、壺3、甕a3、高杯、大壺b
土 師 器	杯c、壺c、甕c、円斗
黒色土器A	杯c
黒色土器B	杯c
越州焼土青磁	甕；1 (1)
緑 釉 陶 器	磁片 (1)
白 磁	磁片 (1)
輸入須恵器	朝鮮系須恵陶器片
石 製 品	埴石製石鏡
瓦	平瓦 (筒、椀子、無文)

S-1黒色土

須恵 器	壺3、甕、壺
土 師 器	杯1、甕2、杯c、杯、丸底杯、壺a
黒色土器A	杯c
中 国 陶 器	磁片 (1)
瓦	平瓦 (無文)、平瓦 (無文)

S-1砂内

須恵 器	壺
土 師 器	杯c、壺
黒色土器A	杯c
越州焼土青磁	甕；1 (2)
瓦	平瓦 (無文)

S-1暗灰色土

須恵 器	壺3、甕、鉢b、高杯
土 師 器	小皿a (イト)、杯c、壺、丸底杯
黒色土器A	杯c
黒色土器B	磁片
越州焼土青磁	甕；1 (1)
緑 釉 陶 器	磁片 (1)
白 磁	磁片 (1)、磁片 (1)
瓦	平瓦 (椀子、瓦 (無文)、磁片 (調目))
石 製 品	埴石製石鏡
金 属 製 品	鉄滓
土 製 品	埴土塊

S-1暗灰色土

須恵 器	壺、杯c、甕、甕蓋、甕、壺、大壺b
土 師 器	杯c、杯c (ヘタ)、小皿a、壺3、杯c、甕2、高杯、壺、壺a、壺b
黒色土器A	杯c、磁片
黒色土器B	杯c、磁片
越州焼土青磁	甕；1 (4)、口 (1)
緑 釉 陶 器	磁片 (2)
灰 釉 陶 器	甕 (1)、甕 (1)、磁片 (1)
白 磁	甕；1-4 (1)
瓦	平瓦 (筒、椀子、無文)、丸瓦 (無文)
石 製 品	埴石、埴石製石鏡片、埴石製石鏡
金 属 製 品	鉄滓
そ の 他	鉄

S-1灰色土

須恵 器	壺3、甕？、甕、鉢b、大壺b、壺、磁片
土 師 器	杯c、小皿a、杯c、丸底杯c、杯c
黒色土器A	小皿a、杯c
緑 釉 陶 器	磁片 (1)
瓦	平瓦 (筒、椀子、平瓦 (無文))

S-1灰褐色土

須恵 器	壺3
土 師 器	小皿a、甕 (カクセン石入)、壺
黒色土器A	杯c、甕
黒色土器B	磁片
瓦	平瓦 (平行切込)、平瓦 (筒)

S-2

須恵 器	杯c、壺
土 師 器	小皿a、三脚付壺、壺、壺b
黒色土器A	磁片
瓦	平瓦 (椀子)

S-3

須恵 器	杯c、壺3、甕×壺
土 師 器	杯c、壺

S-4

土 師 器	杯c
-------	----

S-5

須恵 器	杯c、杯c、壺
土 師 器	杯c×杯c、杯c、壺
瓦	平瓦 (筒)
石 製 品	丸石

S-6

須恵 器	杯c、杯c
土 師 器	杯c、壺

S-7

須恵 器	杯c、杯c、壺c、壺3、甕、壺a、壺b
土 師 器	杯c、杯c、杯c、杯c×壺a、壺 (カクセン石入)
緑 釉 陶 器	磁片 (1)
瓦	平瓦 (筒)
そ の 他	埴土塊

S-8

土 師 器	杯c
-------	----

S-9

須恵 器	壺3、壺
土 師 器	杯c、杯c、杯c、壺
瓦	筒瓦、甕
越州焼土青磁	甕；1 (1)、口 (1)
白 磁	甕；1 (1)、V-4×VIII-3 (1)
瓦	平瓦 (筒、無文)

S-10黒灰色砂

須恵 器	杯c、壺3、壺
土 師 器	杯c、小皿a、小皿a (イト)、甕、壺
黒色土器B	磁片
瓦	筒瓦、甕
白 磁	甕；II-1 (2)、IV-VIII (3)
中 国 陶 器	磁片b (1)
土 製 品	出瓦瓦
瓦	平瓦 (椀子)

S-10黒灰色土

須恵 器	杯c、壺3、壺c、壺
土 師 器	小皿a、小皿a、小皿a (イト) 杯c (イト)、杯c、丸底杯c、壺a
黒色土器B	磁片
瓦	筒瓦、甕
越州焼土青磁	甕；1 (2)
緑 釉 陶 器	磁片 (1)

S-10黒灰色土

須恵 器	杯c (イト)、IV (4)、IV-VIII (11)、IVa (1)、V-2b (1)、V-4×VIII-2 (5)、VIII-2 (1)、Vb-2b×III-2 (1)
土 師 器	杯c (イト) (1)
中 国 陶 器	磁片 (1)
土 製 品	出瓦瓦
瓦	平瓦 (無文)

S-10灰色土

須恵 器	壺3、壺c
土 師 器	杯c (イト)、杯c (ヘタ)、小皿a (イト)、小皿a、杯c、丸底杯c (ヘタ)、壺a、壺
黒色土器A	杯c、杯c
越州焼土青磁	甕磁片 (1)
白 磁	甕；II-1 (1)、IV (2)、IV-VIII (4)、V-1a (1)、V-4×VIII-2 (1)、VIII-2 (1)
石 製 品	埴石製石鏡
瓦	平瓦 (無文)

S-10赤褐色土

須恵 器	甕蓋
土 師 器	杯c
石 製 品	埴石製石鏡

S-10ウラボ

土 師 器	磁片
石 製 品	埴石製石鏡

S-10黒褐色土

須恵 器	杯c、壺a、壺
土 師 器	杯c (イト)、小皿a (ヘタ)、小皿a、壺
黒色土器A	杯c
瓦	小皿a (イト)
緑 釉 陶 器	磁片 (1)
白 磁	甕；IV (1)、Vb-1b (1)、IV-VIII (10)、V-1×VIII-2 (3)
輸入須恵器	朝鮮系須恵陶器
瓦	平瓦 (筒、椀子、無文)
そ の 他	埴土塊

S-10神内

須 意 切	坏c、裏
土 師 割	坏a(イト)、破片
瓦	割
白	磁 割; IV (1)、IV-1a (1)、VIII-2 (1)
中 国 陶 器	灰白陶 (1)
瓦	割 平瓦 (編)

S-12

須 意 切	坏c、裏3、裏
土 師 割	坏c、坏2?、坏、裏
瓦	割
白	磁 割; IV-VIII (1)、IV (1)
瓦	割 平瓦 (椅子)

S-13

須 意 切	坏
土 師 割	坏c、裏

S-14

須 意 切	破片
土 師 割	坏c、破片

S-15緑灰色土

須 意 切	裏
土 師 割	小皿a、小皿2、小皿a(イト)、坏、丸底坏、坏×柄c
黒色土器人破片	柄c
瓦	割、柄
白	磁 割; II (1)、IV (2)、IV-VIII (6)、V-1×VIII-2 (1) 皿; III-2 (1)、V×VI (1)
中 国 陶 器	磁石 (1)
輸入品	朝鮮系灰釉陶器
土 師 割	灰土器
瓦	割 丸瓦 (椅子)、平瓦 (椅子)

S-15黒色土

須 意 切	坏c、裏c、裏3、皿a、裏、裏、破片
土 師 割	小皿a、小皿a(イト)、小皿2、坏、坏a(イト)、裏c 丸底坏、裏
瓦	割、破片
植物性炭素組織	柄; I (1)、II (1)、裏; I (3)
埋藏品	柄; II (2)、III-1 (1)、III-3×4 (1)、IV (1)、IV×b (1)、 IV-VIII (2)、V-1×VIII-2 (2)、V-3 (2)、V (2)、 V-4×VIII-3 (1)、輪瓦 (1)
白	磁 皿; II-1×III-2 (1)、V-VIII (1)、III-1×2 (2)、VIII-1 (1) 磁磁片 (1)
骨 白 磁	皿; 破片 (1)
中 国 陶 器	割; I-1 (1)、I-b (3)、裏破片 (3)
石 製 品	埴石類品
瓦	割 丸瓦 (編、椅子)、平瓦 (椅子、無文)

S-15黒色粘質土

須 意 切	裏片、裏
土 師 割	小皿a、小皿2、坏片、柄c、裏
瓦	割、柄c、柄
石 製 品	埴石類片
瓦	割 平瓦 (椅子)

S-15黒色粘質土

須 意 切	裏片、裏2×坏a、坏c、破片、裏3
土 師 割	小皿a、坏a、坏a(イト)、坏、埴、丸底坏a、柄c、裏片 柄a、裏(カクセン石入)
黒色土器人破片	破片
黒色土器片	破片
瓦	割、柄c
白	磁 割; IV (3)、V (1)、IV-VIII (6)、V-VIII (1)、VIII(1)
中 国 陶 器	磁石 (1)
埋 藏 品	磁片? (2)
石 製 品	埴石類片
瓦	割 平瓦 (編、椅子、無文)

S-16

須 意 切	坏c、裏3、裏
土 師 割	坏c、裏
白	磁 割; IV-VIII (1)
石 製 品	埴石類片

S-17

土 師 割	坏c、破片
黒色土器片	小皿
埋 藏 品	磁片

S-19

土 師 割	坏c、破片
瓦	割 平瓦 (椅子、丸瓦 (3編))

S-18

須 意 切	裏、破片
土 師 割	坏c、柄c、裏
黒色土器人破片	破片
植物性炭素組織	I-2b (1)
白	磁 割; II (1)、IV (1)、V-1×VIII-2 (1)
輸入品	陶磁器破片 (1)
瓦	割 平瓦 (無文)

S-20f

須 意 切	裏
-------	---

S-21

須 意 切	裏
土 師 割	坏
瓦	割、柄c?
植物性炭素組織	柄 (1)

S-22

須 意 切	坏c、裏c、裏
土 師 割	坏4、裏
白	磁 割; IV-VIII (2)

S-23

須 意 切	坏c、柄c、裏3
土 師 割	裏
瓦	割、破片

S-24

須 意 切	裏
土 師 割	坏c、裏 (カクセン石入)

S-25

須 意 切	坏c、裏c、裏3、柄b、裏a、破片
土 師 割	坏4、坏c、丸底坏、小皿a、裏
土師割土器	埴片
植物性炭素組織	柄; I (1)、II (1)
埋藏品	柄; I (1)
植物性炭素組織	柄; I (1)
瓦	割 埴石類片 (1)
白	磁 割; IV (3)、IV-VIII (3)、V-1×VIII-2 (3)、V-2b (1)
石 製 品	埴石類片
瓦	割 平瓦 (編、椅子、無文)、破片 (椅子)

S-25黒灰色土

須 意 切	裏3、坏
土 師 割	小皿、坏c、裏、裏?
黒色土器人破片	破片
白	磁 割; IV-VIII (1)
瓦	割 丸瓦 (椅子)、破片

S-25緑灰色土

須 意 切	坏c、裏3、裏
土 師 割	小皿、坏a、坏c (圓形)、裏
黒色土器人破片	破片
植物性炭素組織	柄; I (1)
瓦	割 破片

S-26

須 意 切	裏3、裏
土 師 割	坏
白	磁 割; V (1)
骨 白 磁	破片 (1)
瓦	割 平瓦 (編)、丸瓦 (編)

S-27

須 意 切	破片
土 師 割	裏

S-28

須 意 切	裏
土 師 割	埴石台片、坏
植物性炭素組織	柄; I-2 (1)
瓦	割 破片 (無文)

S-29

須 意 切	裏、破片、裏、破片
土 師 割	小皿a、坏a、柄c、丸底、裏a
黒色土器人破片	破片
黒色土器片	破片
瓦	割、柄c
瓦	割 平瓦 (椅子、無文)

S-29明灰色土

須 意 切	坏c、裏
土 師 割	坏c、坏c、丸底a、裏
瓦	割 平瓦 (椅子、無文)

5-20 灰灰色土

頂 部	硬	砂	砂c、砂片、礫3、砂層高砂、泥c、泥
土 層	硬	砂	砂c、小礫c、砂c、砂片、砂c、泥c、泥c、泥c、泥片
粒 径	測定	なし	0.2 (1)
粒 状 物	砂	砂片	砂片、砂片、泥c、泥c (砂片)
石 質	砂	砂	砂
土 質	硬	砂	砂

5-20 灰灰色土

頂 部	硬	砂	砂c、小礫c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、小礫c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
黒色土層	砂	砂	砂
黒色土層	砂	砂	砂
粒 径	測定	なし	なし (1)
粒 状 物	砂	砂片	砂片 (2)
石 質	砂	砂片	砂片、砂片、砂片、砂片 (砂片、砂片、砂片)
石 質	砂	砂	砂
土 質	硬	砂	砂
土 質	硬	砂	砂

5-31

頂 部	硬	砂	砂c、泥c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c
黒色土層	砂	砂	砂
粒 径	測定	なし	なし (1)
粒 状 物	砂	砂片	砂片 (1)
石 質	砂	砂	砂
土 質	硬	砂	砂
土 質	硬	砂	砂

5-32

土 層	硬	砂	砂
-----	---	---	---

5-33

頂 部	硬	砂	砂c、砂片、砂c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂片、砂c、泥c、泥c
黒色土層	砂	砂	砂
粒 径	測定	なし	なし (無文)、砂片 (無)

5-34

頂 部	硬	砂	砂c、砂c、砂c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、泥c、泥c
石 質	砂	砂	砂

5-35a

頂 部	硬	砂	砂片
土 層	硬	砂	砂

5-35b

頂 部	硬	砂	砂c、砂片
土 層	硬	砂	砂c、砂片、砂片

5-35c

土 層	硬	砂	砂
石 質	砂	砂	砂

5-35d

頂 部	硬	砂	砂片
土 層	硬	砂	砂片

5-36

頂 部	硬	砂	砂c、砂c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c
粒 径	測定	なし	なし (無)

5-37

頂 部	硬	砂	砂c、砂c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c

5-38

頂 部	硬	砂	砂c
土 層	硬	砂	砂c、砂c

5-39

石 質	砂	砂	砂
-----	---	---	---

5-40

頂 部	硬	砂	砂c、泥c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、小礫c、砂c、砂片、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
黒色土層	砂	砂	砂
黒色土層	砂	砂	砂
粒 径	測定	なし	なし (1)、IV~VIII (1)
粒 状 物	砂	砂片	砂片
石 質	砂	砂	砂
土 質	硬	砂	砂

5-41

頂 部	硬	砂	砂
土 層	硬	砂	砂

5-42

頂 部	硬	砂	砂c、砂c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、泥c、泥c (砂c、砂c)
黒色土層	砂	砂	砂
粒 径	測定	なし	なし (無)

5-43

頂 部	硬	砂	砂片
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c

5-44

頂 部	硬	砂	砂c (へつり「砂」学あり)、泥c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
黒色土層	砂	砂	砂
黒色土層	砂	砂	砂
肥前系陶磁器	砂片	泥c、泥c	
白	泥	泥	泥
石	泥	泥	泥
土 質	硬	砂	砂
土 質	硬	砂	砂

5-45

土 層	硬	砂	砂c、砂c
-----	---	---	-------

5-45 砂内

頂 部	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c、泥c、泥c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
土 質	硬	砂	砂
土 質	硬	砂	砂

5-45 灰灰色土

頂 部	硬	砂	砂c、泥c、泥c、泥c、砂c、砂c、砂c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、砂c、砂c、砂c
粒 径	測定	なし	なし (無)

5-45 青灰色土

頂 部	硬	砂	砂c、砂c、泥c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
黒色土層	砂	砂	砂
粒 径	測定	なし	なし (無文)

5-45 灰灰色土

頂 部	硬	砂	砂c、砂c、高砂、高砂
土 層	硬	砂	砂c、砂c、高砂

5-45 灰白色土

頂 部	硬	砂	砂c、砂c、砂c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、砂c
土 質	硬	砂	砂
土 質	硬	砂	砂

5-45 暗灰色土

頂 部	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
粒 径	測定	なし	なし (無)

5-45 暗灰色土

頂 部	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
粒 径	測定	なし	なし (無文)

5-45 暗灰色土

頂 部	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
土 質	硬	砂	砂
土 質	硬	砂	砂

5-45

頂 部	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
黒色土層	砂	砂	砂
粒 径	測定	なし	なし (無)
粒 状 物	砂	砂片	砂片 (1)、砂片 (1)
粒 状 物	砂	砂片	砂片 (1)
石 質	砂	砂	砂
土 質	硬	砂	砂

5-47

頂 部	硬	砂	砂c、泥c、泥c、泥c
土 層	硬	砂	砂c、砂c、砂c、砂c、泥c、泥c、泥c、泥c
土 質	硬	砂	砂
土 質	硬	砂	砂

5-48
煤 层 碎环、煤
土 层 碎环a、环、煤
碎 粒 陶 器 碎片 (1)
瓦 制 碎片 (散文)

5-49
土 层 碎 小皿a、环、环a、煤a
输入层煤 碎碎系陶器碎片
石 制 品 碑石和石球
瓦 制 平瓦 (格子、散文)

5-50黑灰色土
煤 层 碎环c、环a、环3、煤、煤
土 层 碎环a、小皿a2、环c
黑色土器人形
黑色土器片
瓦 制 环a? (イト)
横州造系青磁 残:1-2b (1)
瓦 制 瓦瓦 (格子、散文、玉钵)、平瓦 (散文、格子)
石 制 品 石笔1、砚石

5-50暗灰色土
煤 层 碎环、环3、环c、高环、豆、煤
土 层 碎环a、环1、煤
黑色土器人形a1及碎片
瓦 制 平瓦 (格子、线)、碎平瓦 (老明瓦)、瓦瓦 (二重格子)
石 制 品 黑曜石片

5-51
煤 层 碎环
土 层 碎环、煤
黑色土器人形c

5-52
煤 层 碎环、煤
土 层 碎环、环a、煤
瓦 制 平瓦 (线)

5-53
土 层 碎环、煤a

5-54
土 层 碎环a

5-55a
土 层 碎环
黑色土器人形
石 制 品 黑曜石碎片

5-55b
石 制 品 瓦石

5-55c
煤 层 碎环
土 层 碎环、环
瓦 制 碎片

5-56
煤 层 碎环a、环c、环3、煤
土 层 碎环a、环c、煤a
黑色土器人形c、线
横州造系青磁 残:1 (1)、1-2 (1)
碎 粒 陶 器 碎片 (1)
灰 胎 陶 器 碎片 (1)
瓦 制 瓦瓦 (线)、平瓦 (线、格子、文字)

5-57
煤 层 碎环a、环3、煤
土 层 碎环c、煤
瓦 制 平瓦 (线)

5-58
煤 层 碎环、环3
土 层 碎环a、环

5-59黑灰色土
煤 层 碎环a、环c、环c、大环c×煤、环3、环b、煤、煤
土 层 碎环a、环c、环c、环3、煤
碎 粒 土 器 碎片
黑色土器人形c、线
黑色土器片
碎 粒 陶 器 碎片 (1)、皿c? (2)
土 制 品 灰土块
石 制 品 砚石
瓦 制 平瓦 (线、散文)、瓦瓦 (格子、散文)

5-59暗灰色土
煤 层 碎环c、环3、煤、煤、碎片
土 层 碎环a、环c、环c、小皿a×环a、煤a
碎 粒 土 器 碎片
黑色土器人形片
碎 粒 陶 器 碎片 (1)
瓦 制 平瓦 (散文)

5-60a
土 层 碎环、煤

5-60c
土 层 碎环

5-60d
煤 层 碎煤
土 层 碎环、煤

5-60f
土 层 碎煤a

5-61
煤 层 碎环、煤
土 层 碎环a、煤
黑色土器人形c
黑色土器片
横州造系青磁 本残? (1)
白 磁 残:IV-VIII (1)
瓦 制 平瓦 (线)

5-62
煤 层 碎环c、环3、煤c、煤
土 层 碎环a、煤a
瓦 制 碎片

5-63
煤 层 碎环、煤
土 层 碎环a、环c、煤a
黑色土器人形c
灰 胎 陶 器 残 (1)
瓦 制 碎片 (格子)

5-64
煤 层 碎环a、环、碎片
土 层 碎环c、煤
黑色土器人形c

5-65
煤 层 碎环c、把子、环a、环3、煤、煤
土 层 碎环a、环c、环c、煤a、煤、煤 (カクセツ石舍)、把子
黑色土器人形c
横州造系青磁 残:1 (2)、1-5 (1)、日 (1)
横州造系青磁 残:11b (1)
碎 粒 陶 器 残 (1)、皿c (1)
石 制 品 平瓦石
金 属 品 铁线
瓦 制 平瓦 (散文、线、格子)

5-65暗灰色土
煤 层 碎环c、环3、煤
土 层 碎环a、环c、环c、煤a
黑色土器人形
瓦 制 平瓦 (线、格子)

5-66
煤 层 碎环3、煤
土 层 碎环a、环c、煤

5-67
煤 层 碎煤
土 层 碎环a、环c、煤
碎 粒 陶 器 碎片 (1)
白 磁 残:日 (1)

5-68
煤 层 碎环
土 层 碎环a、高环
瓦 制 碎片

5-69
煤 层 碎环、煤
土 层 碎环a、环c、煤、煤a
黑色土器人形
横州造系青磁 残:1 (1)

5-70 灰褐色土

根 茎 部	环、大环c、重c3、重3、茎
土 部	腐葉
瓦	類 平瓦 (編)

5-70 暗灰色土

根 茎 部	环、环a、环c、重c、重1、重3、高环、茎、茎
土 部	腐葉、高环、茎
黑色土部	腐葉土部、腐葉
綠 輪 陶 器	磁片 (1)
瓦	類 平瓦 (編文)、瓦瓦 (編)

5-70 灰色土

根 茎 部	环c、环a、大环c、重c、重3、高环、色、株、茎
土 部	腐葉、重、重 (カクセン石人)、莖、破片 (カクセン石人)
黑色土部	腐葉土部、破片
土 部	山コマツ
瓦	類 平瓦 (編、格子)、瓦瓦 (編文)、破片 (編、編文)

5-71

根 茎 部	环c、茎
土 部	腐葉、小重a、环a、大底环?

5-72

根 茎 部	腐葉
土 部	腐葉、环c
黑色土部	腐葉

5-73

根 茎 部	腐葉
土 部	腐葉、高环×腐葉
黑色土部	A破片

5-74

根 茎 部	腐葉
土 部	腐葉
綠 輪 陶 器	磁片 (1)
磁器及陶磁器	磁片
石 製 品	石鏡
瓦	類 磁片

5-75

根 茎 部	腐葉3、茎
土 部	腐葉a、环c、高环、茎
黑色土部	A部
黑色土部	腐葉
綠 輪 陶 器	磁片 (2)、破片 (1)
石 製 品	石鏡
瓦	類 平瓦 (編文)

5-76

上 部	腐葉
瓦	類 磁片 (編文)

5-77

根 茎 部	环a、重3、茎
土 部	腐葉、环片、茎
黑色土部	腐葉
瓦	類 平瓦 (編文)、破片

5-78

土 部	腐葉、茎
-----	------

5-79

根 茎 部	环c、环c、重c、重、高环、茎
土 部	腐葉×小重a、小重a (ヘタ)、小重 (イト)、环a、环c、腐葉底环、茎
黑色土部	A部
黑色土部	腐葉
瓦	類 磁片
綠 輪 陶 器	磁片 (3)
白 磁 器	類: I-1 (1)、II-4 (1)、IV (3)、V-1 (1)、V欄目 (1)、白磁織 (1)、V-4×VIII-2 (2)、V-4×VIII-3 (1)、IV~VIII(4)
越州燒系青磁	類: II (2)、II-Bp (1)
中國 陶 器	青磁皿×IV (1)
輸入 復原 器	朝鮮系無輪陶器
石 製 品	石鏡、石碇
金 屬 製 品	銅釘、銀針
瓦	類 平瓦 (格子)

5-79 綠内

根 茎 部	重3、茎?
土 部	腐葉、环a、环c
黑色土部	A破片
黑色土部	腐葉
白 磁 器	類: IV-1b (1)
瓦	類 平瓦 (格子)

5-79 新灰色砂

根 茎 部	环c、环c、重c、茎
土 部	腐葉、环c、腐葉
瓦	類 磁片
越州燒系青磁	類: I (3)
瓦	類 平瓦 (編、格子)

5-79 黒灰色土

根 茎 部	环c、茎
土 部	腐葉、大底环、大底环c、把手
黑色土部	腐葉、腐葉
瓦	類 磁片
綠 輪 陶 器	磁片 (1)
白 磁 器	類: II (2)、II-4 (1)、IV (1)、IV~VIII (3)、V-1×VIII-2 (1)
瓦	類 平瓦 (格子)、瓦瓦 (編文)

5-79 暗灰色土

根 茎 部	环c、重3、茎
土 部	腐葉、小重、环a、环c、大底环、莖、腐葉碎?
黑色土部	A部
黑色土部	腐葉、腐葉
白 磁 器	類: IV (2)、V (1)、IV~VIII (2)
越州燒系青磁	類: V (1)
輸入 復原 器	朝鮮系無輪陶器
石 製 品	石鏡
瓦	類 瓦瓦 (編文)、平瓦 (編、格子)

5-80 灰褐色土

根 茎 部	重3、茎
土 部	腐葉c、重、环a
黑色土部	A部
黑色土部	腐葉
瓦	類 平瓦 (編、編文)、瓦瓦 (編)

5-80 暗灰色土

根 茎 部	环c、重3、重c、重a、茎3、茎
土 部	腐葉、高环、高环c、腐葉
黑色土部	腐葉、腐葉
黑色土部	腐葉
越州燒系青磁	類: I (4)、II (1)、重: II (1)
土 部	山
石 製 品	滑石石鏡
瓦	類 平瓦 (編、格子、編文)、破片 (格子)

5-80 黒灰色土

根 茎 部	环c、重a、高环、重c、重、平底×高环、株、茎
土 部	腐葉、环a×小重a、重c、重 (カクセン石人)、莖、重b
黑色土部	A部
黑色土部	腐葉、腐葉
越州燒系青磁	類: I (2)、I-5 (1)、II (1)
越前燒系青磁	類: 未定 (1)
綠 輪 陶 器	類: (1)、破片 (1)
土 部	山、鐵釘口
石 製 品	石碇、石碇
金 屬 製 品	銅釘
瓦	類 平瓦 (編、格子、編文)、瓦瓦 (編文、瓦碇、格子)

5-81

根 茎 部	腐葉
土 部	腐葉
黑色土部	A破片

5-82

根 茎 部	腐葉
土 部	腐葉、环a、环
黑色土部	A部
黑色土部	腐葉
瓦	類 瓦瓦 (編文)、平瓦 (編)

5-83

土 部	腐葉、小重a、小重a (イト)、重a
白 磁 器	類: IV~VIII (3)

5-84

根 茎 部	腐葉
土 部	腐葉、环a、环、茎

5-81
煤 灰 粉 ^a 灰c、灰c、灰3、高环、渣、基
土 灰 粉 ^a 灰c、灰c、高环、渣、把手、基、基a
黑色土器A 粉
黑色土器B 粉
赣州唐系青磁 ^a 碗: I (4)、I-b (1)、I-2b (1)、II (2)
越 越 陶 器 碗 ^a (1)
白 磁 碗 ^a (1)
瓦 碗 ^a 碗 ^a (碗、钵子、碗文)、瓦瓦、瓦瓦 (钵子、碗文)
石 器 品 滑石、石锅
金 属 品 铁钉

5-86
煤 灰 粉 ^a 灰
土 灰 粉 ^a 灰a、高环、基

5-87
煤 灰 粉 ^a 灰
土 灰 粉 ^a 小品a、灰a、粉a、灰环、基
黑色土器A 粉、粉
黑色土器B 碗片
赣州唐系青磁 ^a 碗: I (1)
越 越 陶 器 碗片 (1)
瓦 碗 ^a 碗 ^a (碗、碗片、碗文)

5-88
煤 灰 粉 ^a 灰
土 灰 粉 ^a 小品a、灰a
黑色土器B 碗片

5-89
煤 灰 粉 ^a 碗片
土 灰 粉 ^a 灰a

5-90
煤 灰 粉 ^a 灰a、灰、碗片
土 灰 粉 ^a 灰a、粉a
白 磁 品 碗 ^a
瓦 碗 ^a 碗 ^a (碗、钵子)

5-90上海
煤 灰 粉 ^a 灰c、灰、基
土 灰 粉 ^a 灰a、粉a、基、基a
黑色土器A 粉、粉、粉
赣州唐系青磁 ^a 碗: I (2)、II (1)
瓦 碗 ^a 碗 ^a (碗)

5-90下组
煤 灰 粉 ^a 灰c、基a、基
土 灰 粉 ^a 灰a、粉a、基a
黑色土器A 碗片
赣州唐系青磁 ^a 碗: I-3 (1)
越 越 陶 器 碗片 (1)
瓦 碗 ^a 碗 ^a (钵子)、碗片 (碗)

5-91
土 器 碗 ^a 灰a、灰、粉a、钵a?、把手、基
黑色土器B 碗片
瓦 碗 ^a 瓦瓦 (碗文)

5-92
煤 灰 粉 ^a 灰c、基3
土 灰 粉 ^a 灰a、粉a、基a
黑色土器B 粉
越 越 陶 器 碗片 (2)
越 越 陶 器 碗片 (1)
白 磁 碗: B-1 (1)、V-1×VIII-2 (1)、XIII (1)
瓦 碗 ^a 碗 ^a (钵子)

5-93
煤 灰 粉 ^a 灰a、基
土 灰 粉 ^a 粉a、基
黑色土器B 碗片
赣州唐系青磁 ^a 碗: I (1)

5-94
煤 灰 粉 ^a 灰a、灰、渣、基a、基
土 灰 粉 ^a 小品a、粉a
黑色土器A 粉
瓦 碗 ^a 粉a
赣州唐系青磁 ^a 碗: I? (2)
瓦 碗 ^a 碗 ^a (钵子)
土 灰 品 滑石罐
石 灰 品 滑石瓶

5-96
煤 灰 粉 ^a 灰c
土 灰 粉 ^a 碗片

5-97
瓦 碗 ^a 碗 ^a 碗 ^a

5-98
煤 灰 粉 ^a 灰c、灰c、基3、灰、基
土 灰 粉 ^a 灰a、基a、基3、高环、基

5-99
煤 灰 粉 ^a 灰
土 灰 粉 ^a 碗片

5-100
煤 灰 粉 ^a 灰c、基、基
土 灰 粉 ^a 灰a、灰a、基
白 磁 碗: II (1)
瓦 碗 ^a 碗 ^a (钵子)

5-100上海
煤 灰 粉 ^a 灰a、灰c、基
土 灰 粉 ^a 灰a、粉a、高环、基、基b
黑色土器A 粉
黑色土器B 粉
瓦 碗 ^a 碗 ^a
赣州唐系青磁 ^a 碗: I (1)、I-2 (1)、II-2 (1)
石 器 品 滑石瓶
瓦 碗 ^a 瓦瓦 (瓦罐、钵子)、平瓦 (钵子)、平瓦 (碗)

5-100中组
煤 灰 粉 ^a 灰c、灰c、基
土 灰 粉 ^a 灰a、粉a、基?、基a
黑色土器A 粉
黑色土器B 粉
赣州唐系青磁 ^a 碗: I (2)、II (2)
越 越 陶 器 碗片 (2)
石 器 品 瓦石
瓦 碗 ^a 瓦瓦 (钵子、玉碗)、平瓦 (钵子、碗、碗文)

5-100下组
煤 灰 粉 ^a 灰a、基
土 灰 粉 ^a 灰a、灰a
黑色土器A 粉
越 越 陶 器 碗片 (1)
瓦 碗 ^a 碗 ^a 碗 ^a

5-101
煤 灰 粉 ^a 灰c、基3、基
土 灰 粉 ^a 灰c、灰a、基a
瓦 碗 ^a 碗 ^a (碗文)

5-102
煤 灰 粉 ^a 灰a、基3、高环、基
土 灰 粉 ^a 灰a、基

5-103
煤 灰 粉 ^a 灰c、基a、基3、高环、基、基?
土 灰 粉 ^a 灰c、灰c、基3、基、基a

5-104
煤 灰 粉 ^a 灰a、灰c、基、基
土 灰 粉 ^a 基
黑色土器A 粉
越 越 土 器 基
石 器 品 越磁碗片
瓦 碗 ^a 碗 ^a (碗)

5-105灰色砂
煤 灰 粉 ^a 碗片
土 灰 粉 ^a 灰a、灰a、灰a、基
甌窑唐系青磁 ^a 碗: II-b (1)
白 磁 碗: IV (1)、IX (1)、IX-1 (1)、IX-2a (1)、碗片 (3)
瓦 碗 ^a 瓦瓦 (碗文)

5-105灰白色土
煤 灰 粉 ^a 灰c、基
土 灰 粉 ^a 灰c、灰a、灰a、把手、基a
黑色土器A 粉
瓦 碗 ^a 粉a
白 磁 碗: IV-VIII (2)
土 灰 品 滑石罐
石 器 品 滑石罐
瓦 碗 ^a 碗 ^a (碗、钵子)

S-105灰赤色土	
硬 度	硬 弱、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
瓦	磁片
植物遺体	根；I (1)
白	磁片；II (1)、IV-VIII (2)、V-1×VIII-2 (2)、瓦；磁片 (1)
灰 質	磁片
石 質	磁片、平玉石
瓦	磁片 (瓦、磁片)、瓦瓦 (無文)

S-105暗灰色土	
硬 度	硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
瓦	磁片
植物遺体	根；I (2)
植物遺体	根；I (2)
白	磁片；II (1)、IV (4)、IV-1a (1)、IV-1 (1)、IV-VIII (9)
灰 質	V-1×VIII-2 (3)、VIII (1)、XII-1b (1)、磁片 (1)
中 間 層	磁片 (1)、磁片 (1)
土 質	磁片
石 質	磁片、平玉石、石質
瓦	磁片 (磁片)、磁片、平瓦 (磁片、無文、瓦)

S-105灰赤色砂	
硬 度	硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
瓦	磁片 (磁片、瓦)

S-110	
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
瓦	磁片 (磁片、磁片)、平瓦 (無文)

S-110暗灰色土	
硬 度	硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
植物遺体	根；I
瓦	磁片 (磁片、瓦)、平瓦 (無文)

S-110暗灰色粘質土	
硬 度	硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
植物遺体	根、根
瓦	磁片 (磁片)

S-110砂	
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
白	磁片；V-1×VIII-2 (1)
平 の 地 質	

S-110暗灰色土	
硬 度	硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
瓦	磁片
植物遺体	根；I、II-2、III-1、III-2
白	磁片；I-2、VII×VIII白磁片、IV-VIII、XI-2?
瓦	磁片、平瓦 (磁片)、瓦瓦 (瓦)

S-110暗灰色土	
硬 度	硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
植物遺体	根；I (2)、I-1a (1)
白	磁片；I (1)、IV-1a (1)
土 質	砂、砂
灰 質	磁片
瓦	磁片 (磁片)、瓦瓦、平瓦

S-115黒灰色土	
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
植物遺体	根；II
白	磁片；IV (1)、磁片 (1)

S-115黒灰色土	
硬 度	硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
瓦	磁片
植物遺体	根；II-1 (1)、II-3×4 (1)、磁片 (1)
瓦	磁片 (磁片)、瓦瓦 (磁片)

S-115暗灰色土	
硬 度	硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
植物遺体	根；II (1)
白	磁片；II-1 (1)、II (1)、IV-VIII (1)
瓦	磁片 (瓦、磁片、無文)

S-115ウラゴ	
硬 度	硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
瓦	磁片 (無文)

S-115暗灰色土	
硬 度	硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
植物遺体	根；II (1)
白	磁片；II? (1)、IV-VIII (1)
瓦	磁片 (磁片)、瓦瓦、瓦瓦 (磁片)

S-115暗灰色粘質土	
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
植物遺体	根；I (1)
白	磁片；II (1)、III、V×VI (1)

S-120灰土	
硬 度	硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
植物遺体	根；I (1)
瓦	磁片 (磁片)

S-120灰土	
硬 度	硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
白	磁片；IV-1a、IV-VIII
植物遺体	根；II
瓦	磁片 (瓦、瓦瓦 (瓦)、平瓦 (瓦))

S-120灰砂	
硬 度	硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
植物遺体	根；I (2)
瓦	磁片 (磁片、磁片 (瓦))

S-120暗灰色土	
硬 度	硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
瓦	磁片
植物遺体	根；I、II-2、III-1、III-2
白	磁片；I-2、VII×VIII白磁片、IV-VIII、XI-2?
瓦	磁片、平瓦 (磁片)、瓦瓦 (瓦)

S-120灰色土	
硬 度	硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
植物遺体	根；I (1)
白	磁片；磁片 (1)
石 質	磁片 (2)
瓦	磁片 (瓦瓦)

S-120暗灰色土	
硬 度	硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬、硬
土 層	砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂、砂
黒色土層	砂、砂
黒色土層	砂、砂
植物遺体	根；(1)、磁片 (1)
灰 質	磁片 (1)
瓦	磁片 (瓦瓦 (無文)、平瓦 (磁片))

S-120辰橋色土	
須 恵 樹	環、環、環
土 師 樹	小皿a、丸环、丸c、環
黒色土器人	破片
黒色土器出	破片
越州焼土青磁	甕；I (3)、I-2 (1)
白 磁	甕；V-1×VIII-2 (1)、破片 (1)
須 恵 樹	土師、土師c
石 製 品	石帯 (丸刷)
瓦	刷平瓦 (無文、縄)

S-120辰橋色砂	
須 恵 樹	環、輪c、蓋3、蓋7、甕
土 師 樹	小皿a2、環a、丸环、輪c、高环、甕a、
黒色土器人	甕
黒色土器出	甕
白 磁	甕；IV (1)、IV-VIII (1)、蓋；破片 (1)、破片 (1)
越州焼土青磁	甕；I (2)、II (1)
灰 胎 陶 器	破片 (1)
石 製 品	淨石製石鏡
金 属 製 品	鉄釘
瓦	刷平瓦、平瓦 (縄)、丸瓦

S-120茶褐色土	
金 属 製 品	鉄釘

S-125	
須 恵 樹	環a、环c、蓋3、甕c、甕
土 師 樹	環a、环c、皿a、高环、甕a、甕 (角閃石入り)
瓦	刷瓦 (無)

S-130辰橋色土	
須 恵 樹	环c、蓋3、甕c、甕
土 師 樹	环a、輪c、甕c
黒色土器人	甕、甕
黒色土器出	破片 (1)
越州焼土青磁	甕；I (2)
緑 胎 陶 器	甕 (1)、破片 (1)
瓦	刷瓦 (無文)、平瓦 (縄、格子)

S-130辰橋色土層	
須 恵 樹	环c、蓋3、蓋c、高环、破片
土 師 樹	环a、环c、輪c、甕c、甕
黒色土器人	甕
黒色土器出	破片
越州焼土青磁	甕；I (2)
緑 胎 陶 器	甕 (1)、破片 (1)
瓦	刷瓦 (格子、縄)、丸瓦 (格子)

S-130辰橋色土層	
須 恵 樹	环a、环c、环、蓋3、蓋1、蓋c、甕c
土 師 樹	环a、輪c、輪c、甕c、甕a、甕b、甕 (角閃石入り)
黒色土器人	甕c
黒色土器出	破片
越州焼土青磁	甕；I (3)、I-1a (1)、I-5 (1)
緑 胎 陶 器	甕 (1)、甕 (3)、破片 (1)
灰 胎 陶 器	段蓋 (1)、破片 (1)
土 製 品	佛土鏡
石 製 品	平玉石
瓦	刷平瓦 (格子、縄)、丸瓦 (格子)

S-130ウラゴメ	
須 恵 樹	环a、环c、蓋c、蓋3、高环、甕c、甕c、甕
土 師 樹	环a、环c、輪c、小皿a、环a
越州焼土青磁	甕；I (3)
長沙焼土青磁	甕；(3)
土 製 品	土鏡
石 製 品	磁石
瓦	刷平瓦 (縄、格子)、丸瓦 (無文)

S-130明辰色土	
須 恵 樹	环a、环c、蓋1、蓋3、蓋c、高环、輪c、蓋7、甕、甕
土 師 樹	环a、环c、甕c、甕
黒色土器人	甕、高环
黒色土器出	破片 (1)
越州焼土青磁	甕；I (1)
白 磁	甕；I (1)
須 恵 樹	土師c
土 製 品	磁淨
瓦	刷平瓦 (縄、無文)

S-130神内	
須 恵 樹	环a、环c、甕
土 師 樹	环a、环c、輪c、甕a、甕b、甕 (角閃石入り)、甕a
白 磁	甕；I (1)、小皿型 (1)
越州焼土青磁	甕；I-1a (1)
緑 胎 陶 器	破片 (1)
瓦	刷平瓦 (縄、無文)

S-130辰橋色土	
須 恵 樹	环a、甕c、蓋3、皿a、甕c、甕
土 師 樹	环a、輪a、甕a、甕a
黒色土器人	甕
越州焼土青磁	甕；I、I-1a、I-2
緑 胎 陶 器	甕、甕
白 磁	甕；I-1
瓦	刷平瓦 (無文、格子、無文)、丸瓦 (無文)
石 製 品	磁石 (黒曜石)

S-130辰橋色土	
須 恵 樹	环a、环a、大环？、环、蓋3、高环、蓋1、甕c、甕b、甕
土 師 樹	环a、甕c、甕a、甕c、蓋3
黒色土器人	甕、甕
越州焼土青磁	甕；I-5 (1)
白 磁	甕；I-1 (1)
緑 胎 陶 器	甕 (1)、破片 (2)
瓦	刷平瓦 (無文、格子、縄)、玉縁 (格子、縄)、研丸瓦 (丸瓦 (無文、縄、格子))

茶土	
須 恵 樹	环a、蓋3、甕c、甕
土 師 樹	环a、环a (イ卜)、环、輪c2、高环、甕a、甕
黒色土器人	甕
瓦	刷破片
越州焼土青磁	甕；I (6)、II (3)
豊良焼土青磁	甕；I (2)
同安焼土青磁	甕；I-1b (1)
緑 胎 陶 器	甕 (1)、破片 (2)
灰 胎 陶 器	破片 (1)
肥前系陶磁器	破片

辰橋色土	
須 恵 樹	环a、蓋3、甕c、甕
土 師 樹	环a、环a (イ卜)、环、輪c2、高环、甕a、甕
黒色土器人	甕
瓦	刷破片
越州焼土青磁	甕；I (6)、II (3)
豊良焼土青磁	甕；I (2)
同安焼土青磁	甕；I-1b (1)
緑 胎 陶 器	甕 (1)、破片 (2)
灰 胎 陶 器	破片 (1)
肥前系陶磁器	破片
白 磁	甕；I-1 (1)、I-1 (1)、II-1 (1)、II-1 (1)、IV (4)、IV-VIII (2)、V-1×VIII-2 (1)、V-VIII (1)、V-VIII (1)、XI-1 (1) 蓋；V×VI (1)、III-1 (2) 破片 (3)
中 國 陶 器	甕；I (1)
輸入須恵 樹	朝鮮系黒胎陶器
土 製 品	磁淨
石 製 品	平玉石、黒曜石破片、淨石加工品
瓦	刷平瓦 (格子、縄、無文)
その他	乙一瓦、石炭

辰橋色土	
須 恵 樹	環、环c、环a、大皿c、蓋1、蓋3、蓋c、皿a、甕c、甕b
土 師 樹	环a、小皿a2、小皿a2、丸环 (イ卜)、丸环、环a (イ卜)、环a、輪c、蓋3、甕 (角閃石入り)、甕a、甕b、把子、高环
黒 色 土 器 人	破片、黒胎土器
黒 色 土 器 出	甕、甕
黒 色 土 器 出	甕
瓦	刷瓦
土 層 質 土 器 出	土師c
肥前系陶磁器	破片、甕
輸入須恵 樹	朝鮮系黒胎陶器
白 磁	甕；I (1)、I-1 (1)、II (1)、II-1 (1)、IV-VIII (29)、IV (7)、IV-1 (1)、V (2)、V-2 (2)、V-4c (2)、V-1×VIII-2 (4)、XI-3 (1)、VII (1) 蓋；II-2 (2)、I-1×VIII (1)、VI (1)、IX (1)、破片 (3) 破片 (2)、甕 (1)、破片 (3)

辰橋色土	
越州焼土青磁	甕；I (3)、I-1 (1)、I-2 (1)、I-2c (1)、I-5 (1)、I-5 (2) II (6)、II-2 (1)、II-2 (3) 大皿 (1)、木皿 (1)
長沙焼土青磁	破片？ (1)
豊良焼土青磁	甕；I (1)、IV (1)
同安焼土青磁	甕？ (1)
青 磁	破片 (2)
青 白 磁	破片？ (7)
中 國 陶 器	甕 (1)、水注V-VIII (1)、甕×甕 (2)
緑 胎 陶 器	甕 (3)、破片 (6)、蓋 (1)
灰 胎 陶 器	甕 (1)
須 恵 樹	甕
金 属 製 品	鉄淨、銅鏡、鉄釘、破片
土 製 品	カマド
石 製 品	淨石片、磁化木、加工品、平玉石、磁石、黒曜石破片、石鏡
瓦	刷瓦 (格子、縄、玉縁)、平瓦 (無文、格子、縄)、瓦瓦

辰橋色土	
須 恵 樹	环a、环c、蓋3、甕
土 師 樹	小皿a、环a、輪c、丸环、甕
黒色土器人	甕
黒色土器出	小皿a (へつ)、甕
瓦	刷平瓦 (格子、縄)

Z	
須 恵 樹	破片
土 師 樹	破片

S-120状土

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	小粒a	ヘラ	a-001	Fig.34-20	9.2	1.1*	15.0*	○	○
	+		a-002		(6.2)	1.1*	(6.4)	○	○
	+		a-003		(9.4)	1.1*	(7.4)	○	○
	+		a-004		(8.8)	1.0*	(6.2)	○	○
	+		a-005		(8.2)	0.9*	(7.4)	○	○
	実測値	+	a-006	Fig.34-11	(9.2)	3.4*	-	-	○

S-120砂

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	小粒a	ヘラ	a-001	Fig.34-20	16.3	1.1	(7.2)	○	○

S-130状土

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	小粒a	ヘラ	a-001	Fig.34-20	9.2	0.9*	(6.4)	-	-
	+		a-002		(9.4)	1.25*	(6.4)	-	-
	+		a-004	Fig.34-34	(14.0)	4.1*	(7.8)	-	-

S-130砂

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	小粒a	ヘラ	a-001	Fig.34-2	9.2	0.9	(6.0)	○	○
	+		a-002		-	1.9*	-	-	-

S-130砂状土

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	細a	ヘラ	a-001	Fig.34-26	(11.0)	2.6*	-	-	-

S-130砂状土

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	小粒a	ヘラ	a-001	Fig.34-10	9.0	1.3	(7.2)	○	○
	+		a-002	Fig.34-14	(9.2)	1.2	(6.0)	○	○
	+		a-004	Fig.34-15	(9.0)	1.35	(7.0)	○	○
	+		a-005	Fig.34-18	(10.0)	1.3	(7.8)	○	○
	実測値	+	a-006	Fig.34-18	(10.0)	1.3	(7.8)	○	○

S-135

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	細a	ヘラ	a-001	Fig.34-28		1.6*	(7.2)	-	-
	+		a-001	Fig.34-30		1.4*	(6.2)	-	-

S-130状土

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	小粒a	ヘラ	a-001		-	1.9*	(6.0)	○	○
	+		a-002		-	1.3*	(6.4)	-	-
	+		a-003		-	1.3*	(6.4)	-	-
	細a	+	a-004		-	3.3*	(8.8)	-	X
	+		a-001	Fig.38-34		1.9*	(7.2)	○	-
	+		a-005	Fig.38-35		1.5*	(6.4)	-	-
	細a	+	a-006		-	2.0*	(8.2)	-	-
	細a	+	a-006		-	2.0*	(8.2)	-	-
	細a	ヘラ	a-002	Fig.38-37		1.9*	(7.4)	○	X
	+		a-005	Fig.38-36		1.85*	(7.0)	-	X

S-130砂状土

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	細a	ヘラ	a-001		-	3.0*	(6.0)	-	○
	細a	+	a-009	Fig.27-2		3.05*	(8.2)	-	-
	+	ヘラ	a-006	Fig.27-4		3.25*	(7.4)	-	○
	細a	ヘラ	a-007	Fig.27-3	(14.2)	5.0*	-	-	X
	細a	+	a-002		-	1.9*	(8.0)	-	-

S-130状土

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	細a	+	a-004	Fig.27-2		2.8*	(7.4)	-	-
	+		a-007	Fig.28-26		2.3*	(7.2)	○	○
	+		a-008	Fig.28-28		2.15*	(7.2)	○	-
	+		a-009	Fig.28-24	(11.6)	3.9*	-	-	○
	+		a-010	Fig.28-25		3.2*	8.2*	○	X
	細a	+	a-011	Fig.28-30		3.55*	8.2	○	X
	小粒a	-	a-003		-	1.3*	(6.0)	-	-
	+	ヘラ	a-004		-	1.7*	(6.2)	-	-
	+	ヘラ	a-005		-	1.9*	(7.0)	-	-
	細a	ヘラ	a-001		-	1.9*	(7.0)	-	-
	+		a-003		-	1.5*	(6.4)	-	-
	細a	+	a-003	Fig.28-30		2.65*	(7.2)	-	-

S-130状土

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	細a	ヘラ	a-001		-	2.0*	(8.0)	-	-
	+		a-001	Fig.27-11	(12.0)	3.35	(6.4)	○	-
	細a	-	a-002		-	2.1*	(8.4)	○	X
	+	ヘラ	a-003		-	2.6*	(7.4)	-	X
	+	ヘラ	a-002	Fig.27-18		2.8*	(8.8)	○	X
	細a	+	a-003	Fig.27-18		2.3*	(8.0)	○	○

S-130状土

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	細a	ヘラ	a-001		-	1.9*	(7.4)	-	X
	+		a-001		-	2.6*	(7.0)	○	○
	+		a-005	Fig.27-10	(2.8)	3.6*	7.2	-	○
	+		a-006	Fig.27-4	(11.8)	3.1	7.0	○	○
	細a	ヘラ	a-002		-	2.3*	(7.2)	○	○
	+		a-008	Fig.27-13		7.2	-	-	○
	細a	ヘラ	a-003	Fig.27-13	(14.4)	3.8	7.8	-	○
	+		a-004	Fig.27-13	(15.2)	5.3	7.8	○	○
	+		a-007	Fig.27-14		(8.0)	-	-	○
	細a	+	a-004		-	2.3*	(7.4)	-	-
	+		a-009	Fig.27-17		-	7.0	-	-

S-130砂

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	細a	+	a-002	Fig.38-40		2.5*	(7.4)	-	-
	細a	+	a-001	Fig.38-41		1.5*	(6.2)	-	-
	細a	+	a-002	Fig.38-40		3.15*	-	-	-
	細a	+	a-006	Fig.38-42		2.45*	(7.4)	-	-

S-130クワダ

種別	群 種	透水性	透水性	透水性	口径	透率	透率	A	B
土	小粒a	ヘラ	a-001		-	1.3*	(6.0)	-	-
	+		a-001		-	1.0*	(6.0)	○	○
	細a	+	a-002	Fig.28-47	(2.0)	3.15	6.8	○	○
	+		a-004	Fig.28-49		2.25*	(7.2)	○	○
	+		a-005	Fig.28-48		1.9*	(7.2)	○	○
	細a	+	a-003		-	1.3*	(6.0)	-	-
細a	+	a-003	Fig.28-50		3.1*	6.2	-	X	

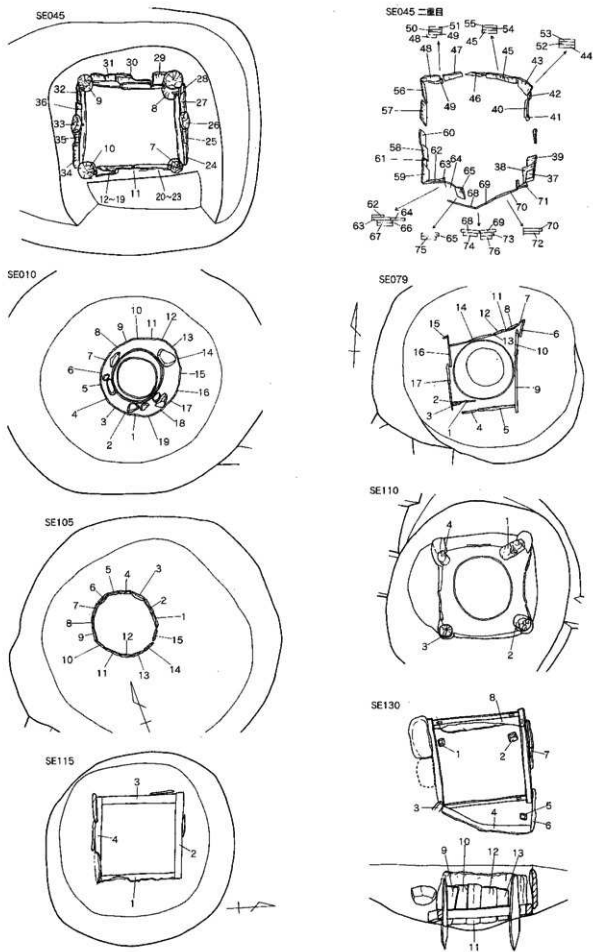


Fig43 井戸枠部材取り上げ図

Tab.6 大宰府条坊跡第199次調査鉄製品計測表

灰褐色土

図版番号	R番号	長さ	最大幅
Fig.36-20	R-001	7.1+	0.5
Fig.36-22	R-002	5.5+	1
Fig.36-24	R-003	7.0+	1.7
Fig.36-21	R-004	3.1+	0.5

SE010黒灰色土

図版番号	R番号	長さ	最大幅
Fig.15-5	R-001	9.0+	1.4

SE029暗灰色土

図版番号	R番号	長さ	最大幅
Fig.17-13	R-001	6.2+	0.3

SD080黒灰色土

図版番号	R番号	長さ	最大幅
Fig.30-24	R-001	5.8	0.4
Fig.30-25	R-002	7.25	0.5
Fig.30-23	R-003	13.6+	0.5
Fig.30-26	R-004	10.2+	0.4
Fig.30-27	R-005	3.4+	0.55

SK085

図版番号	R番号	長さ	最大幅
Fig.33-10	R-001	5.2+	1.2

SK120灰褐色砂

図版番号	R番号	長さ	最大幅
Fig.34-4	R-001	4.6+	0.7

SK120茶褐色土

図版番号	R番号	長さ	最大幅
Fig.34-19	R-001	7	0.7

SK120灰土

図版番号	R番号	長さ	最大幅
Fig.34-20	R-001	5.6+	1

写真図版

※写真中の番号は、図版番号を示す。

例 33 - 1

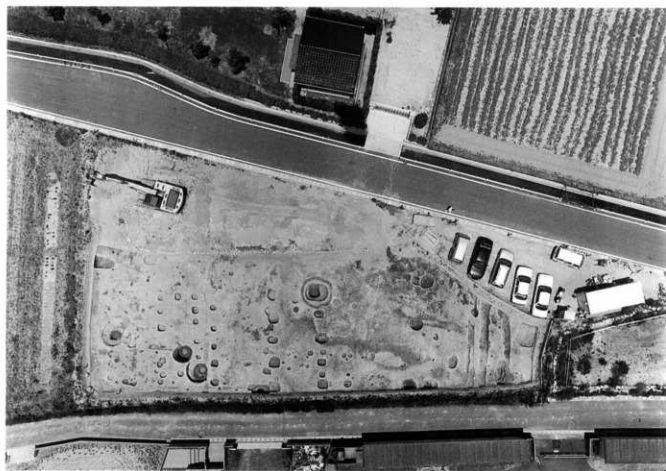
Fig.番号 挿図番号



調査区全景および周辺調査合成写真（上が東）



第199次調査北側全景（南から、空中写真）



第199次調査南側全景（南から、空中写真）



第199次調査南北道路全景（南から・空中写真）



第199次調査掘立柱建物全景（北から・空中写真）



SB020, SA035完掘状況（北から）



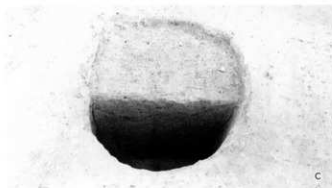
SB060, SA135完掘状況（北から）



SB020掘り方土層状況 (南から)

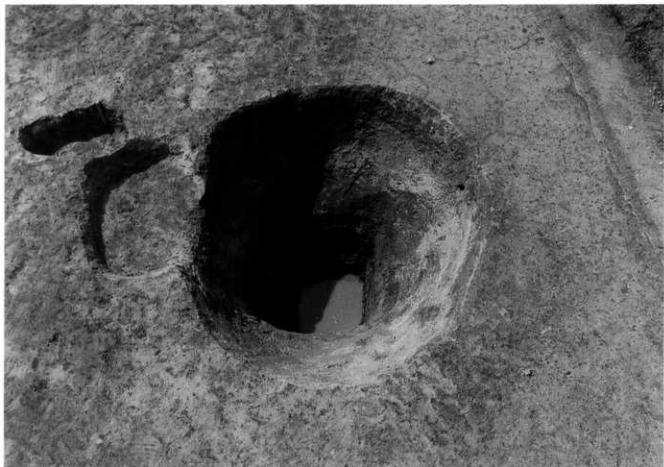


SB020掘り方土層状況 (南から)



SA035掘り方土層状況 (南から)





SE001完掘状況（北から）



SE001井戸枠状況（北東から）



SE010検出状況（北から）

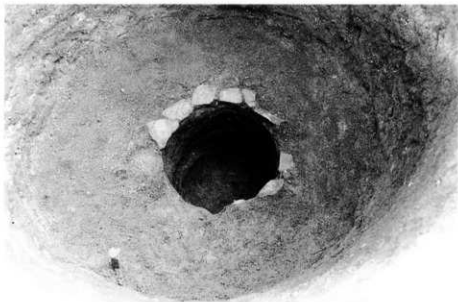


SE010曲物検出状況（西から）



SE010井戸枠検出状況（南から）

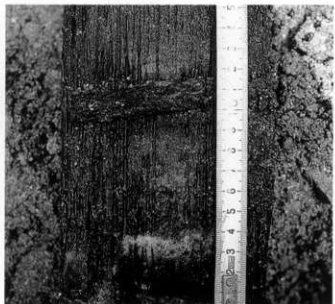
第199次調査SE010ウラゴメ土中
石囲い検出状況（北から）



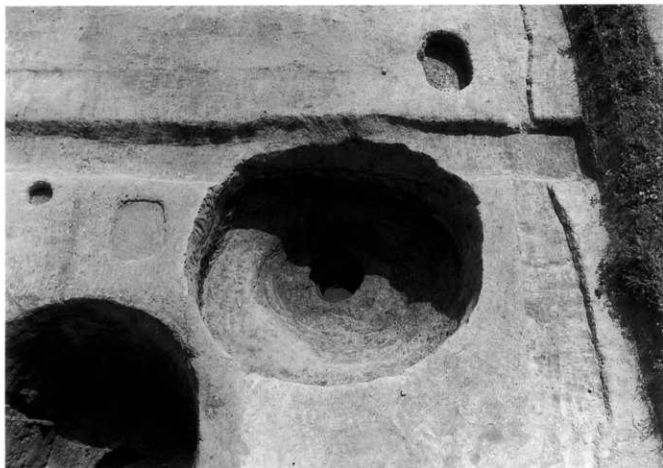
SE010井戸枠詳細状況（西から）



SE010井戸枠除去状況（北から）



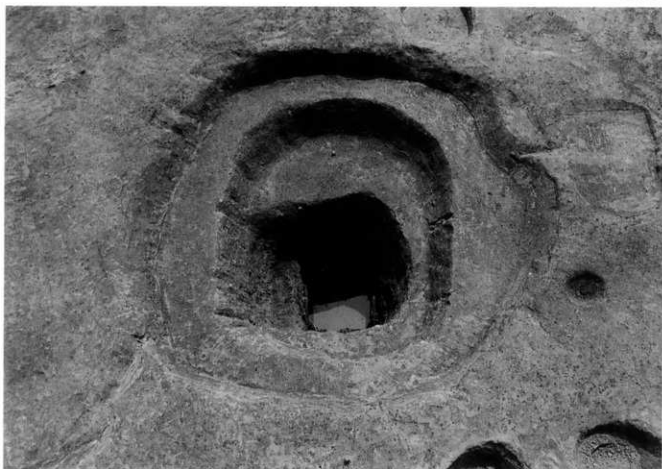
SE010井戸枠タガ状況



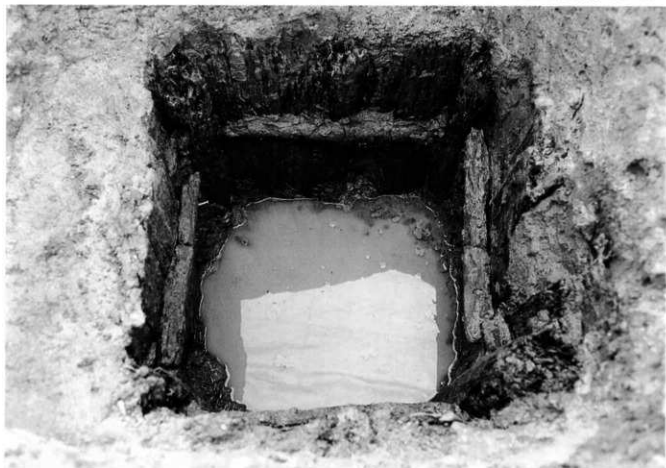
SE015検出状況（西から）



SE029検出状況（北から）



SE045検出状況（西から）



SE045井戸枠検出状況（西から）



SE045井戸枠内土器出土状況
(東から)



SE045井戸枠支柱、横棧接続
状況(南から)



SE045井戸枠詳細状況
(東から)

SE045井戸枠詳細状況
(北西から)

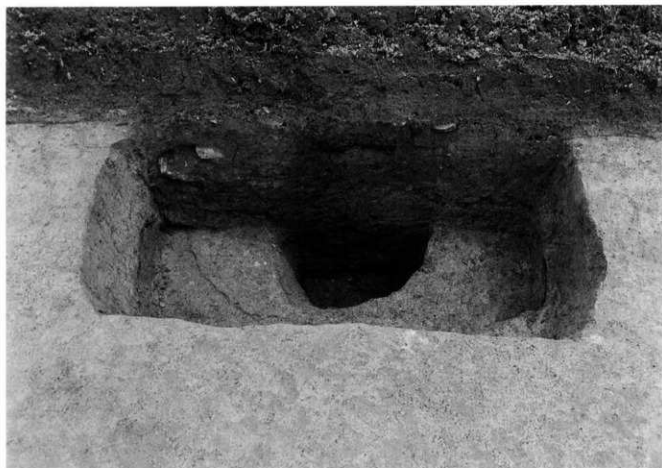


SE045井戸枠裏側板材状況
(北から)



SE045井戸枠裏側板材状況
(南から)





SE050検出状況（北から）



SE050土層観察状況（北から）



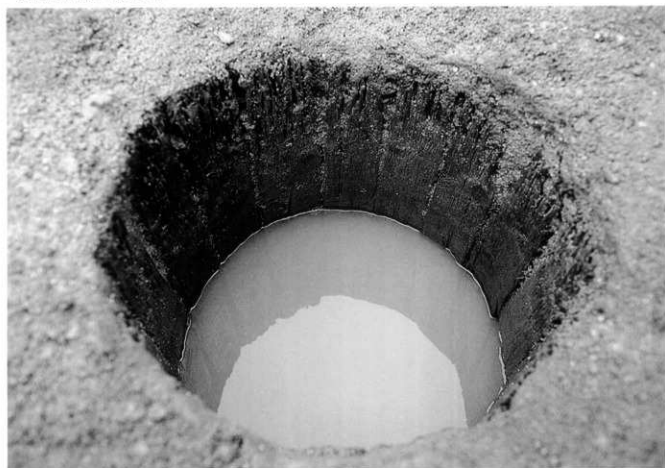
SE079検出状況（東から）



SE079井戸枠状況（東から）



SE105検出状況（北西から）



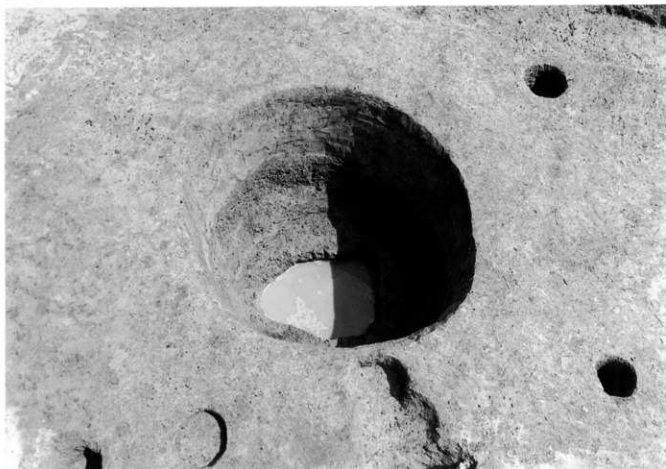
SE105井戸枠検出状況（北東から）



SE110検出状況（西から）



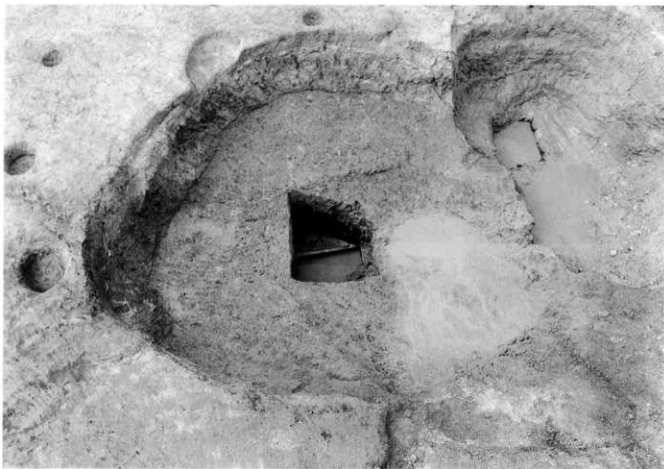
SE110甕検出状況（南から）



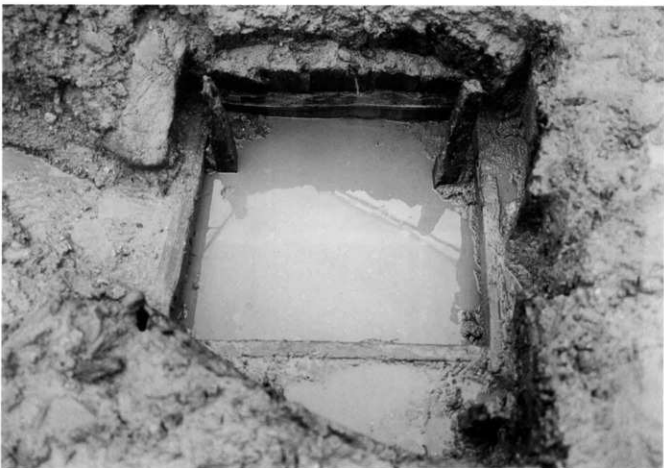
SE115検出状況（南から）



SE115井戸枠検出状況（北から）



SE130検出状況（南から）



SE130井戸枠検出状況（北から）



SD040土層観察状況（北から）



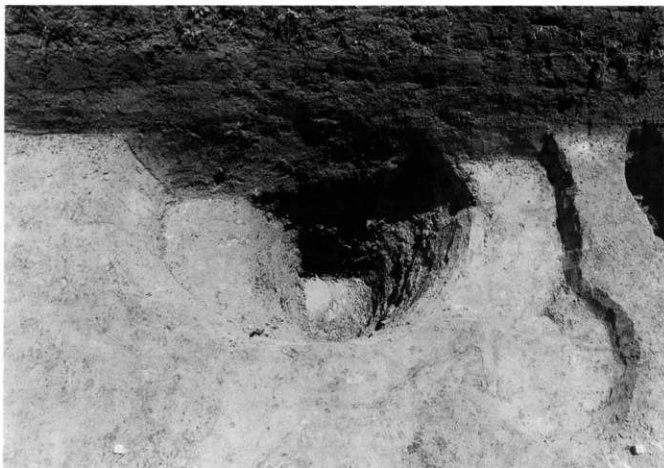
SD070土層観察状況（北から）



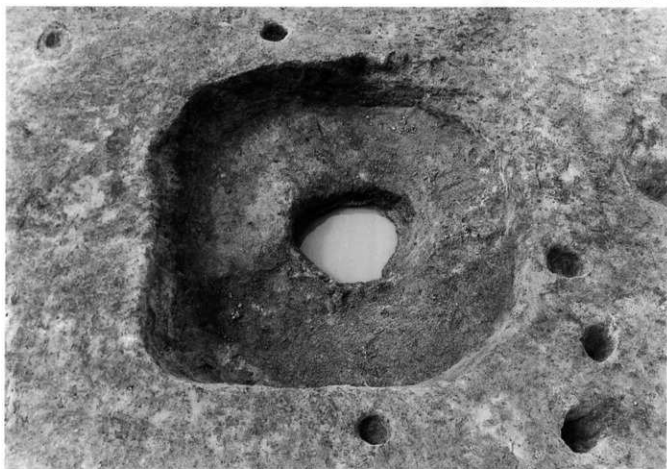
SD075土層観察状況（北から）



SD080土層観察状況（北から）



SK065検出状況（北から）



SK120検出状況（北から）



14-3



14-4

SE001出土土器



14-15



15-18



15-25

SE010出土土器



16-1



16-2



16-2細部



16-3

SE010出土井戸部材



16-4



16-5



16-6



16-7



16-8



16-9



16-10



16-11

SE010出土井戸部材



15-30



15-33



15-41

SE015出土土器



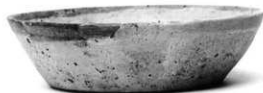
18-1



18-8



18-11



18-19

SE045暗茶色出土土器



17-2



17-7



17-9



17-16

SE029出土土器



19-40



19-41



19-43

SE045出土土器



19-45



19-46



19-50



19-51

SE045 枠内出土土器



19-57



20-1



20-3

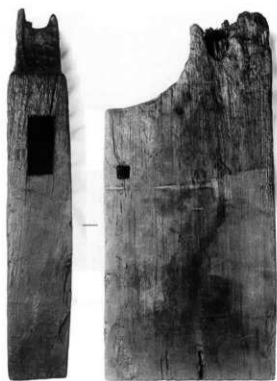


部材端部切断状況



部材端部切断状況

SE045 出土井戸部材



20-2側面

20-2裏面



20-4



20-5



20-2



20-6

SE045出土井戸部材



20-7

20-8



20-8先端部



20-9

SE045出土井戸部材



21-11



21-12



21-17



21-12加工痕

SE045出土井戸部材



21-13



21-16



21-14

SE045出土井戸部材



21-15



22-5



22-14



22-15

SE079出土土器



22-12

SE050出土遺物



22-20



22-21



22-22



22-30



22-31

SE079出土土器



23-1



23-2



23-4

SE079出土井戸部材



23-5

SE079出土井戸部材



24-19



24-20



24-24



24-21



24-26 SE110出土土器



24-7

SE105暗灰色土出土遺物



25-2



25-4



25-11 SE115出土土器



26-1



26-2

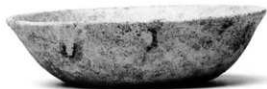


26-3



26-4

SE115出土井戸枠部材



27-9



27-10



27-12



27-13



27-19



28-31



27-6



27-20



28-47

SE130出土土器



28-51

SE130出土遺物



26-5



26-6



26-9



26-7



26-8



26-10



26-6細部
SE130出土井戸枠部材



29-4

SD025出土土器



29-15



29-33内面



29-32内面



29-33外面



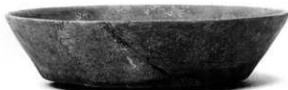
29-32外面



29-14



29-16



29-25



29-26

SD070出土土器



30-2



30-10



30-13

SD080出土土器



31-15

SK031出土石器



31-16



31-18



31-19



31-17

SK044出土遺物



31-21内面

SK046出土土器



32-6



32-11



32-7



32-12



32-14



32-13

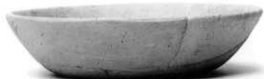


32-21



32-24

SK065出土土器



33-14



33-17



33-16

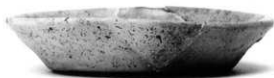


33-21

SK100出土土器



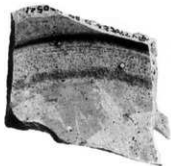
33-1



33-2



33-12



SK085出土土器

33-9



34-7



34-10



36-7

灰褐色土出土墨書土器



34-13

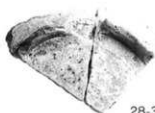
SK120出土遺物



24-25



28-39



28-32



31-23



34-25



29-13

第199次調査出土緑軸陶器



30-23



30-26



30-25



30-24



36-20



36-22



24-23



17-13



34-19



33-10



15-5

第199次調査出土鉄製品

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうほうあと									
書名	大宰府条坊跡 20									
新書名	第199次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	60集									
編著者	宮崎亮一、森田レイ子									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2002（平成14）年3月31日									
ふりがな	条坊	ふりがな	コード		座標		調査期間		調査面積	調査原因
所収遺跡名	【隼山指定案】	所在地	市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	㎡	
だざいふじょうほうあと 大宰府条坊跡 第199次	左第10条1坊	太宰府市 朱雀4丁目	402214	210044-199	56073.290	-44732.690	19980317	19980721	905	市営住宅建設
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構			主要遺物			特記事項	
大宰府条坊跡 第199次	大宰府条坊	奈良 平安、中世	獨立柱建物	道路	溝	土師器	須恵器	緑釉陶器	灰釉陶器	
			井戸			唐書土器	木製品	石沓		

太宰府市の文化財 第60集

大宰府条坊跡

—第199次調査—

平成14年3月

編集 大宰府市教育委員会
発行 大宰府市観世音寺1-1-1印刷 (株)三光 福岡営業所
福岡市博多区山王1-14-4